

60-271

日本赤十字社編纂

電着車送教程

明治四十四年刊行

全
44. 1. 20

勅語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト
深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世世厥
ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ
此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ
恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ
啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重
シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇
運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルソミナラ
ズ又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン

斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守
スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕
爾臣民ト俱ニ拳拳服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

御名御璽

救護員ニ賜リタル御諭旨

日本赤十字社ハ

天皇 皇后兩陛下眷護ノ下ニ立チ政府ノ監督ヲ受ケ海外各社
ト同盟聯伍スル所ノ團體ニシテ其目的ハ戰時ノ傷者及病者ヲ
救護スルニ在ルヲ以テ國家有事ノ日ニ方リ其任務ヲ全クスル
ハ專ラ救護員ノ力ニ賴ラサルヲ得ス是レ本社力年來救護員ノ
準備ニ務メ其選擇養成ニ苦心スル所以ナリ

明治二十七八年ノ戰役ニ於テ軍衛衛生部ノ事業ヲ助ケ
兩陛下ヨリ優渥ナル 勅語令旨ヲ賜ハリ又三十三年ノ北清事
變ニ際シ彼我ノ患者ヲ救護シテ廣ク内外ノ稱讚ヲ受ク尋テ三

十四年勅令ヲ以テ日本赤十字社條例ヲ發布セラレ救護員ハ軍人ニ准スルノ待遇ヲ得本社ノ光榮洵ニ大ナリト雖モ其責任モ亦重キヲ加ヘタリ況ヤ赤十字條約ヲ海戰ニ應用シ事業ノ範圍爲メニ廣汎ヲ致ス救護員タル者ハ其職責最モ重大ナリト謂フヘシ因テ茲ニ其要領ヲ示シテ遵守スル所ヲ知ラシム

一 篤ク本社ノ主旨ヲ體シ

天皇 皇后兩陛下 一視同仁ノ聖意ヲ奉シ忠愛ナル衆社員ノ心ヲ心トシ勤勉以テ其職ヲ盡スヘシ

一 陸海軍ノ衛生勤務ヲ幫助スルニ當リ能ク法令規律ヲ守リ服從敬禮ノ道ヲ失フヘカラス

一 患者ヲ救護スルハ彼我ノ別ナク懇篤深切ヲ旨トスヘシ

一 品行方正ニシテ風紀ヲ保持シ艱苦ヲ忍ヒ缺乏ニ耐ヘ能ク其任務ヲ完クスヘシ

一 各其分限ヲ守リ同心協力以テ全體ノ効績ヲ舉クルコトニ勗ムヘシ

以上數項ノモノ一モ之ヲ闕クコトアラハ戰時救護ノ目的ハ完全ニ達スルヲ得ヘカラス救護員タル者ハ常ニ此旨ヲ服膺シ至誠以テ報効ヲ圖リ本社ノ光輝ヲ發揚センコトヲ望ム

明治三十六年十二月十八日

日本赤十字社總裁
大勳位功四級 載 仁 親 王

四

凡 例

- 一 本書ハ日本赤十字社救護輸送人生徒及救護輸長候補生ノ爲ニ編纂セルモノナリ
- 二 書中四號活字ヲ以テ掲載セル事項ハ救護輸送人生徒ニ五號活字ヲ以テ掲載セル事項ハ救護輸長候補生ニ教授スルモノトス
- 三 第二編及第三編ハ法令規則ニ關スル事項ナルニ依リ其ノ法規ニ改廢アルトキハ之ヲ參照シテ教授スルヲ要ス

明治四十四年一月

日本赤十字社

患者輸送教程

目次

第一編 修身	一
第二編 赤十字事業ノ要領	五
第一章 赤十字事業ノ起原及赤十字條約	五
第一 赤十字事業ノ起原	五
第二 赤十字條約	十四
第三 殊別記章	四十二
第二章 日本ニ於ケル赤十字事業	四十五
第一 日本赤十字社ノ主旨沿革	四十五
第二 日本赤十字社ノ組織	四十九

第三編 戰時救護事業	五十六
第四章 天災救護事業	五十九
第三章 救護員	六十
第一 資格、地位	六十
第二 禮式	六十四
第三 服從、敬稱、稱呼	七十六
第四 服制	八十
第五 服裝	八十八
第三編 陸海軍ノ制規及陸軍衛生勤務ノ要領	九十二
第一章 陸軍軍屬讀法	九十二
第二章 陸軍ノ戰時勤務	九十三

第一 戰時衛生機關	九十四
第二 戰時衛生勤務ノ大要	百一
其一 患者ノ還送	百一
其二 患者ノ遺言	百九
其三 死者ノ處置	百十
第四編 人體ノ構造及其ノ作用	百十三
第一章 人體外部ノ名稱	百十三
第二章 骨	百二十
第三章 骨ノ結合	百二十二
第四章 筋	百二十三
第五章 循環器	百二十三

第六章	神經系及五官	百二十七
第七章	呼吸器	百二十九
第八章	榮養器	百三十
第九章	泌尿器	百三十一
第五編	繃帶	百三十二
第一章	繃帶ノ効用	百三十二
第二章	三角巾ノ用法	百三十四
第三章	卷軸帶ノ用法	百四十三
第六編	携行衛生材料	百五十一
第一章	擔架	百五十一

第二章	繃帶囊	百五十二
第七編	救急	百五十八
第一章	一般ノ注意	百五十八
第二章	創傷	百六十
第三章	出血及止血	百六十六
第四章	骨折及脫臼	百七十四
第五章	急病	百七十八
第一	卒倒	百七十九
第二	中毒	百八十
第三	腸病	百八十一
第四	窒息	百八十二

第五	咬傷、螫傷	百八十三
第六	火傷、電氣傷	百八十三
第七	凍傷	百八十四
第八	凍死、假死	百八十五
第九	溺水	百八十六
第十	埋沒假死	百八十七
第六章	人工呼吸法	百八十七
第八編	衛生	百九十
第一章	途上保健ノ注意	百九十
第二章	傳染病ノ豫防	百九十二
第三章	傳染病ノ種類	百九十五

第一	虎列刺	百九十六
第二	ペスト	百九十七
第三	腸窒扶斯	百九十八
第四	赤痢	百九十九
第五	結核	二百一
第六	麻刺利亞	二百二
第七	花柳病	二百三
第八	トラホーム	二百四
第九編	擔架教練	二百六
第一章	擔伍ノ編成	二百六
第二章	擔架ノ取扱	二百十一

第三章 擔伍ノ運動

二百二十一

第十編 患者ノ運搬

二百二十八

第一章 患者運搬上ノ注意

二百二十八

第二章 徒手ニテスル運搬

二百三十三

第一 一人ニテスル運搬

二百三十四

第二 二人ニテスル運搬

二百三十六

其一 坐位ニテスル運搬

二百三十六

其二 臥位ニテスル運搬

二百三十八

第三章 擔架ニテスル運搬

二百四十二

第一 擔架ニ載スルコト

二百四十三

其一 四人ニテ擔架ニ載スルコト

二百四十三

其二 三人ニテ擔架ニ載スルコト	二百四十五
其三 二人ニテ擔架ニ載スルコト	二百四十五
第二 擔架上ノ位置	二百四十六
第三 擔伍ノ行進及交代	二百四十八
其一 行進	二百四十九
其二 交代	二百五十
第四 障礙物ヲ越スコト	二百五十二
第五 阪路ヲ運搬スルコト	二百五十八
第六 階段ヲ昇降スルコト	二百五十九
第七 馬ヨリ卸スコト	二百五十九
第四章 車ニテスル運搬	二百六十三
第一 車ニ載スルコト	二百六十三

第二章	車ヲ行ルコト車ヨリ卸スコト	二百六十九
第五章	鐵道ニテスル運搬	二百七十
第一	輕便鐵道車	二百七十
其一	構造	二百七十
其二	車上ノ裝置	二百七十二
其三	輕便鐵道車ニ於ケル患者ノ載セ卸シ	二百八十八
第二	補助病院列車	二百八十八
其一	補助病院列車ノ裝置	二百八十八
其二	列車ニ於ケル患者ノ載セ卸シ	二百八十九
第六章	水路ニテスル運搬	二百九十四
第一	病院船患者船	二百九十四

第二	船ニ於ケル患者ノ載セ卸シ	二百九十五
第十一編	運搬具ノ急造	三百
第一章	急造ノ注意	三百
第二章	急造擔架、擔架蓋	三百二
第三章	急造車	三百十
第四章	馬ノ應用	三百十五
第十二編	天幕及炊爨	三百十九
第一章	天幕ノ建設	三百十九
第二章	炊爨	三百二十五

患者輸送教程

第一編 修身

日本赤十字社編纂

日本赤十字社救護員ハ教育ニ關スル勅語總裁殿下癸卯ノ御諭旨ヲ奉體シ竝日本赤十字社救護員心得書ノ要項ヲ恪守シテ報國恤兵ノ主旨ニ準據シ益慈愛ノ情念ヲ深クシ心身ノ勞苦ヲ厭ハス以テ職責ノ本分ヲ竭シ敢テ怠ルコト莫ルヘシ

日本赤十字社救護員心得

- 一 日本赤十字社救護員タル者ハ社旨ニ遵ヒ報國恤兵ノ大義

- ヲ盡スヘキハ勿論畏クモ 天皇陛下カ軍人ヲ以テ股肱トシ玉フ深遠ノ聖慮ト皇后陛下カ常ニ傷兵救護ノ事業ヲ眷護シ玉フ宏大ノ慈仁トヲ奉體シ衆社員ノ忠愛心ヲ代表シ一意勤勉以テ能ク其ノ實効ヲ奏スヘシ
- 一 救護員ハ陸海軍衛ノ命令ニ依リ衛生勤務ヲ幫助スルモノナレハ陸海軍ノ法令規律ヲ遵守スヘシ
- 一 軍人ニ對シテハ常ニ敬禮ヲ厚クシ殊ニ傷病兵ニ對シテハ專ラ敬愛懇篤ヲ旨トスヘシ
- 一 救護員ハ個人的功名心ヲ舍テ同心協力以テ全體ノ成功ヲ期スヘシ

- 一 救護員ハ品行ヲ正クシ能ク艱苦ト缺乏トニ耐ヘ苟モ本社ノ體面ヲ損スルカ如キ所爲アルヘカラス
- 一 救護員ハ官衙其ノ他ノ取扱若ハ待遇上ニ於テ假令其ノ意ニ適ハサルコトアルモ之ヲ辭色ニ顯ササル様深ク慎ムヘキモノトス
- 一 救護員ノ上級者ハ下級者ノ模範トナルヘキモノナレハ各率先戒慎ヲ加フヘシ

- 一 凡ソ部下ヲ薰率スルニハ威嚴ト愛撫トヲ兼ネ寬宥ニ流レズ苛酷ニ失セス尤愛憎偏頗ヲ慎ミ諸事公平ヲ失ハサル様深ク注意スヘシ

- 一 救護員ハ各職責ヲ帶ヒテ勤務ニ服スルモノナレハ指揮監督者ノ許諾ヲ得スシテ猥リニ職務ヲ離ルヘカラス
- 一 救護員中職務權域ヲ異ニスル者ハ各其ノ分ヲ嚴守シ協和ヲ保ツヘシ
- 一 以上ノ各項ハ天災事變ニ當リ派遣スル救護員ニ在テモ亦之ヲ服膺スヘシ

第二編 赤十字事業ノ要領

第一章 赤十字事業ノ起原及赤十字條約

第一 赤十字事業ノ起原

西曆千八百六十三年瑞西國「ジエネヴァ」ニ開設シタル萬國會議ノ決議セル萬國共通ノ規約ニ依リ戰時軍衛ノ衛生勤務ヲ幫助スルヲ以テ主旨トシ各本國政府ノ公認ヲ得テ設立セル救恤協會ハ所謂赤十字社ニシテ本社ハ赤十字條約及同條約ノ原則ヲ海戰ニ應用スル條約ノ主義ニ從ヒ以テ其ノ事業ヲ實行スルモノナリ今其ノ起原ヲ繹ヌルニ千八百五十九年伊佛二國ノ聯合軍塙軍ト對抗

シ有名ナル「ソルフエリ」ノ劇戰ヲ演シタリ時ニ瑞西國ニ「ヘン
リー、ヂュナン」ト呼ヘル志士アリ常ニ戰時軍人傷病者ノ苦痛ヲ
憐ミ如何ニモシテ之カ救助ノ方法ヲ講セントノ志ヲ抱キシカハ
此ノ戰役ニ方リ親シク患者ノ實況ヲ視察セント欲シ佛軍ニ隨從
シテ戰地ニ赴キタリ不幸ニシテ此ノ役負傷者及病者ノ夥シキコ
ト未タ其ノ比ヲ見サル所ニシテ而モ軍隊衛生部ノ力普ク之ニ及
フコト能ハス尤慘狀ヲ極メタリ「ヂュナン」之ヲ目撃シテ哀痛ノ
情ニ堪ヘス自ラ手ヲ下シテ救護慰撫ニ努メタルノミナラス戰
地ノ住民ヲモ憐シテ共ニ軍醫ヲ助ケ大ニ患者ヲ喜ハシメタリ
「ヂュナン」思ヘラク「縱令如何ニ軍隊所屬ノ衛生隊カ用意周到ヲ

極ムトモ遂ニ大戰ノ用ニ當ルヘカラスサレハ民間ニ救助協會ヲ
設ケ以テ救護事業ヲ補ハサルヘカラス」ト乃チ役訖ルノ後此ノ
所信ノ貫徹ニ熱中シタリシカ「ジエ、ネヴァ」公益協會ノ有力ナル
後援ヲ得ルニ及ンテ決然其ノ企望ヲ天下ニ訴ヘント欲シ千八百
六十二年「ソルフエリ」ノ紀念」ト題スル一書ヲ著ハシ「ソルフエ
リ」ノ役ニ於ケル負傷兵士カ如何ナル苦難ニ遇ヒツ、アリシ
カヲ記述シ其ノ苦難ヲシテ斯ク酷タシカラシメタルハ畢竟醫務
ノ準備足ラサルニ因ルコトヲ證明シ併セテ此ノ不備ヲ補フノ
方案トシテハ有志ノ救助協會ヲ各國ニ設立シ戰爭ニ際シテ負傷
兵士ヲ看護スルヲ以テ其ノ事業ト爲スヘシトノ意見ヲ公ニセリ

「ヂュナン」カ斯克志ヲ堅クスルニ至リシモノ其ノ原因種々アルヘシト雖蓋シ千八百五十四年「クリミヤ」戰ニ於ケル「シャルロット、ウエルタン、ペール」王妃及「フロレンス、ナイチンゲール」嬢ノ美舉ハ「ヂュナン」ヲシテ尤欽慕ノ念ヲ惹起セシメタルカ如シ此ノ事ニ關シ「ソルフエリ」ノ「紀念」ニ叙セル一節ヲ見ルニ曰ク殊ニ東方戰ニ關スルニ大美事ヲ記述スヘシ而シテ此ノ事タル余輩ノ達セント欲スル目的ニ直接ノ關係ヲ有ス「ミツセル」大公爵ノ未亡人ニシテ「ヘレス、ポロウナ」大公爵ナル「シャルロット、ウエルタン、ペール」王妃ハ大約三百人ノ婦人ト共ニ「露都」セントペテルスブルグヲ發シ「クリミヤ」ニ到リ病院ニ於テ看護婦ノ勤務ニ服シタリ之カタメ數千ノ露兵ハ歡喜雀躍シテ此ノ輩ヲ祝賀シタリ東方戰中千八百五十四年乃至五十五年ノ冬期ニ於テ「露國皇帝」アレキサンドル「第二世」クリミヤノ諸病院ヲ巡覽セリ此

ノ威權赫赫タル君主ハ人ト爲リ英邁大度仁德兼備ノ明主ナルヲ以テ悲慘ノ現狀ヲ目撃シ大ニ感動ヲ惹起シ忽チ講和ニ決定シテ無數ノ臣民ヲシテ爾後永ク此ノ殺傷ノ慘毒ヲ免レシメタリ一方ニ於テハ「フロレンス、ナイチンゲール」嬢ナルモノアリ斷然華美ノ虛飾ヲ廢棄シ人世ノ福祉ヲ増進セント心ニ誓ヒ英國ノ諸病院及歐洲大陸著名ナル慈惠院ヲ巡視シ大ニ感スル所アリ是ニ於テ英國ノ陸軍大臣秘書官「ロール、シドニー、ハーバート」ノ懇請ニ應シ東洋ニ在ル英國兵士ノ看護ニ從事スルニ至レリ名聲噴噴タル「ナイチンゲール」嬢ハ毫モ躊躇スルコトナク此ノ美舉ヲ實行シタリ何トナレハ嬢ハ固ヨリ此ノ事ニ同感ヲ表スレハナリ千八百五十四年十一月三十七人ノ英國婦人ト共ニ「コンスタンチノープル」及「スキュータリ」ニ向ツテ出發シ著後直ニ夥多ノ患者ヲ看護セリ爾來翌千八百五十五年ニ至ルマテ

實ニ長日月間嬢ノ爲シタル諸般ノ事業ハ畢竟仁愛ノ熱情ニ因ラス
ンハアラサルナリ(嬢ハ夜間手ニ小燈ヲ携ヘテ陸軍病院ノ廣大ナル
寢室ヲ巡視シ最必要ナル苦痛軽減ノ手段ヲ爲サンカタメ各患者ノ
病狀ヲ記註セリ此ノ歎賞スヘキ仁惠ニ與リシ者及之ヲ聞見セシ者
ハ終始記憶ニ存シテ之ヲ忘レサルヘシ蓋シ嬢ノ壯快神聖ナル忠誠ハ
永ク青史ニ燦爛タル光輝ヲ放チテ湮滅スルコトナカルヘシ嗚呼亦
偉ナル哉然レトモ此ノ類ノ忠誠ニシテ世ニ顯ハレサルモノ往往ニシ
テ之アルハ何ソヤ是レ協同一致ノカヲ缺キ箇箇ニ分離セシノ致ス
所ナリト謂ハサル可ケン哉)且大ニ各國ノ人心ヲ感動セシメ帝王、
后妃其ノ他官民ノ有力者續續之ヲ贊助シ就中「ジエネヴァ」公益協
會ハ進ンテ之カ實行ノ衝ニ當リ各國ノ間ニ斡旋シ遂ニ歐洲各國

ニ於テ顯要ノ地位ニ居リ又ハ著名ノ人士ニ招狀ヲ送り千八百六
十三年十月「ジエネヴァ」ニ於テ各國代表者二十六名ヲ以テ萬國
會議ヲ開キ赤十字規約ヲ協定スルニ至リシナリ爾來各國ニ於テ
ハ看護協會ヲ設ケテ赤十字社ト稱シ「ジエネヴァ」ニ萬國赤十字
中央社ヲ設ケ一般赤十字事業ノ便益ヲ圖リ各國赤十字社ノ交
通ヲ媒介スルノ任ニ當ラシムルモノトセリ赤十字規約八十箇條
ヨリ成レリ其ノ二三ノ要點ヲ舉クレハ各國便宜ノ方法ニ依リ
中央社及支社ヲ設置シ戰爭アルニ臨ミ軍陣醫療ノ業ヲ幫助ス
ルコト平時ニ於テ戰時ノ準備ヲ爲スタメ救護材料ヲ具備シ且救

護員ヲ養成スルコト救護員ニハ白地赤十字ノ臂章ヲ附スルコト等トス

千八百六十三年ノ萬國會議ニ於テハ救護員及病院用器具ニ赤十字ヲ附シタルモノハ侵スヘカラストノコトヲモ決議シタリシカ此ノ決議ハ各國政府ニ於テ國際條約ヲ結フニアラサレハ其ノ效果ヲ得難キモノナリシカハ瑞西國聯邦政府ハ歐洲各國及亞米利加ノ數國ニ對シ公式ノ招狀ヲ發シタレハ千八百六十四年八月十六箇國ノ代使二十六名「ジエネヴァ」ニ會シ赤十字條約ヲ締結スルニ至レリ是ニ於テ赤十字規約ノ目的ハ確實ニ遂行スルヲ得ルコトハナレリ萬國赤十字總會ハ赤十字規約ニ依リ各國赤十字社委員カ互ニ其ノ經驗ヲ交換シ其ノ目的ノ實行ニ便ナル事項ヲ協議スルモノニシテ

各國ノ政府亦密接ノ關係アルニ因リ第一回總會ノ希望ニ依リ第二回以後各政府委員ヲ派遣シテ該總會ニ參加スルコトトナレリ而シテ各國トモ當初其ノ事業ハ戰時救護ニ止マリシモ其ノ後時勢ノ進歩ニ從ヒ天災救護又ハ其ノ他ノ救護事業ヲ行フコトトハナレリ現ニ赤十字條約ニ加盟セル國名左ノ如シ

- | | | | | |
|--------|------|------------|-------|-------------|
| 日 | 本 | 獨逸 | 國 | 亞爾然丁共和國 |
| 奧地利 | 洪牙利國 | 白耳義國 | 勃爾牙利國 | |
| 智利 | 共和國 | 清國 | コロンビヤ | |
| 公 | 果國 | キユーバ | 丁 | 抹 |
| 西班牙國 | | 亞米利加合衆國 | | 伯刺西爾合衆國 |
| 墨西哥合衆國 | | 佛蘭西國 | | 大不列顛及愛蘭國 |
| 希臘國 | | 「グワテマラ」共和國 | | 「ホンデユラス」共和國 |

伊太利國	盧森堡國	モンテネグロ
諾威國	和蘭國	秘露國
波斯國	葡萄牙國	羅馬尼亞國
露西亞國	塞爾比亞國	暹羅國
瑞典國	瑞西國	土耳其國
「ウルグー」共和國	ヴェネズエラ	

第二 赤十字條約

赤十字條約トハ軍隊出陣負傷者ノ狀態改良ノ件ニ關スル條約ニシテ初メ千八百六十四年八月二十二日「ジエネヴァ」ニ於テ瑞西國外十一箇國ノ間ニ締結セシモノナレハ又之ヲ千八百六十四年八月二十二日「ジエネヴァ」條約トモ謂ヘリ此ノ條約ハ戰地ノ傷者病者ヲ完全

ニ救護スルヲ以テ目的トシ文明諸國間ニ締結セララルモノニシテ最初締盟各國ハ「ジエネヴァ」會議ニ全權委員ヲ派遣セサリシ政府ニ此ノ條約ヲ示シ其ノ加盟ヲ請フモノトシタレハ我國モ亦之ニ加盟シ明治十九年十月二十五日ヲ以テ公布セラレタリ次テ千九百零六年六月「ジエネヴァ」萬國會議ニ於テ千八百六十四年ノ「ジエネヴァ」條約ヲ補修シテ新條約ヲ議定セリ明治四十一年六月十一日公布戰地軍隊ニ於ケル傷者及病者ノ狀態改善ニ關スル條約即チ是レナリ此ノ條約及明治三十三年十一月二十一日公布千八百六十四年「ジエネヴァ」條約ノ原則ヲ海戰ニ應用スル條約ノ主義ハ日本赤十字社カ戰時救護事業ヲ施行スルニ方リ遵守スヘキモノニシテ我救護員ハ其ノ規定ニ通曉セサルヘカラス又明治三十三年十一月二十一日公布陸戰ノ法規慣例ニ關スル條約モ併セテ了得スヘキモノナルヲ以テ共

ニ須知ノ條項ヲ左ニ掲ク

(一) 戰地軍隊ニ於ケル傷者及病者ノ狀態改善ニ關スル條約

第一章 傷者及病者

第一條 軍人及公務上軍隊ニ附屬スル其ノ他ノ人員ニシテ負傷シ又ハ疾病ニ罹リタル者ハ國籍ノ如何ヲ問ハス之ヲ其ノ權内ニ收容シタル交戦者ニ於テ尊重看護スヘキモノトス

但シ病者及傷者ヲ敵ニ遺棄スルノ已ムヲ得サルニ至リタル交戦者ハ軍事上ノ狀況ノ許ス限リ其ノ看護ヲ幫助セシメムカ爲衛生部員及衛生材料ノ一部ヲ病者傷者ト共ニ遺留スヘシ

第二條 交戦者一方ノ傷者又ハ病者ニシテ他ノ交戦者ノ權内ニ陥リタル者ハ前條ニ依リテ看護ヲ享クルノ外俘虜ト爲リ俘虜ニ關スル國際公法ノ一般規則ヲ適用セラレルモノトス

但シ交戦者ハ俘虜タル傷者病者ニ關シ有益ト認ムヘキ特例又ハ殊遇ノ條項ヲ相互ニ協定スルノ自由ヲ有シ殊ニ左ノ事項ニ付協定ヲ爲スノ權能ヲ有ス

一 戰闘後戰場ニ遺棄セラレタル傷者ヲ互ニ引渡スコト

一 交戦者カ俘虜トシテ抑留シ置クヲ欲セサル傷者又ハ病者ヲ輸送ニ堪フルニ至リタル後又ハ全治後其ノ本國ニ送還スルコト

一 中立國ノ承諾ヲ得タル上戰爭ノ終了迄留置スル條件ヲ以テ對戰國ノ傷者又ハ病者ヲ同中立國ニ引渡スコト

第三條 各戰闘後戰場ノ占領者ハ傷者ヲ搜索シ且掠奪及虐待ニ對シ傷者及死者ヲ保護スルノ措置ヲ執ルヘシ
右占領者ハ死者ノ埋葬又ハ火葬カ其ノ死體ヲ綿密ニ検査シタル

上ニテ行ハルルコトニ注意スヘシ

第四條 各交戦者ハ死者ニ付發見シタル軍隊ノ認識票又ハ身分ヲ證明スヘキ記號及集收シタル傷者又ハ病者ノ人名簿ヲ成ルヘク速ニ其ノ本國官憲又ハ所屬陸軍官憲ニ送付スヘシ

交戦者ハ互ニ其ノ權内ニ在ル傷者及病者ノ留置移動竝入院及死亡ニ關スルコトヲ知照スヘク又戰場ニ於テ發見セラレ或ハ衛生上ノ固定營造物及移動機關内ニテ死亡シタル傷者又ハ病者ノ遺留ニ係ル一切ノ私用品有價物書狀等ヲ利害關係者ニ其ノ所屬國官憲ヲシテ傳送セシムル爲集收スヘシ

第五條 陸軍官憲ハ住民ノ慈惠心ニ訴ヘ之ニ應シタル者ニハ特別ノ保護及一定ノ特典ヲ與ヘ其ノ監督ノ下ニ兩軍ノ傷者病者ヲ收容看護セシムルコトヲ得ヘシ

第二章 衛生上ノ移動機關及固定營造物

第六條 衛生上ノ移動機關(即チ戰地軍隊ニ隨伴スヘキモノ)及衛生勤務ノ固定營造物ハ兩交戦者ニ於テ之ヲ尊重保護スヘシ

第七條 衛生上ノ移動機關及固定營造物カ害敵行爲ノ爲ニ使用セララルトキハ其ノ保護ヲ失フヘシ

第八條 左記ノ事項ハ衛生上ノ移動機關又ハ固定營造物カ第六條ニ依リ保障セラレタル保護ヲ喪失スヘキ性質ノモノト看做サス

第一 移動機關又ハ固定營造物ノ人員カ武装シ其ノ武器ヲ自己又ハ傷者病者ノ防衛ノ爲ニ使用スルノ事實

第二 武装看護人ノ在ラサルニ當リ正式ノ命令ヲ携帶スル歩哨又ハ衛兵ヲシテ移動機關又ハ固定營造物ヲ守衛セシムル事實

第三 傷者ヨリ取上ケタルモ未タ所轄部署ニ引渡サレサル武器
及藥筒カ移動機關又ハ固定營造物内ニ發見セラレタルノ
事實

第三章 人員

第九條 傷者及病者ノ收容輸送及治療竝衛生上ノ移動機關及固定
營造物ノ事務ニ專ラ從事スル人員軍隊附屬ノ教法者ハ如何ナル
場合ニ於テモ尊重保護セラルヘク敵手ニ陥リタルトキト雖俘虜
トシテ取扱ハルルコトナカルヘシ

前項ノ規定ハ第八條第二號ノ場合ニ於テ衛生上ノ移動機關及固
定營造物ノ守衛人員ニモ之ヲ適用ス

第十條 本國政府カ適法ニ認可シタル篤志救恤協會ノ人員ニシテ
軍隊衛生上ノ移動機關及固定營造物ニ使用セララル者ハ前條ニ

掲ケタル人員ト同一ニ看做サルヘシ但シ該人員ハ陸軍ノ法律規
則ニ服従スヘキノトス

各國ハ其ノ責任ノ下ニ在リテ軍隊ノ衛生勤務ニ幫助ヲ與アルコ
トヲ許可シタル協會ノ名稱ヲ平時ヨリ又ハ戰爭開始ノ際若ハ戰
争中何レノ場合ニモ之ヲ有効ニ使用スルニ先チ他ノ一方ノ國ニ
通告スルヲ要ス

第十一條 中立國ニ於テ認可セラレタル協會ハ豫メ其ノ國政府ノ
承認ヲ得タル上當該交戦者ノ許可ヲ受クルニ非サルハ其ノ人員
及衛生上ノ移動機關ヲシテ同交戦者ニ幫助ヲ與ヘシムルコトヲ
得ス

右救護ヲ承諾シタル交戦者ハ其ノ使用ニ先チ之ヲ敵國ニ通告ス
ヘシ

第十二條 第九條第十條及第十一條ニ掲ケタル人員ハ敵ノ權内ニ
陥リタル後モ其ノ指揮ノ下ニ在リテ引續キ各自ノ職務ヲ執行ス
ヘシ

前項人員ノ幫助カ既ニ必要ナキニ至リタルトキハ軍事上ノ必要
ト相容ルル時期及通路ニ從ヒ之ヲ所屬軍隊又ハ其ノ本國ニ送還
スヘシ

右人員ハ各自ノ私有ニ屬スル被服器具武器及馬匹ヲ持去ルヲ得
ヘシ

第十三條 敵國ハ第九條ニ掲ケタル人員カ其ノ權内ニ在ル間自國
軍隊ノ同一等級ノ者ニ給與スルト同額ハ給養及俸給ヲ之ニ支給
スヘシ

第四章 材料

第十四條 衛生上ノ移動機關ハ敵ノ權内ニ陥ルトキト雖其ノ輸送
方法護送人員ノ如何ヲ問ハズ所屬材料ヲ保有ス同材料中ニハ輓
馬ヲモ包含スルモノトス
但シ所轄陸軍官憲ハ傷者及病者看護ノ爲該材料ヲ使用スルノ權
能ヲ有スヘク其ノ材料ハ衛生人員ノ爲ニ定メラレタル條件ニ依
リ且成ルヘク衛生人員ト同時ニ之ヲ還付スヘシ

第十五條 固定營造物ノ建物及材料ハ戰爭ノ法規ニ從フ然レトモ
傷者及病者ノ爲ニ必要ナル間ハ其ノ用途ヲ他ニ轉スルコトヲ得
ス

但シ作戰部隊ノ指揮官ハ重大ナル軍事上ノ必要アルトキハ豫メ
固定營造物内ニ在ル傷者及病者ノ安全ヲ謀リタル後便宜之ヲ處
分スルコトヲ得ヘシ

第十六條 本條約ニ定メタル條件ニ從ヒ條約上ノ利益ヲ享有スル救恤協會ノ材料ハ私有ノ財産ト看做サレ之カ爲戰爭ノ法規慣例ニ基キ交戦者ニ屬スル徵發權ニ依ルヲ除クノ外如何ナル場合ニ於テモ尊重セラルヘシ

第五章 後送機關

第十七條 後送機關ハ左ノ特別規定ニ依ルノ外衛生上ノ移動機關トシテ取扱ハルヘシ

第一 後送機關ヲ遮斷スル交戦者カ軍事上ノ必要アル場合ニハ該後送機關ノ收容シタル病者及傷者ヲ引受ケタル後之ヲ解カシムルコトヲ得ヘシ

第二 前號ノ場合ニ於テ第十二條ニ規定セラレタル衛生人員送還ノ義務ハ正式ノ命令ヲ携帶シテ輸送又ハ後送機關ノ護

衛ニ任スル一切ノ軍人軍屬ニ及フヘシ

第十四條ニ規定シタル衛生材料還付ノ義務ハ特ニ後送ノ爲ニ組織セラレタル鐵道列車及内地航行ノ船舶並衛生勤務ニ屬スル普通ノ車輛列車及船舟ノ裝置材料ニ適用セラルヘシ

衛生勤務ニ屬セサル軍隊ノ車輛ハ其ノ輓馬ト共ニ捕獲スルヲ得ヘシ

普通人民及徵發ニ依リテ得タル各種ノ輸送物件ハ國際公法ノ通則ニ從フヘキモノトス同物件中ニハ後送ノ爲ニ使用セラルル鐵道材料及船舟ヲモ包含スルモノトス

第六章 殊別記章

第十八條 瑞西國ニ對シ敬意ヲ表スル爲該聯邦國旗ノ著色ヲ顛倒シテ作成シタル白地赤十字ノ紋章ハ軍隊衛生勤務上ノ殊別記章

トシテ維持セラルヘシ

第十九條 前條ノ記章ハ所轄陸軍官憲ノ認許ニ依リ衛生勤務ニ關係スル旗臂章及一切ノ材料ニ表出セラルヘシ

第二十條 第九條第一項第十條及第十一條ニ依リ保護セラルル人員ハ所轄陸軍官憲ヨリ交付シ且其ノ印章ヲ捺シタル白地赤十字ノ臂章ヲ左腕ニ裝著スヘク陸軍ノ衛生勤務ニ従事スル人員ニシテ軍服ヲ著セサルモノハ認識證明書ヲ併セ携帯スヘシ

第二十一條 本條約ニ依リテ尊重セラルル衛生上ノ移動機關及固定營造物ニシテ陸軍官憲ノ認許ヲ受ケタルモノニ非サレハ本條約ノ記章旗ハ之ヲ掲揚スルコトヲ得ス右記章旗ハ該機關又ハ營造物所屬交戦者ノ國旗ト共ニ掲揚スヘシ
但シ敵ノ權内ニ陥リタル衛生上ノ移動機關ハ其ノ地位ノ繼續ス

ル間赤十字旗ノ外他ノ國旗ヲ掲揚スヘカラス
第二十二條 第十一條ニ規定シタル條件ニ依リ其ノ勤務ヲ幫助スルヲ許可ヲ得タル中立國ノ衛生上ノ移動機關ハ本條約ノ記章旗ト共ニ所屬交戦者ノ國旗ヲ掲揚スヘシ

前條第二項ノ規定ハ前項ノ衛生上ノ移動機關ニモ之ヲ適用ス
第二十三條 白地ニ赤十字ノ記章及「赤十字」又ハ「ジエネツア」十字ナル稱號ハ平時ト戰時トヲ問ハス本條約ニ依リテ保護セラルル衛生上ノ移動機關、固定營造物、人員及材料ヲ保護シ又ハ標榜スル爲ニ非サレハ之ヲ使用スルコトヲ得ス

第七章 條約ノ適用及執行
第二十四條 締盟國中ノ二國又ハ數國間ニ戰爭アル場合ニ限り締盟國ハ本條約ノ規定ヲ遵守スルノ義務アルモノトス此ノ規定ヲ

遵守スルノ義務ハ交戦國ノ一カ本條約ノ記名者ナラサル時ヨリ
消滅スルモノトス

第二十五條 交戦軍ノ司令長官ハ各其ノ本國政府ノ訓令ニ從ヒ且
本條約ノ綱領ニ準據シ前諸條ノ執行ニ關スル細目及規定漏ノ事
項ヲ補足處理スヘシ

第二十六條 記名國政府ハ本條約ノ規定ヲ其ノ軍隊及特ニ保護セ
ラルル人員ニ教示シ且之ヲ國民ニ知悉セシムルカ爲必要ナル手
段ヲ執ルヘシ

第八章 濫用及違犯ノ禁制

第二十七條 記名國政府ニシテ其ノ現行法制完全ナラサルモノハ
本條約ニ依リ權利ヲ享有スルモノ以外ノ個人又ハ協會ニ於テ「赤
十字」又ハ「ジエネジャ」十字ナル記章又ハ名稱ヲ使用シ就中商業上

ノ目的ヲ以テ製造標又ハ商標ノ方法ニ依リ之ヲ用キルコトヲ常
ニ防止セムカ爲必要ナル手段ヲ執リ又ハ之ヲ其ノ立法府ニ提案
スヘキコトヲ約ス

前項ニ規定シタル記章又ハ名稱ノ使用禁止ハ各國ノ法制ニ依リ
テ定メラレタル時期ヨリ其ノ効力ヲ生スヘク遅クトモ本條約實
施後五年以内ニ其ノ効力ヲ生スヘシ本條約實施後ハ同禁止ニ抵
觸スル製造標ノ使用ヲ以テ不法トス

第二十八條 記名國政府ニシテ其ノ陸軍刑法不完全ナル場合ニハ
戰時ニ於テ軍隊ノ傷者及病者ニ對スル個人的掠奪及虐待行爲ヲ
禁制シ且本條約ニ依リテ保護セラレサル軍人又ハ個人ノ爲シタ
ル赤十字ノ記章旗及臂章ノ濫用ヲ陸軍記章ノ侵犯トシテ處罰ス
ルニ必要ナル手段ヲ執リ又ハ之ヲ其ノ立法府ニ提案スヘキコト

ヲ約ス

記名國政府ハ遲クトモ本條約批准後五年以内ニ瑞西聯邦政府ヲ經テ右禁制ニ關スル規定ヲ互ニ相通告スヘシ

(二) 千八百六十四年八月二十二日「ジェネヴェ」條約ノ

原則ヲ海戰ニ應用スル條約

第一條 軍用病院船即チ傷者病者及難船者ヲ救護スル唯一ノ目的ヲ以テ政府ニ於テ製造シ又ハ設備スル船舶ニシテ戰鬪開始ノ際又ハ交戰中其ノ之ヲ使用スルニ先チ船名ヲ交戰國ニ通告セラレタルモノハ交戰中之ヲ尊重スヘク捕獲スルヲ得サルモノトス前項ノ船舶ハ中立港内ニ碇泊スルコトニ關シテモ亦軍艦ト同一視セラルルコトナシ

第二條 一個人又ハ公認セラレタル救恤協會ノ費用ヲ以テ全部又

ハ一部分ヲ艦裝シタル病院船ニシテ其ノ所屬交戰國ヨリ之ニ官ノ命令ヲ付シ且戰鬪開始ノ際又ハ交戰中其ノ之ヲ使用スルニ先チ船名ヲ敵國ニ通告セラレタルモノハ亦均ク尊重セラレ捕獲ヲ免ルルモノトス

前項ノ船舶ハ其ノ艦裝中及最後出發ノ際當該官廳ニ於テ監督シタルコトヲ證明スル文書ヲ携帯スヘシ

第三條 中立國ノ一己人又ハ公認セラレタル協會ノ費用ヲ以テ全部又ハ一部分ヲ艦裝シタル病院船ニシテ若シ其ノ所屬中立國ヨリ之ニ官ノ命令ヲ附シ且戰鬪開始ノ際又ハ交戰中其ノ之ヲ使用スルニ先チ船名ヲ交戰國ニ通告セラレタルモノハ尊重セラレ捕獲ヲ免ルルモノトス

第四條 第一條第二條及第三條ニ掲ケタル船舶ハ交戰國ノ傷者病

者及難船者ヲ其ノ國籍ノ如何ニ關セズ救護扶助スヘシ
各國政府ハ右船舶ヲ何等軍事上ノ目的ニ使用セサル事ヲ約定ス
右船舶ハ決シテ戰鬥者ノ運動ヲ妨碍スヘカラス
右船舶ハ戰鬥中ト戰鬥後トヲ問ハス自ラ其ノ危險ノ責ニ任シテ
行動スルモノトス

交戰國ハ右船舶ニ對シ監督及臨檢搜索ヲ爲スノ權利ヲ有シ助力
ヲ拒絕シ其ノ離隔ヲ命令シ其ノ航行スヘキ方面ヲ示命シ且其ノ
船中ニ監督員ヲ乗込マシメ若重大ナル場合ニ於テ必要ト認ムル
トキハ之ヲ抑留スルコトヲ得ヘシ
交戰國ハ病院船ニ下シタル命令ヲ成ルヘク該船ノ航泊日誌ニ記
入スヘシ

第五條 軍用病院船ハ其ノ外部ヲ白色ニ塗り幅約一メートル半ノ

綠色ノ横筋ヲ施シテ之ヲ標識スヘシ

第二條及第三條ニ掲ケタル船舶ハ其ノ外部ヲ白色ニ塗り幅約一
メートル半ノ赤色ノ横筋ヲ施シテ之ヲ標識スヘシ

救護用ニ供セラルヘキ小船類及前二項ノ船舶ニ附屬スル端舟ハ
各前二項ニ準シテ塗色シ以テ之ヲ標識スヘシ

病院船ハ總テ其ノ國旗ト共ニ「ジエネヴァ」條約ニ定メタル白地ニ
赤十字ノ旗ヲ掲ケテ之ヲ標識スヘシ

第六條 中立國ノ商船遊船又ハ端舟ニシテ交戰國ノ傷者病者若ク
ハ難船者ヲ搭載シ若クハ收容スルモノハ此輸送ノ事實ノ爲ニ捕
獲セララルユトナシ然レトモ中立違犯ノ所爲アルトキハ捕獲ヲ
免カレサルモノトス

第七條 總テ捕獲セラレタル船舶内ニ在リテ教法醫療及看護ニ從

事スル人員ハ使スヘカラサルモノニシテ俘虜ト爲スコトヲ得ス
 此等ノ人員ノ艦船ヲ退去スルトキハ各自ノ私有ニ屬スル物品及
 外科用具ヲ携帯ス
 此等ノ人員ハ必要アル限リハ引續キ其ノ職務ニ從事スヘク首席
 指揮官ニ於テ妨ケナシト認ムル時ニ至テ退去スルコトヲ得
 交戦國ハ其ノ權内ニ陥リタル此等ノ人員ニ其ノ給料ノ全額ヲ得
 セシムルコトヲ要ス
 第八條 凡ソ艦船内ニ在ル海陸軍人ノ傷者病者ハ其ノ何レノ國籍
 ニ屬スルニ論ナク捕獲者ニ於テ之ヲ保護介抱スヘシ
 第九條 交戦國ノ一方ノ難船者傷者又ハ病者ニシテ他ノ一方ノ權
 内ニ陥リタル者ハ俘虜タルヘク其ノ事情ノ如何ニ依リ或ハ之ヲ
 抑留シ或ハ之ヲ自國ノ一港又ハ中立國ノ一港ニ送致シ或ハ之ヲ

其ノ敵國ノ一港ニ送還スルトモ一ニ後者ノ決スル所ニ從フ右最
 終ノ場合ニ於テ其ノ本國ニ送還セラレタル俘虜ハ交戦中再ヒ服
 役スルコトヲ得ス

第十一條 締盟國中ノ二國又ハ數國ノ間ニ戰ヲ開キタル場合ニ限
 リ締盟國ハ前記各條ニ掲ケタル規定ヲ遵守スルノ義務アルモノ
 トス

右規定ヲ遵守スルノ義務ハ締盟國間ノ戰鬪ニ於テ一ノ非締盟國
 カ交戦國ノ一方ニ加ハリタル時ヨリ消滅スルモノトス

第十二條 本條約ハ成ルヘク速ニ批准スヘシ
 批准書ハ海牙ニ保管ス
 各批准書ニ付キ一通ノ保管證書ヲ作り其ノ認證謄本ヲ外交上ノ
 手續ニ依リ各締盟國ニ交付スヘシ

第十三條 千八百六十四年八月二十二日「ジエネヴァ」條約ヲ承認シタル非記名國ハ本條約ニ加盟スルコトヲ得ヘシ
右非記名國カ其ノ加盟ヲ締盟國ニ通知スルニハ書面ヲ以テ和蘭國政府ニ通告シ同國政府ヨリ更ニ之ヲ爾餘ノ締盟國ニ通知スヘシ

第十四條 若シ締盟國中ノ一國ニ於テ本條約ヲ廢棄スルトキハ書面ヲ以テ其ノ旨ヲ和蘭政府ニ通告シタル後一ケ年ヲ經過スルニ非レハ廢棄ノ效力ヲ生スルコトナシ右通告ハ和蘭政府ヨリ直ニ爾餘ノ締盟國ニ通知ス

右廢棄ノ效力ハ之ヲ通告シタル國ノミニ止マルモノトス

(三) 陸戰ノ法規慣例ニ關スル條約

第一條 締盟國ハ各其ノ陸軍ニ對シテ本條約附屬ノ陸戰ノ法規慣

例ニ關スル規則ニ遵依スル所ノ訓令ヲ發スヘシ

第二條 締盟國中ノ二國又ハ數國ノ間ニ戰ヲ開キタル場合ニ限り締盟國ハ第一條ニ掲ケタル規則ノ規定ヲ遵守スルノ義務アル者トス

右規定ヲ遵守スルノ義務ハ締盟國間ノ戰鬥ニ於テ一ノ非締盟國カ交戰國ノ一方ニ加ハリタル時ヨリ消滅スルモノトス

條約附屬書

陸戰ノ法規慣例ニ關スル規則

第四條 俘虜ハ敵國政府ノ權内ニ屬シ之ヲ捕獲シタル個人又ハ軍團ノ權内ニ屬スルコトナシ
俘虜ハ博愛ノ心ヲ以テ取扱フヘキモノトス
兵器馬匹及軍用書類ヲ除キ凡ソ俘虜ノ一身ニ屬スルモノハ依然

其ノ所有タルヘシ

第十七條 俘虜將校ハ本國ノ規定アルトキハ俘虜ノ地位ニ在リテ
給與セラルヘキ給料ヲ受クルコトヲ得

但シ右ハ其ノ本國政府ヨリ償還スヘキモノトス

第十八條 俘虜ハ陸軍官衙ノ定メタル秩序及風紀維持ニ關スル法
則ニ服従スルノ範圍内ニ於テ宗教ヲ遵行スルノ自由ヲ許サレ且
其ノ宗門ノ禮拜式ニモ亦參與スルコトヲ許サルヘシ

第十九條 俘捕ノ遺言書ハ内國陸軍軍人ト同一ノ條件ヲ以テ之ヲ
收領シ又ハ調製ス

俘虜ノ死亡證書及埋葬ニ關シテモ亦同一ノ規則ニ遵ヒ且其ノ身
分階級ニ相當シタル取扱ヲ爲スヘシ

第二十一條 病者及傷者ノ取扱ニ關スル交戰者ノ義務ハ千八百六

十四年八月二十二日「ジエネヴア」條約及將來之ニ加フルコトアル
ヘキ修正ニ據ル

第二十三條 特別ノ條約ヲ以テ定メタル禁止ノ外特ニ禁止スルモ
ノ左ノ如シ

(イ) 毒又ハ毒ヲ施シタル兵器ヲ使用スルコト

(ロ) 敵ノ國民又ハ軍ニ屬スル者ヲ欺罔ノ行爲ヲ以テ殺傷スルコ

ト

(ハ) 兵器ヲ捨テ又ハ自衛ノ手段盡キテ降ヲ乞ヘル敵兵ヲ殺傷ス
ルコト

(ニ) 助命セサルノ宣告ヲ爲スコト

(ホ) 無益ノ苦痛ヲ與フヘキ兵器彈丸其ノ他ノ物質ヲ使用スルコ

ト

(ハ) 濫ニ軍使旗及國旗其ノ他軍用ノ標章並敵兵ノ制服及「ジエネ
ヅ」條約ノ徽章ヲ使用スルコト

(ト) 戰爭ノ必要上萬已ムヲ得サルノ外敵ノ財産ヲ破壊シ又ハ押
收スルコト

第二十七條 攻圍及砲撃ニ於テハ宗教技藝學術及慈善ノ爲設ケラ
レタル建物病院並病者傷者ノ收容所ハ其ノ現ニ軍事上ノ目的ニ
供セラレサルニ於テハ成ルヘク之ニ害ヲ加ヘサル爲必要ノ手段
ヲ施スヘシ

被圍者ハ豫メ攻圍者ニ通知シタル看易キ特別ノ徽章ヲ以テ此等
ノ建物又ハ收容所ヲ表示スルノ義務アリ

第四十六條 家族ノ名譽及權利個人ノ生命及私有ノ財産並宗教ノ
信仰及其ノ遵行ハ之ヲ尊重セサルヘカラス

私有財産ハ之ヲ沒收スルコトヲ得ス

第五十六條 市町村ノ財産並宗教慈善教育技藝及學術ノ爲設ケラ
レタル營造物所屬ノ財産ハ國有ニ屬スルモノト雖私有財産同様
之ヲ取扱フヘシ

總テ這般ノ營造物歴史上ノ紀念建造物技藝及學術上ノ製作品ヲ
故意ニ押收シ破壊シ又ハ毀損スルコトヲ禁ス犯ス者ハ之ヲ訴追
スヘキモノトス

第五十八條 特別ノ條約ナキトキハ中立國ハ其ノ留置シタル人員
ニ食料被服ヲ給與シ人情ニ訴ヘテ必要ト認ムル救助ヲ與フヘシ
留置ノ爲ニ生シタル費用ハ平和回復ノ上償却セラルヘシ

第五十九條 中立國ハ交戰軍ニ屬スル傷者及病者カ其ノ版圖内ヲ
通過スルヲ許スコトヲ得ヘシ但シ之ヲ輸送スル列車ニハ戰鬪ノ

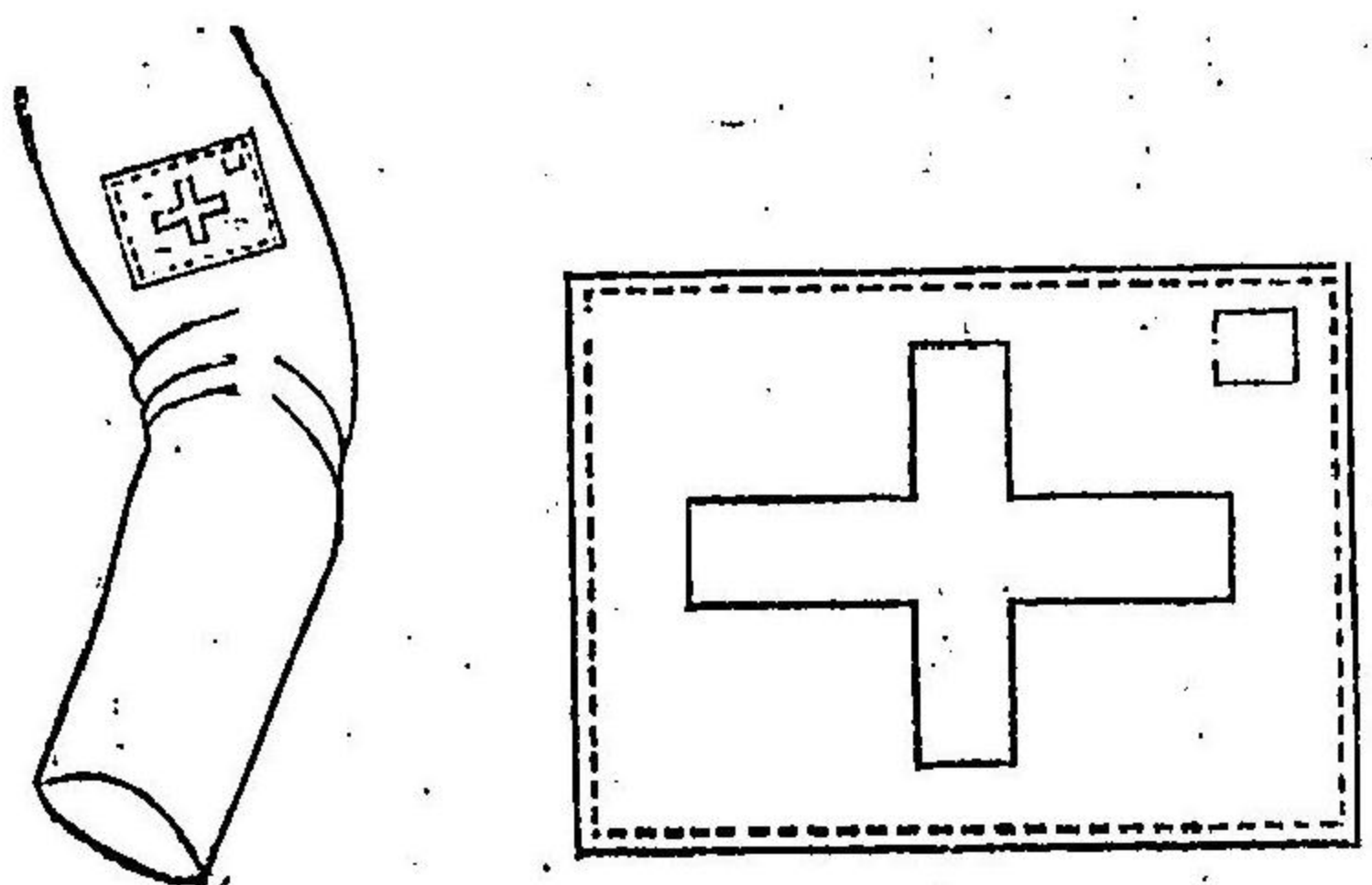
人員及材料ヲ搭載セサルヲ條件トスヘシ斯ノ如キ場合ニ於テハ中立國ハ之カ爲必要ナル保安及監督ノ處置ヲ施スヘキモノトス前記ノ條件ニ依リテ甲交戰國カ乙交戰國ニ屬スル傷者及病者ヲ中立國ノ版圖内ニ伴レ來ルトキハ中立國ハ之ヲ監守シテ再ヒ作戦動作ニ與ルコト能ハサラシムヘシ甲交戰國ヨリ依頼ヲ受ケタル傷者及病者ニ對シテモ亦同一ノ義務ヲ有スヘシ

第六十條 「ジエネヴァ」條約ハ中立國ノ版圖内ニ留置シタル病者及傷者ニモ亦之ヲ適用ス

第三 殊別記章

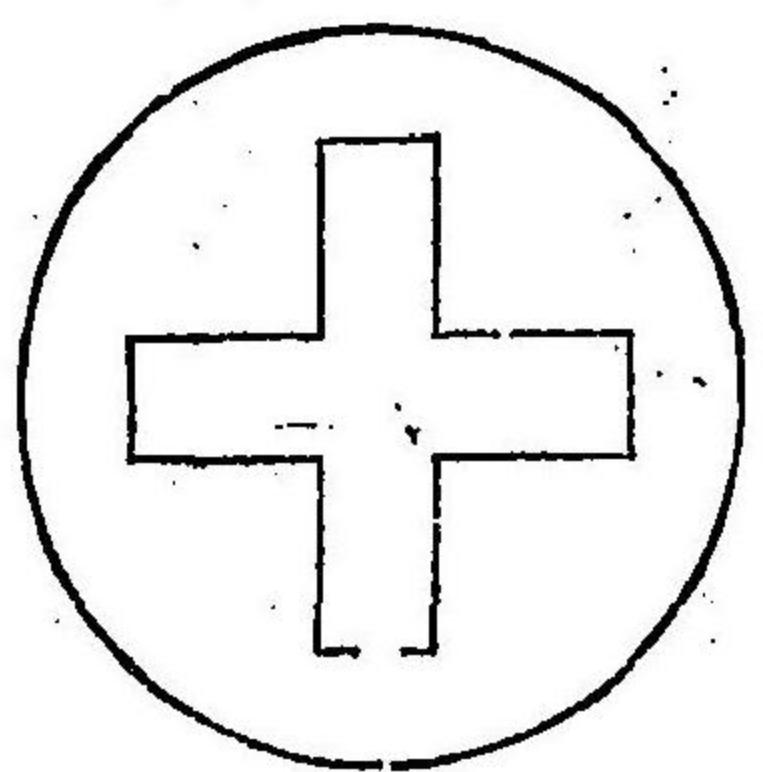
一 戰時事變ノ際陸海軍ノ衛生勤務ニ從事セル救護員ハ戰地軍隊ニ於ケル傷者及病者ノ狀態改善ニ關スル條約ニ依リ陸軍大

戰時陸軍赤十字臂章



長六寸
幅四寸
地質白絨
又ハ白雲
齋
十字赤絨
表面ノ後
上隅口印
ニハ當該
官衙ノ印
章ヲ捺捺
ス

戰時海軍赤十字臂章



縱橫各二寸
地質白絨
十字赤絨
裏面ニ番
號ヲ記ス

臣又ハ海軍大臣ヨリ下付セラルル臂章及認識證明書ヲ受領ス
(留守師團下又鎮守府所在地ノ病院等ニ勤務スル救護員ハ場
合ニ依リ下付セラレサルコトアリ)臂章ハ白地ニ赤十字ヲ畫
キタルモノニシテ之ヲ左上膊ニ裝著ス(第一圖)救護材料ノ容
器梱包ニ亦此ノ記章ヲ附著スルモノトス條約ニ所謂殊別記章
即チ是レナリ

二 白地赤十字ヲ以テ殊別記章トナシタルハ此ノ事業ニ關シ瑞
西國聯邦政府力率先シテ各國ノ間ニ斡旋シ遂ニ「ジエネヴァ」條
約ヲ締結シタル如キ理情ニ基キ敬意ヲ表スルタメ同國ノ國旗
(赤地ニ白十字)ヲ反轉シ白地ニ赤十字ヲ畫キテ以テ之ヲ記章

トスルコトニ爲シタルモノナリ

第二章 日本ニ於ケル赤十字事業

第一 日本赤十字社ノ主旨沿革

日本赤十字社ハ報國恤兵ヲ經トシ以テ忠君愛國ノ實ヲ舉ケ博愛
慈善ヲ緯トシ以テ人道ノ誠ヲ效ス是ヲ主義ノ大綱トナス本社ハ
明治十年ノ亂ニ際シ傷兵救護ノ目的ニ依リ創設セシ博愛社ヲ以
テ其ノ濫觴トス此ノ亂ニ於テ戰地ノ死傷夥シク悲慘ノ狀見ルニ
忍ヒサルヲ以テ有志者相謀リ一社ヲ結ヒテ博愛社ト稱シ時ノ征
討總督府ノ允許ヲ得テ救護員ヲ戰地ニ派遣シ傷者病者ヲ救護シ
タリ當時其ノ事業克ク國民ノ忠愛心ヲ發揮シ上皇室ノ賜金ヲ辱

ウシ下一般ノ賛同ヲ得タルニ依リ戰後之ヲ永設ノモノトシテ漸次其ノ擴張ニ勉メシカ進ンテ歐洲各國ノ赤十字社ト同盟聯伍セシコトヲ期シ我政府ノ赤十字條約ニ加盟シタル翌年即チ明治二十年五月ヲ以テ社名ヲ日本赤十字社ト改メ「ジエネヴァ」中央社ヲ介シテ歐洲各社ト親交ヲ結フニ至レリ明治三十四年民法ノ規定ニ從ヒ定款ヲ設ケ同年十二月本社ヲ以テ社團法人トナシ政府モ亦同月勅令ヲ以テ日本赤十字社條例ヲ公布セラレ政府ト本社トノ關係明カニナレリ

日本赤十字社ノ戰時救護事業ハ明治二十七八年戰役明治三十三年清國事變及明治三十七八年戰役ニ於テ之ヲ實施シタリ

明治二十七八年戰役ニ於テ派遣セル救護員千五百五十三人ニシテ内ハ廣島外九箇所ノ陸軍豫備病院ニ外ハ清韓各地ニ於テ陸軍衛生部ノ勤務ヲ幫助シ又海上輸送患者救護ノタメ船内ニ勤務シ其ノ他東京外三箇所ニ於ケル俘虜患者ノ救護及臺灣匪徒征討ノ際同地兵站病院ノ勤務ニ服シ三十三年清國事變ノ際ニハ派遣スル所ノ救護員四百九十一人ニシテ内ハ廣島陸軍豫備病院外ハ太沽、天津、通州、山海關等ノ各地ニ勤務シ又病院船博愛丸、弘濟丸ヲ以テ太沽、宇品間ニ往復シテ患者ヲ輸送セリ三十七八年戰役ニ於テハ救護事務ヲ總理スルタメ臨時救護部ヲ本部ニ特設シ其ノ出張所ヲ内ハ廣島外十一箇所外ハ清國大連ニ設ケタリ救護實施ノ期間二年餘ニ涉リ救護團體ヲ編成スルコト百五十二箇救護員五千百七十人ヲ派遣シ内地ニ在リテハ豫備病院、函館、要塞病院及海軍病院海上ニ在リテハ二隻ノ

本社病院船及十八隻ノ陸軍病院船戰地ニ在リテハ滿韓各地ノ兵站病院患者療養所等ニ於テ陸海軍衛生勤務ヲ幫助シ又停車場著船場ニ患者休養所ヲ置キ還送患者ノ慰藉ニ從事シタリ以上救護ノ成績ハ内外ノ賞讃ヲ博シ救護員ニハ叙勳又ハ賜金ノ恩命アリ殊ニ三十七八年戰役ニ際シ職務ノタメ死没セル救護員ハ特旨ヲ以テ其ノ靈ヲ靖國神社ニ合祀セラレ又二十七八年及三十七八年戰役救護ニ對シテハ 天皇 皇后兩陛下ヨリ優渥ナル勅語令旨ヲ下シ賜ハリタリ

天災救護ノ主ナルモノヲ舉クレハ明治二十一年岩代國盤梯山ノ噴火明治二十三年紀州沖ニ於ケル土耳其國軍艦ノ遭難明治二十四年濃尾地方ノ地震明治二十九年三陸地方ノ海嘯及秋田地方ノ地震明治三十年東京府八王子町及明治四十年函館ノ火災明治四十二年江

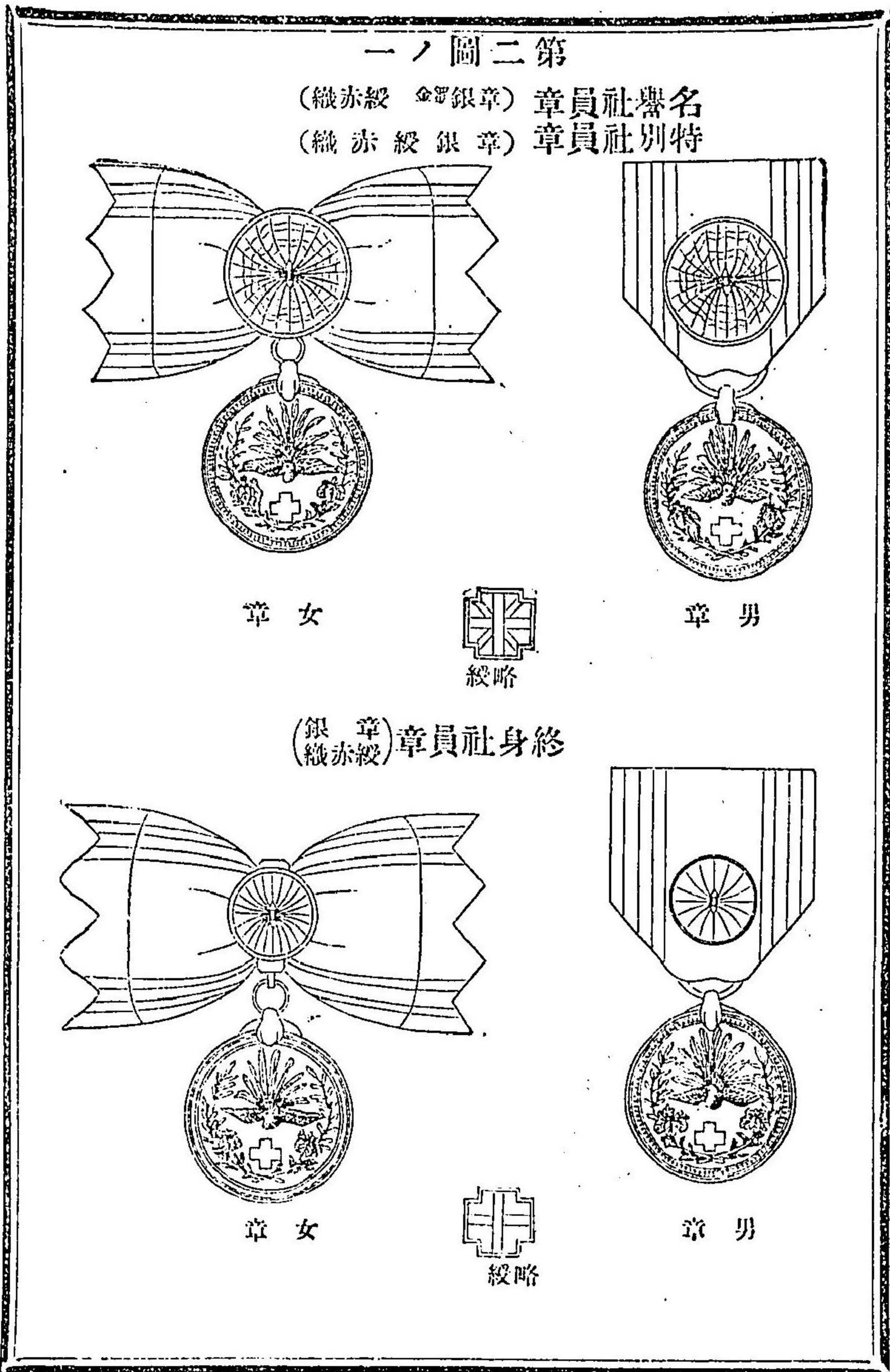
濃地方ノ地震等ニシテ此ノ他各地方變災ノタメ救護ヲ執行セシモノ枚舉ニ追アラヌ

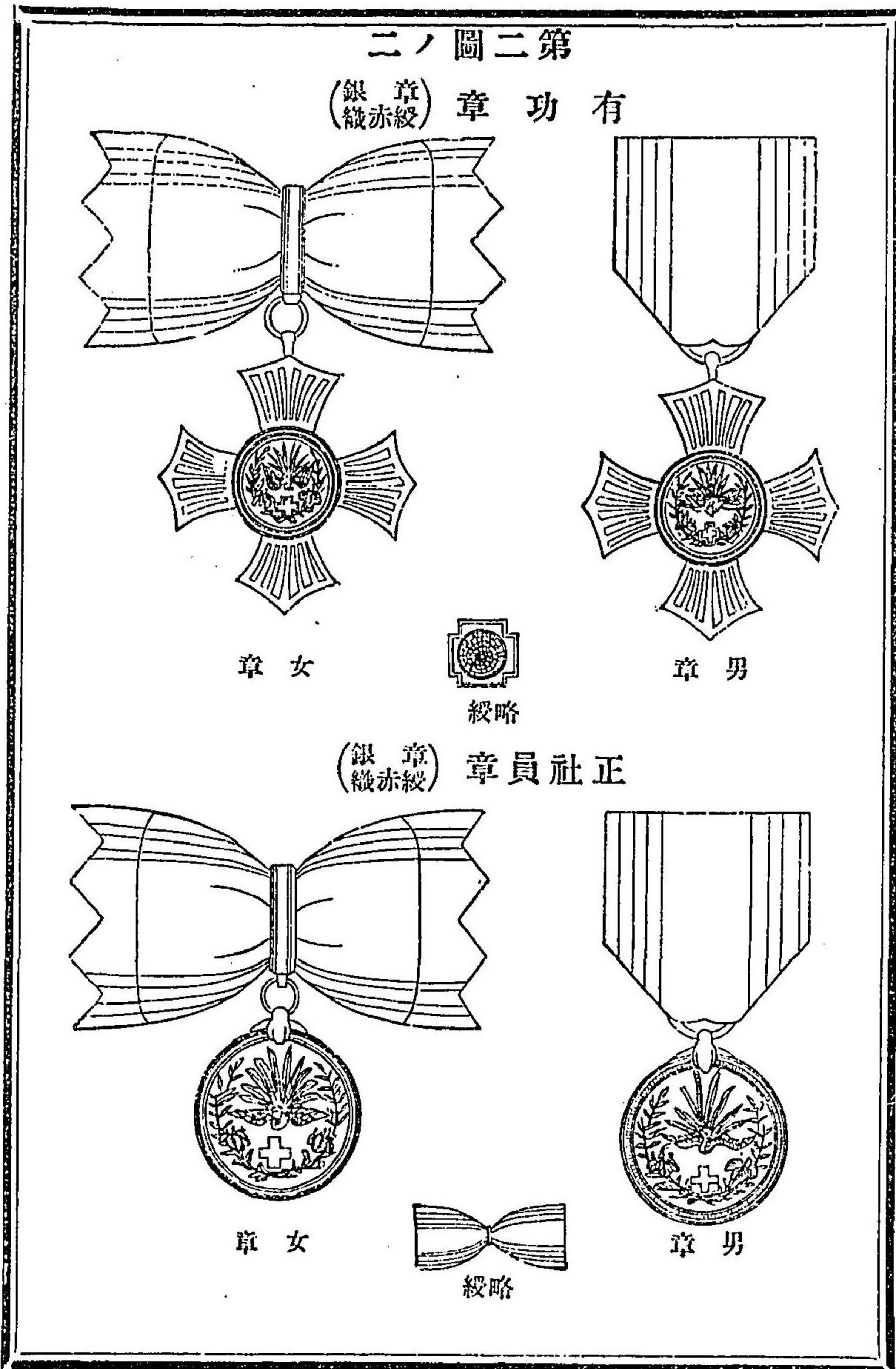
第一 日本赤十字社ノ組織

一 日本赤十字社ハ 天皇 皇后兩陛下眷護ノ下ニ立チテ宮内、陸軍、海軍、内務各省ノ監督ヲ受ケ皇族ヲ奉戴シテ總裁トス社務八十名ノ理事之ヲ管理シ其ノ内一名ヲ社長二名ヲ副社長トシ社務ヲ提理スル者トス社長副社長ハ勅任セラレ其ノ他ノ理事ハ常議會ニ於テ常議員中ヨリ之ヲ選舉ス

本社重要ノ事件ヲ議決スルタメ常議會ヲ置ク常議會ハ議員三十名ヲ以テ組織スルモノニシテ議員ハ社員總會ニ於テ東京市

在任ノ社員中ヨリ選舉ス常議員ニ非スシテ社長及副社長ニ勅任セラレタル者ハ選舉ヲ用ヒスシテ常議員トシ常議員ノ數ヲ増加ス其ノ外ニ本社財産ノ狀況及業務執行ノ狀況ヲ監査スルタメ監事三名アリ社員總會ニ於テ之ヲ選舉ス以上執レモ名譽職ニシテ其ノ任期各三箇年トス總會ハ毎年一回之ヲ開ク社員ハ名譽社員、特別社員、正社員ノ三種トシ各一定ノ社員章ヲ附與シ且本社ノ事業又ハ社資ヲ幫助シ特別ノ功勞アル者ニハ常議會ノ議決ニ依リ上奏裁可ヲ經テ有功章ヲ授與ス而シテ社員章有功章ハ勳章ト同シク公會ニ佩用スルコトヲ得ルモノナリ(第二圖)





名譽社員ハ常議會ノ議決ニ因リ推崇セラレタル者特別社員ハ本社ノ事業又ハ社資ヲ幫助シタルノ功ヲ以テ推薦セラレタル者正社員ハ年酬金三圓以上ヲ納ムル者トス年酬金ハ十箇年ヲ一期トシ一期ヲ完了シタル者及一時金二十五圓以上ヲ納メタル者ヲ終身社員トス

二 本部、支部 本社ノ事業ヲ取扱フタメ本部ヲ東京市ニ支部ヲ北海道廳、各府縣及臺灣ニ置キ支部ノ下ニ委員部ヲ置キ其ノ下ニ分區ヲ置ケリ又朝鮮ニ朝鮮本部ヲ樺太ニ樺太委員部ヲ關東州ニ滿洲委員部ヲ設ケ其ノ他外國ニ於テ必要ナル地方ニ特別委員部ヲ配置セリ

三 病院 日本赤十字社病院及支部病院ハ救護員ヲ養成スル機

關ニシテ平時ハ其ノ必要ノ爲ニ一般患者及貧困者ヲ救療ス又戰時ニ方リテハ其ノ建物ヲ陸海軍ノ病院ニ供用スルモノナリ

日本赤十字社病院ハ初博愛社病院ト稱シ明治十九年創設セシカ明治二十年社名改稱ト共ニ日本赤十字社病院ト改メタリ支部病院ハ本社ニ設ケタル支部病院設立準則ノ規定ニ依リ設立スルモノニシテ現今三重、長野、滋賀、臺灣、和歌山、富山、香川、兵庫、大阪ノ各支部ニ之ヲ設置シ又國外ニ在リテハ旅順ニ日本赤十字社關東州病院ヲ奉天ニ日本赤十字社奉天病院ヲ設立セリ共ニ滿洲委員部ニ屬ス

四 救護員養成所 救護員養成所ハ病院ヲ有セサル支部ニ之ヲ置キ救護看護婦、救護看護人、救護輸送人ヲ養成スル所トス

本所ハ專ラ救護員ニ必要ノ學術科ヲ教授スルヲ目的トシ其ノ實務ノ練習ハ本社病院又ハ支部病院ニ於テ行フヲ例トス又場合ニ依リ其ノ地方ニ於ケル他ノ病院ト協約シテ之ヲ養成所附屬ノ實務練習場ニ充ツルコトアリ

日本赤十字社篤志看護婦人會 本會ハ明治二十年ノ創設ニシテ日本赤十字社監督ノ下ニ立テ婦人社員中ノ同志者ヲ以テ組織セルモノナリ總裁ニハ皇族妃殿下ヲ奉戴シ會長副會長幹事評議員等ノ職員ヲ置ケリ其ノ目的ハ社旨ノ普及ヲ圖リ戰時平時ノ別ナク社業ヲ幫助スルニアリ會員ハ其ノ目的ニ據リ常ニ看護學術ヲ研修シ既往ノ戰役ニ於テハ日本赤十字社監督ノ下ニ軍人傷病者ヲ慰藉シ且豫備病院及患者休養所ニ於テ軍人患者ヲ看護シ或ハ之ヲ慰藉スルニ

努メタリ

本會ハ事務所ヲ東京ニ置キ支會ヲ日本赤十字社支部所在地ニ置キ
當該支部ノ監督ヲ受ク又國外必要ノ地ニモ支會ヲ設クルモノトセ
リ

會員ハ名譽會員正會員ノ二種トス

第三 戰時救護事業

一 戰時救護事業ハ戰地軍隊ニ於ケル傷者及病者ノ狀態改善ニ
關スル條約千八百六十四年八月二十二日「ジェネヴァ」條約ノ
原則ヲ海戰ニ應用スル條約及陸戰ノ法規慣例ニ關スル條約ノ
主義ニ從テ行ハレ戰時又ハ事變ニ方リ陸軍大臣海軍大臣ノ命
ヲ受ケ或ハ認可ヲ得テ實施スルモノナリ

二 戰時救護事業ハ社長之ヲ統轄シ救護部及救護團體ヲ以テ執
行ス救護團體ハ之ヲ別テ救護班、患者輸送縱列、病院船、病
院列車ノ四種トス救護部、救護團體ハ戰時又ハ事變ニ際シ編
成スルモノナリ

三 救護團體ハ平時本部及支部ニ於テ分擔準備スルモノニシテ其
ノ數左ノ如シ

救護班 百六十三箇

(看護婦看護人ニ區別シテ組織ス看護婦組織百二十四箇看
護人組織三十九箇)

患者輸送縱列 六箇

病院船 二隻

病院列車 一列車

病院船病院列車ハ本部ニ於テ救護班、患者輸送縦列ハ支部ニ於テ之ヲ準備ス

四 救護部ハ本部、支部、派出所ヨリ成リ救護ニ關スル諸般ノ事務ヲ掌理スルノ機關ニシテ救護團體ハ所屬官司ノ指揮監督ノ下ニ在リテ陸海軍ノ規定ニ從ヒ其ノ衛生勤務ヲ幫助スルノ機關ナリ

五 救護部及救護團體ノ外地方支部ニ於テ還送患者ヲ慰藉スルタメ戰地ニアラサル碇泊場又ハ停車場ニ患者休憩所ヲ設置スルコトアリ

六 救護員ハ救護團體編成定員ト其ノ補充員トノ二ニ別チ定員ハ平時ニ於テ之ヲ配屬スルモノニシテ救護團體編成ヲ要スルトキハ其ノ配屬員ヲ召集ス之ヲ充員召集ト云ヒ團體編成後補闕ヲ要

スルトキハ其ノ補充員ヲ召集ス之ヲ補充召集ト云フ

七 救護材料ハ大別シテ衛生材料ト普通材料トノ二種トス衛生材料トハ器械、藥品、滋養品、治療用消耗品、患者被服寢具及患者運搬具ヲ云ヒ普通材料トハ事務用品、救護員貸與品、救護員給與品、天幕、食器、庖厨具及雜品ヲ云フ救護材料ハ救護團體ノ數ニ應シ平時之ヲ準備スルモノニシテ救護團體作業中其ノ補給ヲ要スルトキハ品目ニ依リ救護部材料庫或ハ所屬官司ニ請求シテ交付ヲ受クルモノトス

第四 天災救護事業

一 天災救護ト稱スルハ震災、風災、水災、火災ニ際シ傷病者ヲ生シタル場合ニ方リ之ヲ救護スルヲ云フ汽車、船舶及群衆

ノ遭難若ハ地盤崩壞等ノ爲ニ生シタル傷病者ヲ救護スル亦之ニ準ス

二 天災救護事業ハ其ノ地方支部ニ於テ地方官廳ノ依囑ヲ受ケ又ハ地方官廳ニ交渉シテ之ヲ實施ス若常該支部ニ於テ實施スルモ尙救護ノ力足ラサルトキハ隣接支部ニ於テ應援スルコトアリ

第三章 救護員

第一 資格、地位

一 救護員ハ戰時事變又ハ天災ニ方リ本社ノ召集ニ應シ救護勤務ニ従事スルモノニシテ常ニ年限ヲ定メテ誓約スルモノト戰

時、事變ニ際シ囑託又ハ任命セララルモノトアリ

救護員タル者ハ帝國ノ臣民ニシテ本社ノ定メタル資格ヲ具備スル者ニ非サレハ任命セララルコトナシ

救護員戰時服務中ハ陸海軍ノ紀律ヲ守リ命令ニ服スルノ義務ヲ負フモノトス

救護員ハ救護理事首長、救護理事長、救護理事、救護副理事(以上理事員ト稱ス)救護醫長、救護醫員(以上醫員ト稱ス)救護調劑員、救護看護婦監督、救護書記、救護調劑員補、救護看護婦長、救護看護人長、救護輸長、救護看護婦、救護看護人、救護輸送人ニ別テリ而シテ戰時服務中日本赤十字社條例ノ規定ニ從ヒ救護看

護婦監督以上ノ待遇ハ陸海軍將校相當官ニ救護書記以下救護
輸長以上ノ待遇ハ下士ニ救護看護婦以下ノ待遇ハ卒ニ準セラ
ルモノナリ

救護看護婦監督以上ノ任用ハ社長之ヲ行ヒ救護書記以下ノ任用
ハ所管ニ從ヒ社長又ハ支部長之ヲ行フ

三 救護看護婦、救護看護人、救護輸送人ハ所要ニ從ヒ本部又ハ支部
ニ於テ其ノ生徒ヲ募集シ一定ノ期間教育ヲ加ヘタル上之ヲ任用
ス其ノ卒業者ニシテ成績良好ナル者ハ救護看護婦長、救護看護人
長、救護輸長各候補生トシテ更ニ若干期間ノ教育ヲ受ケ其ノ適任
證書ヲ授與セラル

四 救護員ハ戰時事變又ハ天災ニ方リ救護施行ノ場合ニ於テ召集

セラルル外平時ニ於テ演習其ノ他ノタメ召集セラルルコトアリ

五 救護員戰時事變ノタメ召集セラルルトキハ俸給、旅費及宿舍糧
食ノ給與ヲ受ケ制服其ノ他ノ被服、物品ヲ貸與又ハ給與セラル平
時召集ニ在リテハ手當及旅費ヲ給與セラル

宿舍糧食ハ戰地ニ在リテハ陸海軍ノ支給ヲ受クルヲ例トシ戰地
以外ニ在リテハ本社ニ於テ之ヲ準備スル能ハサル場合ニ限り陸
海軍ノ支給ヲ受ク

六 救護員戰時服務中傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リタルトキハ陸海
軍ノ治療ヲ受ク歸郷療養其ノ他陸海軍ノ治療ヲ受クルコト能ハ
サル場合ハ本社ヨリ手當ヲ給セラレ又ハ本社ニ於テ治療ヲ加ヘ
ラル

七 救護員服務中ノ傷痍疾病ニ起因シ癱疾不具トナリタル者ハ一

定ノ傷病扶助料ヲ受ク服務中ノ傷痍疾病ニ起因シ死歿シタル者ニハ其ノ遺族ニ扶助料及吊慰料ヲ給セラル

九 救護員ニシテ服務中犯則ノ行爲アリタル者ハ本社ニ於テ定メタル懲戒處分ヲ受ク陸海軍ノ規律ヲ守ラス又ハ命令ニ服スルノ義務ヲ闕キタルトキハ陸海軍ヨリ相當ノ處分ヲ受クルコトアルヘシ

第一 禮式

一 救護員ハ上長ニ對シテ敬禮ヲ行ヒ上長ハ之ニ答禮シ同級者ハ互ニ敬禮ヲ交換ス
敬禮ハ救護員制服ヲ着用シタル場合ニ限り之ヲ行フ
敬禮ヲ行フトキハ通常受禮者ノ答禮終ルヲ待チ舊姿勢ニ復ス

階級ノ識別ニ困難ナル場合ニ在リテハ先後ヲ論セス互ニ敬禮ヲ行フ

二人以上ノ上長ニ對スル敬禮ハ先ツ最高級ノ人ニ對シテ之ヲ行ヒ次ニ他ノ上長一同ニ對シ之ヲ行フ此ノ場合ニハ最高級ノ人ノミ答禮スルヲ例トス

職務上上長ニ隨從スル救護員ハ通常敬禮ヲ行フコトナシ

救護看護婦監督、救護看護婦長、救護看護婦ノ敬禮ハ本文中脱帽ノ場合ニ於テモ帽ヲ脱スルコトナシ

救護員廉アル場合ニ於テ「君ケ代」ノ奏樂ヲ聞クトキハ其ノ間姿勢ヲ正スモノトス

軍旗ニ行遇ヒ若ハ其ノ傍ヲ通過スルトキハ敬禮 救護書記以下行進中ニ在リテハ

之ニ面シテ停止シ敬禮ス ヲ行フ又定時ニ於テ軍艦旗ヲ昇降スルトキ甲板上

ニ在リタル者ハ之ニ面シ敬禮ヲ行フ

軍人 陸海軍ノ制服ヲ着用シタル將校、同相當官、准士官、下士、兵卒、 ニハ救護員ニ對スルト同一ノ敬

禮ヲ行フ

軍隊 引率者アル軍人ノ隊伍 ニハ其ノ引率者ニノミ敬禮ス但シ儀式及祭典ノ

爲整列シアル軍隊、儀仗服務中ノ儀仗兵竝會葬ノ儀仗兵ニ對

シテハ其ノ引率者ニモ敬禮ヲ行ハス

二 天皇ニ拜謁スルトキハ室内ニ於テハ最敬禮ヲ行フ

最敬禮ハ不動ノ姿勢ヲ取り先ツ天皇ニ注目シ次ニ體ノ上部ヲ

前約四十五度ニ傾ケ頭ヲ正シク上體ノ方向ニ保チ帽ハ右手ニ
テ其ノ庇ヲ摘ミ之ヲ右股ニ接シテ提ケ帽ノ内部ヲ右股ニ對セ
シム

最敬禮ハ玉座ヲ距ルコト約六歩ノ所ニ於テ之ヲ行フモノトス但
シ此ノ場合ニ於テハ先ツ御室ノ外ニ於テ敬禮シタル後御室ニ入
リ直ニ敬禮ヲ行ヒ更ニ進ミテ最敬禮ヲ爲シ最敬禮終リタルトキ
ハ退歩シ御室ノ出口ニ於テ敬禮シ御室ヲ出テ更ニ敬禮ヲ行ヒタ
ル後退去ス

前項ノ敬禮ハ最敬禮ヲ除クノ外總テ體ノ上部ヲ前約十五度ニ傾
ケ頭ヲ正シク上體ノ方向ニ保チテ行フ

皇后、太皇太后、皇太后ニ對スル敬禮ハ天皇ニ對スル敬禮ニ準

ス

前項以外ノ皇族及天皇ノ御名代ニ對シテハ公式ノ場合ニ限り
前項ニ準シ敬禮ヲ行フ

三 拜神ノトキハ神靈ニ對シ最敬禮ト同一ノ方法ヲ以テ拜禮ヲ
行フ

四 室内ノ敬禮ハ體ノ上部ヲ前約十五度ニ傾ケ受禮者ノ眼又ハ
敬禮スヘキモノニ注目スルノ外最敬禮ニ同シ
室内トハ居室、寢室、事務室及應接所等ヲ謂ヒ廊下、炊事場及
厩等ハ室外トス但シ行幸、行啓アリタルトキニ限り廊下モ亦
室内ト看做ス

室内ニ入ラムトスルトキハ室外ニ於テ脱帽ス
參内及參殿ノ節ハ昇殿ノ際ヨリ脱帽ス
救護調劑員以上ノ者救護書記以下ノ室内ニ入ルトキハ脱帽セ
サルモ妨ナシ此ノ場合ニハ室外ノ敬禮ヲ行フ
上長ノ室内ニ入ルトキハ上長ニ面シ入口ニ於テ敬禮ヲ行フ其
ノ室ヲ去ルトキ亦同シ
上長室内ニ來ルトキハ立チテ敬禮ヲ行ヒタル後各其ノ業務ニ
服シ上長其ノ室ヲ去ルトキハ再ヒ立チテ敬禮ヲ行フ但シ上長
ニ應答スル者ハ其ノ間起立ス
救護書記以下ノ室内ニ救護看護婦監督以上ノ上長來ルトキハ

前項ニ拘ラス最初之ヲ認メタル者「敬禮」ト呼ヒ其ノ室ニ在ル者皆其ノ場ニ立チ敬禮ヲ行ヒ上長ノ許可アリタル後各其ノ業務ニ服ス

作業中ニ在リテハ監督者ノミ敬禮ヲ行ヒ前二項ノ敬禮ヲ省略セシムルモ妨ナシ

上長ヨリ書類其ノ他ノモノヲ受ケ又ハ上長ニ之ヲ呈セムトスルトキハ敬禮ノ後適宜前進シ帽ヲ左脇ニ挟ミ右手ヲ以テ之ヲ受ケ又ハ呈シタル後舊位ニ復シ再ヒ敬禮ヲ行ヒ退去ス

前項ノ場合ニ於テ返簡若ハ受領證ヲ受クヘキトキハ適宜ノ位置ニ退キ之ヲ待ツ

上長ヨリ書類ヲ受ケ其ノ場ニ於テ披見ヲ要スルトキハ左手ヲ副ヘテ披見ス

上長ヨリ辭令書、賞狀等ヲ受クルトキハ其ノ場ニ於テ披見スルヲ例トス

命令、訓示等ヲ受ケ又ハ報告ヲ爲サムトスルトキ亦前諸項ニ準ス

廉アル宴會ニ於テ上長ト同席スルトキハ上長ヨリ先ニ椅子ニ倚リ又ハ食卓ニ就キ若ハ之ヲ離レ又ハ喫煙スルコトナキヲ禮トス

上長ヨリ廉アル宴會等ニ招カレ其ノ參著及退散ノトキハ佩劔

者ハ之ヲ佩ヒテ挨拶スルヲ例トス

五 室外ニ於テハ舉手注目ノ敬禮ヲ行フ但シ右手ヲ舉クルコト能ハサルトキハ其ノ儘受禮者ニ注目シ體ノ上部ヲ少シク前ニ傾ク但シ救護看護婦監督、救護看護婦長、救護看護婦ハ室外ニ於テモ室内ノ敬禮ヲ行フ

舉手注目ノ禮ハ姿勢ヲ正シ右手ヲ舉ケ其ノ指ヲ接シテ伸ハシ食指ト中指トヲ帽ノ庇ノ右側ニ當テ掌ヲ稍外方ニ向ケ肘ヲ肩ノ方向ニテ略其ノ高サニ齊クシ頭ヲ向ケテ受禮者ノ眼又ハ敬禮スヘキモノニ注目ス

團體ヲ以テ行動スルトキハ引率者敬禮ト呼ヒ一同敬禮ヲ行フ

途上ニ於テ行幸、行啓ニ遇フトキハ前驅ノ稍前ヨリ道路ノ一

側ニ於テ車駕ノ通路ニ面シテ停止シ

乗馬車ハ其ノ儘
乗車者ハ下車

車駕約八步

前ニ近ツクトキ敬禮ヲ行ヒ約八步過去ル迄其ノ姿勢ヲ保ツ

汽車、汽船等ニテ通御ノ際亦前項ニ準シ敬禮ヲ行フ

停止間ニ於テ上長其ノ傍ヲ通過スルトキハ之ニ面シテ敬禮ヲ行フ

上長ノ許ニ至ルトキハ適宜ノ距離ニ於テ之ニ面シテ停止シ敬禮ヲ行フ

上長ノ後方ヨリ進ミテ之ヲ通り過キムトスルトキハ其ノ旨ヲ告ケテ通過ス

途上ニ於テ救護員ノ葬儀ニ遇フトキハ其ノ柩ニ對シ敬禮ヲ行フ

室外ニ於テ上長ノ窓牖内ニ在ルヲ認メタルトキハ敬禮ヲ行フ
室内ニ於テ窓牖外ニ在ル上長ヲ認メタルトキ亦同シ

汽車、電車、馬車、人力車及船等ニ乘リタルトキ上長ニ行遇ヒ若ハ其ノ傍ヲ通過シ又ハ船、車内ニテ上長ニ遇フトキハ乗座ノ儘姿勢ヲ正シ敬禮スルモ妨ナシ但シ船、車内ニ於テハ成ルヘク上長ニ其ノ席ヲ讓ルヲ禮トス

船、車内ニ於テ敬禮ヲ行フニ危険ヲ感スルトキ又ハ自轉車ニ乘リタルトキハ單ニ注目ヲ以テ敬禮ニ代フルコトヲ得

船、車等ニ乘レル上長ニ行遇ヒ又ハ其ノ傍ヲ通過スルトキハ之ニ敬禮ヲ行フ

室外ニ於テ上長ヨリ書類其ノ他ノモノヲ受ケ又ハ呈セムトスルトキハ室外ノ敬禮ヲ行フノ外其ノ動作ハ室内ニ於ケルモノニ同シ

上長ヨリ命令、訓示等ヲ受ケ又ハ報告ヲ爲サムトスルトキハ適宜ノ距離ニ於テ敬禮ヲ行フ此ノ場合ニ於テハ上長ノ許可アル迄其ノ姿勢ヲ保ツヲ要ス

上長ト同行スルトキハ上長ノ行進ヲ妨ケサル如ク其ノ左側以上ナルトキハハ兩側ニ分レ又ハ後方ニ就キ上長ノ步調ニ合ハスヲ禮トス但シ

誘導者ハ此ノ限ニ在ラス

二人以上共ニ舷梯ヲ下リテ端船又ハ小蒸汽船ニ乗組ムトキハ下級者ヨリ先ニスルヲ禮トス

救護書記以下集團シ又ハ同行スルトキ上長ニ行遇ヒ又ハ上長其ノ傍ヲ通過スルトキ其ノ他敬禮ヲ行フヘキ場合ニ於テハ最初之ヲ認メタル者「敬禮」ト呼ヒ注意スルヲ要ス

第三 服從、敬稱、稱呼

一 凡ソ命ニ服シ令ニ從フハ紀律整立ノ基タルヲ以テ下タル者ハ上タル者ニ順ヒ其ノ心ヲ公平ニ置キ諸事柔和ニシテ決シテ威迫粗暴ノ舉動アルヘカラス

二 凡ソ下タル者上タル者ニ服從スルハ階級ヲ逐フテ嚴重ナルヘク各其ノ分限ヲ守リ以テ恭敬遵奉スヘシ又同級中ト雖新古ニ因テ服從ノ法ヲ守ルコト恰モ階級ニ於ケルカ如クナルヘシ

三 救護員中其ノ職務權域ヲ異ニスル場合ハ上級者ト雖猥リニ他ノ權域ヲ侵スヘカラス

四 我軍人軍隊ハ勿論同盟國ノ赤十字社又ハ軍人軍隊ト聯合スルトキハ亦同ク服從ノ定則ヲ守ルヘシ

五 凡ソ命令ハ謹テ之ヲ守リ直ニ之ヲ行フヘシ決シテ其ノ當不當ヲ論シ理不理ヲ議スヘカラス然レトモ其ノ命令ノ不分明ナルトキハ徐ニ之ヲ尋ヌルハ妨ケナシ又新ニ受クル所ノ命令ト

以前ノ命令ト齟齬スルトキハ其ノ趣ヲ申述ヘ然ル後之ヲ行フモノトス

六 上タル者ノ取扱假令不條理ナリト思フトモ下タル者ハ決シテ之ヲ争ヒ論スルコトナク穩ニ順序ヲ經テ訴フヘシ若勤務中ナルトキハ勤務終リテ後之ヲ訴フルモノトス

七 凡ソ下タル者上タル者ヲ呼フニハ直接ト間接トヲ論セス必ス左ノ敬稱ヲ用フヘシ

- 一 天皇 皇后 太皇太后 皇太后ニ對シ奉リテハ 陛下
- 二 皇太子 皇太子妃及其ノ他ノ皇族ニ對シ奉リテハ 殿下

- 三 社長 副社長 救護理事首長ニハ 閣下
- 四 救護理事長以下ニハ 殿

陸海軍將官及其ノ他ノ勅任官以上ニハ閣下陸海軍佐官及其ノ他ノ奏任官以下ニハ殿ノ敬稱ヲ用フ

八 他人ト談話中上級古參者ニ言及スルトキ亦敬稱ヲ用フ然レトモ上タル者ニ對シ其ノ人ヨリ下級者ヲ呼フニハ敬稱ヲ略スルコトヲ得又勤務上ニ於テハ敬稱ヲ省クヲ常トス例ヘハ下級者職務上ニ於テ上職ノ命令ヲ達スルトキ何職閣下ノ命令ト云ハスシテ何職ノ命令ト云フカ如シ

九 上タル者下タル者ヲ呼フニハ直接ト間接トヲ論セス其ノ氏

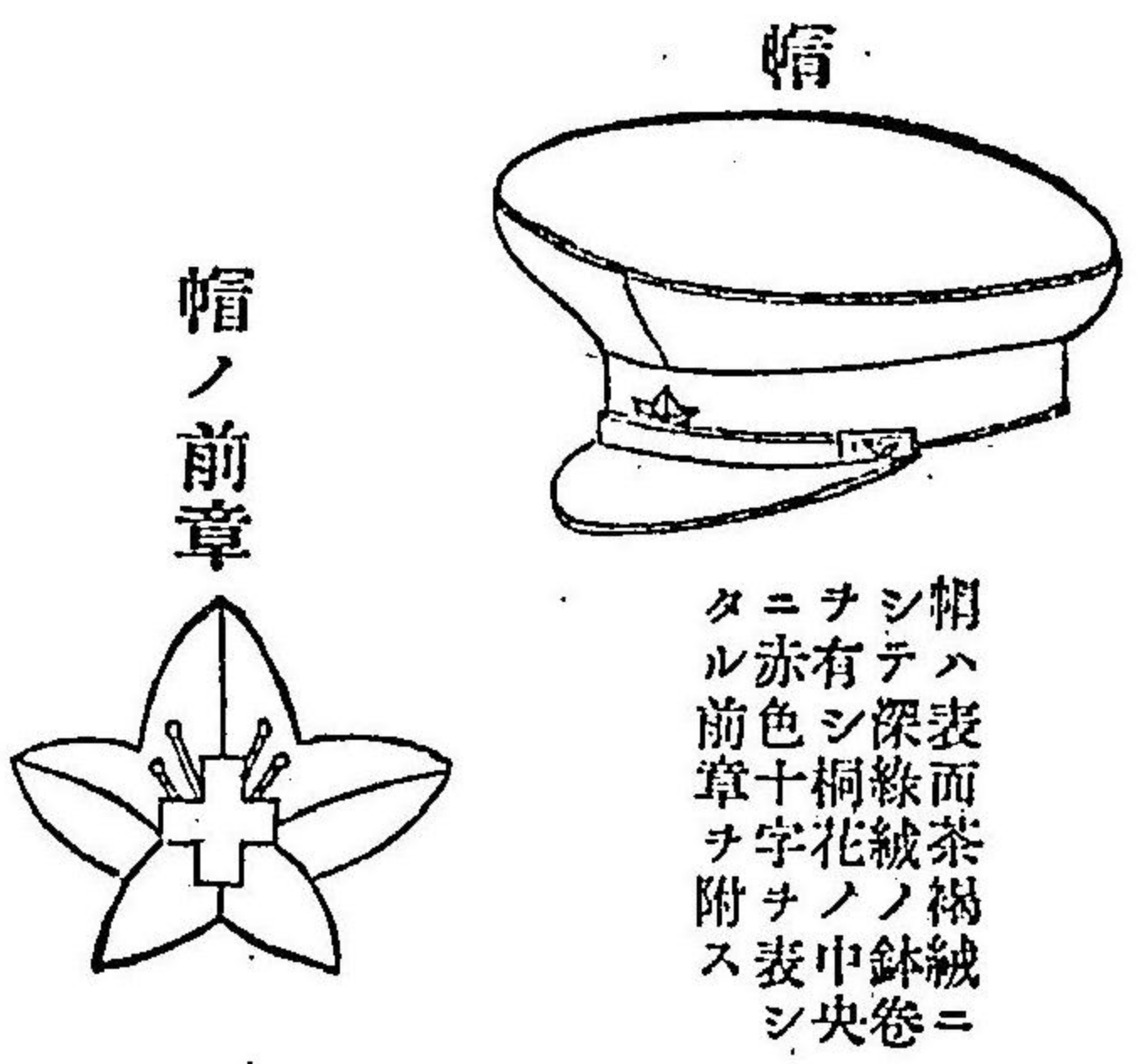
ト職名トヲ用フ例ヘハ「某救護醫員」「某救護看護婦」ト云フカ
 如シ又單ニ其ノ氏ノミヲ呼ヒ若ハ組長、磨工等ノ如キ勤務上
 ノ稱呼ノミヲ用フルモ妨ケナシ
 十 公文書ノ宛名ニハ身分、階級ノ如何ヲ問ハス殿ノ敬稱ヲ記
 スルモノトス

第四 服制

救護員ハ其ノ服務中本社ニ於テ定メタル制服ヲ著用スルモノト
 ス
 其ノ服制ハ大別シテ男救護員服制、女救護員服制トス即チ圖ノ
 如シ

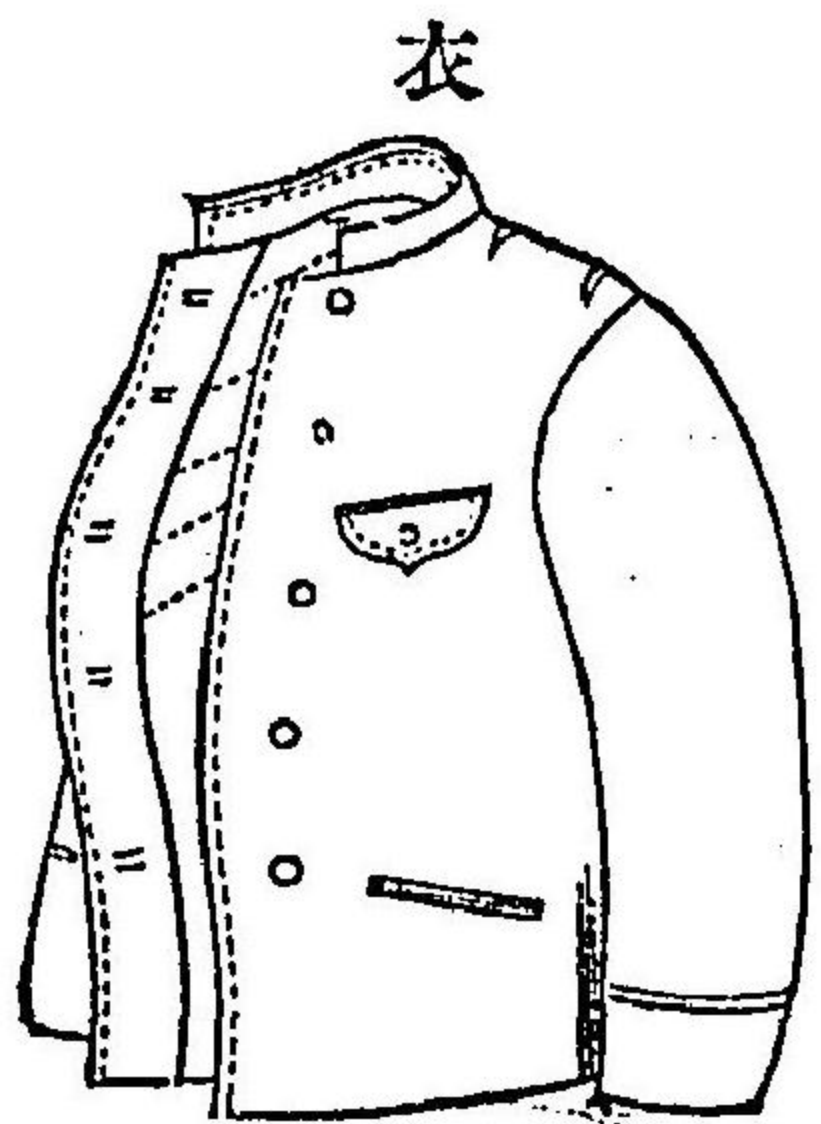
第三圖ノ一

男救護員服制



帽ハ表面茶褐色ニ
 シテ深絨ノ中央
 ナリシ桐花ノ表
 ナリ赤十字ヲ表
 タル前章ヲ附ス

帽ノ前章

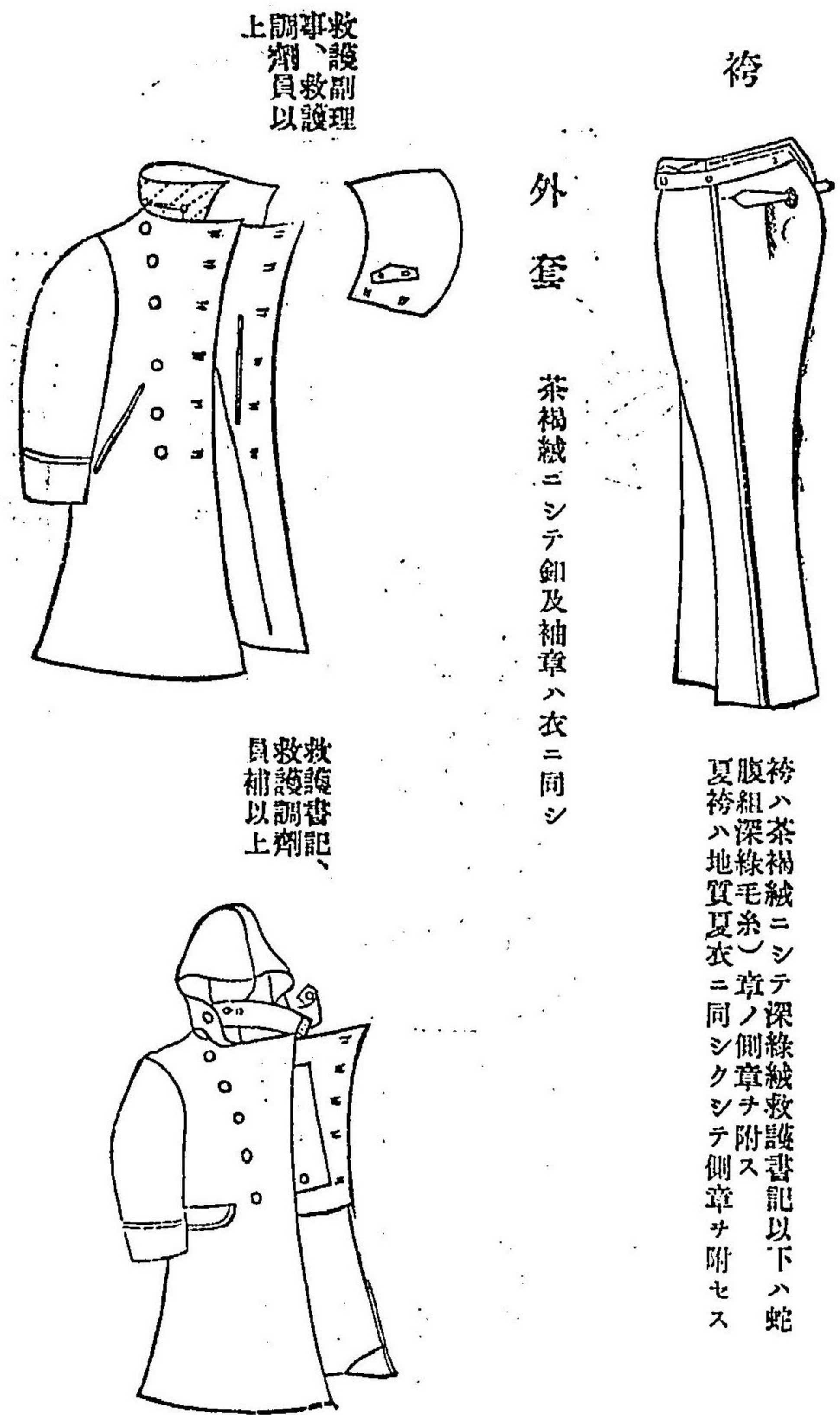


衣ハ茶褐色ニシテ銀色金
 屬製鈕及救護章ヲ附ス
 夏衣ハ茶褐色毛織ニシテ
 袖口以下ハ薄毛織ニシテ
 袖口以下ハ茶褐色毛織ニシテ
 ニテ縫目ヲ救護員ノ位
 ハ除クナリ救護員ノ位
 ナリテ下ニハ下部ニ物入

三ノ圖三第



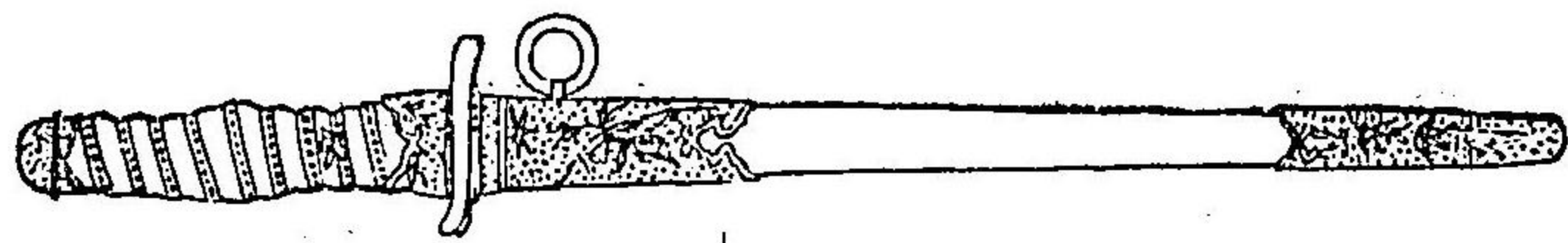
二ノ圖三第



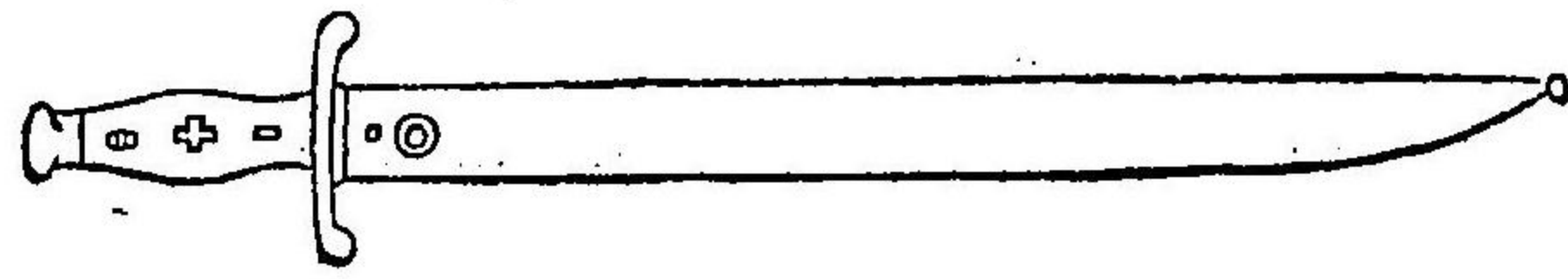
五ノ圖三第

劔

上以員劑調護救、事理副護救

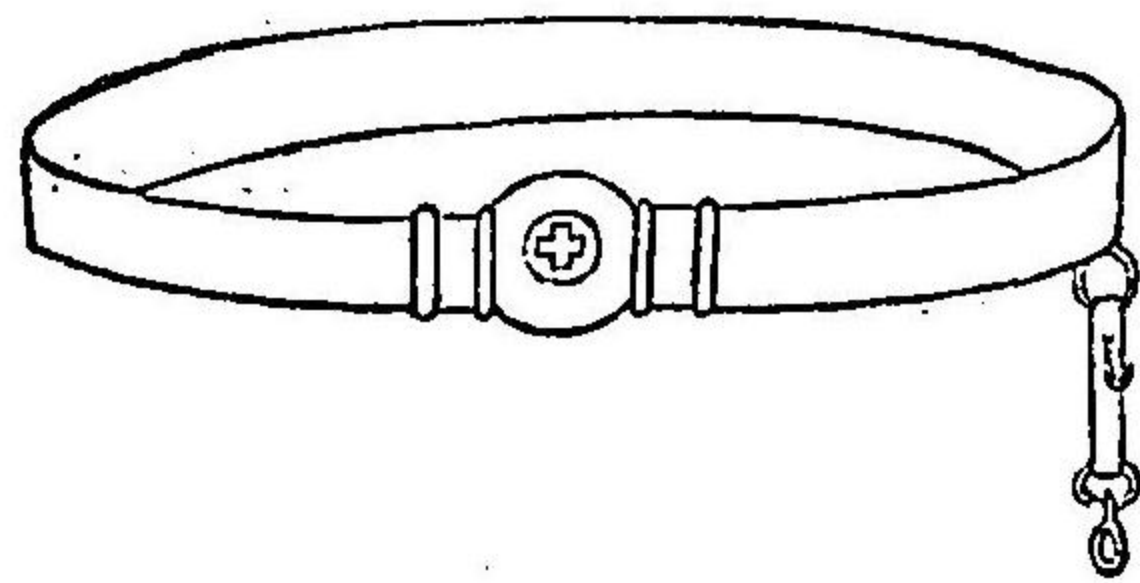


下以補員劑調護救、記書護救

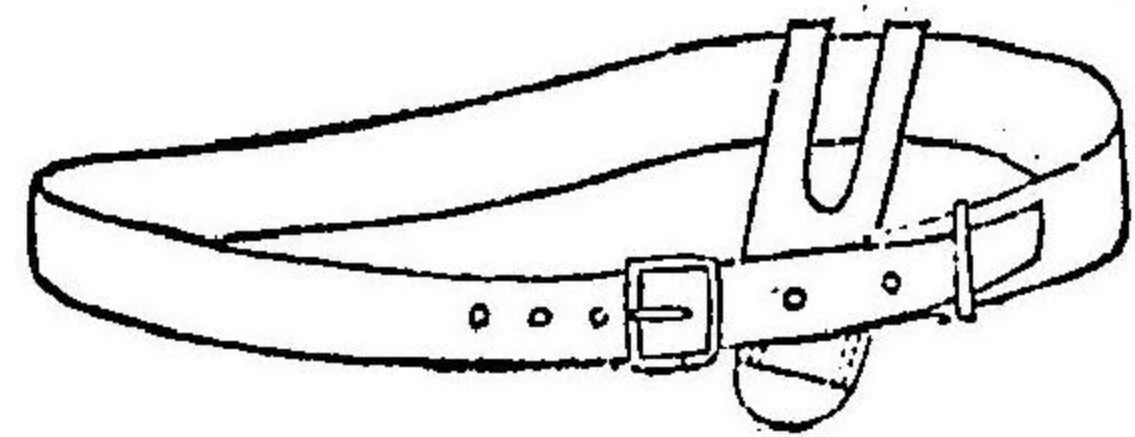


帶 劔

上以員劑調護救、事理副護救

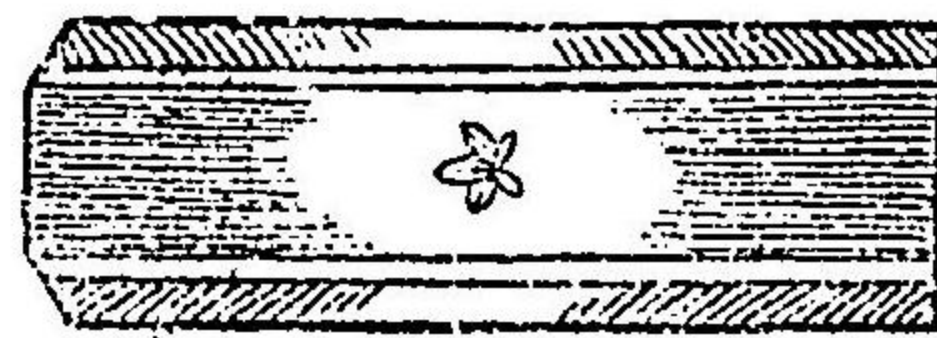


下以補員劑調護救、記書護救

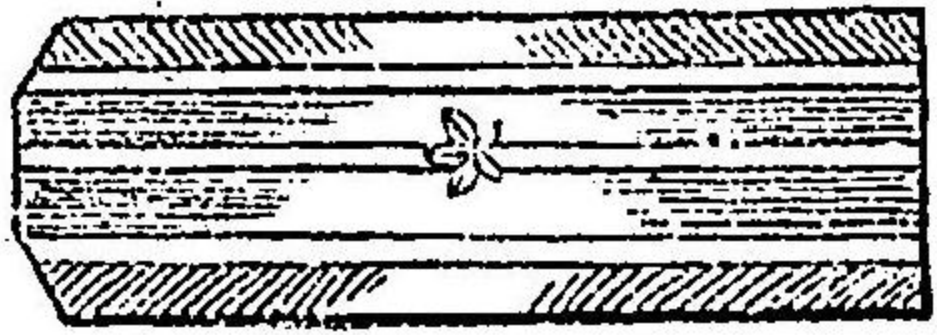


四ノ圖三第

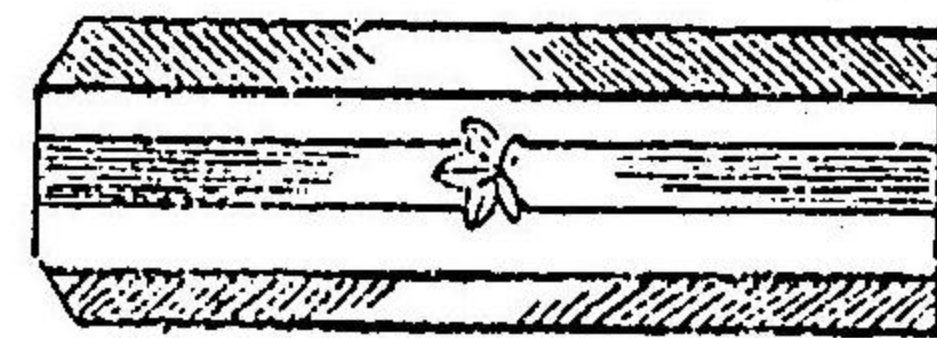
章 肩



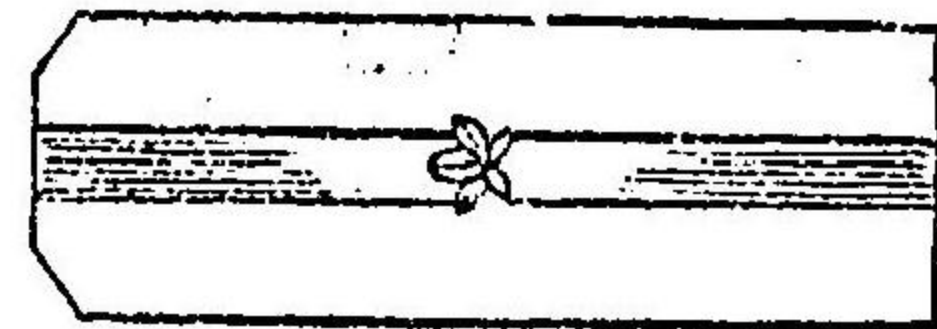
救護理事首長



救護理事首長
救護理事副長



救護副理事
以上



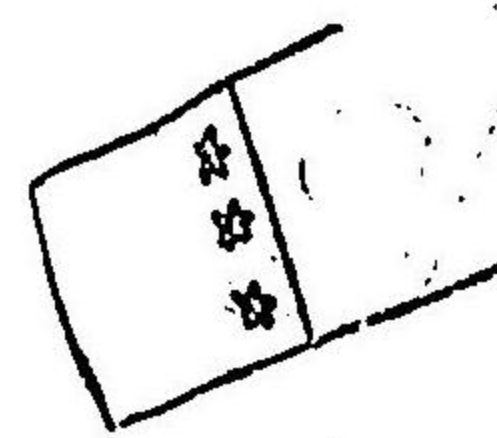
救護輪長
以上



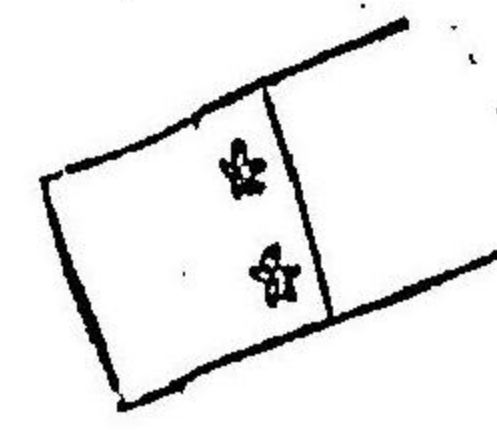
救護看護
以下

深緑絨ノ線章一
ナハ救護ノ桐花
ナハ救護ノ桐花
ナハ救護ノ桐花
ナハ救護ノ桐花
ナハ救護ノ桐花
ナハ救護ノ桐花
ナハ救護ノ桐花
ナハ救護ノ桐花
ナハ救護ノ桐花
ナハ救護ノ桐花

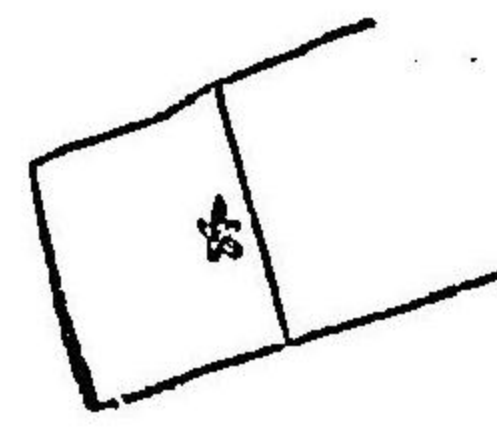
章 袖



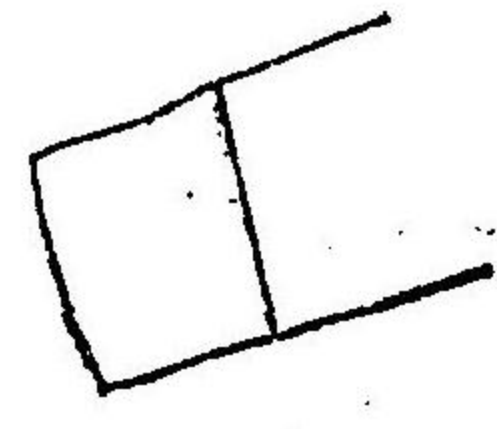
救護理事首長



救護理事首長
救護理事副長



救護副理事
以上



救護輪長
以上

深緑絨ノ線章一
ナハ救護ノ桐花
ナハ救護ノ桐花
ナハ救護ノ桐花
ナハ救護ノ桐花
ナハ救護ノ桐花
ナハ救護ノ桐花
ナハ救護ノ桐花
ナハ救護ノ桐花
ナハ救護ノ桐花
ナハ救護ノ桐花

第五 服裝

一 男救護員ノ服裝ハ帽、衣(夏衣)^{襟又ハ襟布共}袴(夏袴)、外套、肩章、
劔、救護員徽章、手套、垂布、脚絆、靴、背囊、飯盒、水筒、雜囊ヲ用
フ

夏衣、夏袴ハ六月一日ヨリ九月末日迄着用スルモノナルモ肩
章ヲ用フル場合ノ外ハ夏衣ニ袴又ハ衣ニ夏袴ヲ併用スルコト
ヲ得

外套ハ雨雪ノトキ又ハ防寒ノタメ室外ニ於テ着用ス但シ背囊
ヲ負ヘルトキ又ハ許可ヲ得タルトキハ室内ニ在リテモ之ヲ著
用スルヲ得ヘシ若外套ヲ卷テ携帯スルトキハ左肩ヨリ右脇ニ

掛クルモノトス

肩章ハ陸軍軍人ノ正裝、禮裝ヲ爲ストキ及海軍軍人ノ正服、禮
服ヲ着用スルトキ之ヲ用フ

劔ハ戰時、事變又ハ天災等ニ際シ救護實施ノトキ及演習、講習
ノ場合其ノ他團體ヲ以テ行動スルトキニ限り之ヲ佩用ス其ノ
佩用方ハ救護副理事、救護調劑員以上ニ在リテハ衣ノ下ニ救
護書記、救護調劑員補以下ニ在リテハ衣ノ上外套ヲ着用スル
トキハ其ノ上ニ佩用
スルモノトス

手套ハ白色ノモノヲ用フ場合ニ依リ燻色、茶色、褐色等ノモノ
ヲ用フルコトヲ得ヘシ

帽ノ頤紐ハ團體ヲ以テ行動スルトキ之ヲ用ヒ垂布ハ炎暑ノ際
救護輸長、救護輸送人之ヲ用フ

脚絆ハ團體ヲ以テ行動スルトキ之ヲ着用ス其ノ他ノ場合ト雖
雨雪ノトキ又ハ服務ノ都合ニ依リテハ之ヲ着用スルコトヲ得
ヘシ

背囊、水筒、雜囊ハ團體ヲ以テ行動スルトキ之ヲ携帯ス但シ救
護副理事、救護調劑員以上ニ在リテハ水筒、飯盒ノミヲ携帯ス
水筒、雜囊ヲ携帯スルトキハ左肩ヨリ右脇ニ之ヲ掛ク背囊ニ
ハ外套(著用ノトキハ除ク)毛布、飯盒、豫備靴ヲ束裝スルモノト
ス

襟章ハ救護團體ヲ編成スル場合ニ之ヲ附著ス

救護醫員、救護看護人長、救護輸長、救護看護人、救護輸送人ハ
團體ヲ以テ行動スル時ハ其ノ職務ニ必要ナル救護材料ヲ携帯
ス

二 女救護員ノ服裝ハ帽、衣、袴、外套、手套、靴ヲ用フ但シ看護
ニ従事スル場合ハ看護衣ヲ着用スルモトス

第三編 陸海軍ノ制規及陸軍衛生勤務ノ要領

陸海軍軍人ノ官等等級及其ノ服制ノ大要、勳章記章及其ノ佩用式其ノ他陸軍刑法、懲罰令ノ大意等ニ係ル制規ハ救護輸送人生徒ハ曾テ陸軍ニ在リテ了知セルモノナルカ故ニ殊更ニ之カ教授ヲ加フルノ要ナシ依リテ茲ニ陸軍軍屬ノ讀法ノミヲ掲ク

第一章 陸軍軍屬讀法

- 一 陸軍軍屬トハ陸軍ニ従事スル文官及其ノ勤務ニ服スル雇員傭人等ニシテ軍人ト相須チ其ノ用ニ供セラルル者ヲ云フ
- 二 軍屬ノ爲ニハ讀法ノ式アリ讀法ノ式ヲ受ケタル者ニシテ其ノ條件ニ違背シタルモノハ相當ノ處罰ヲ受クルノミナラス罪

ヲ犯シタル者ハ軍人ト等シク陸軍ノ刑法ヲ適用セララル

三 讀法ハ初テ採用シタル者ノ所屬長ニ於テ讀法名簿ニ記載スル左ノ條件ヲ讀示シ採用セラレタル者ヲシテ之ニ年月日ヲ記入シ署名捺印セシムルヲ法トス

- 一 誠心ヲ本トシ忠實ヲ盡シ勤務ニ勉勵スヘキ事
- 二 長上ニ敬禮ヲ盡シ等輩ニ親睦ヲ旨トスヘキ事
- 三 長上ノ命令ハ其ノ事ノ如何ヲ問ハス直ニ服従スヘキ事
- 四 言行ヲ慎ミ質素ヲ尙フヘキ事

四 救護員モ亦戰時事變ニ方リ陸軍ノ統轄下ニ在リテ其ノ衛生勤務ヲ幫助スル場合ハ讀法ノ式ヲ履行セシメラルモノナリ

第二章 陸軍ノ戰時勤務

第一 戰時衛生機關

- 一 陸軍ノ戰時衛生機關ハ平時ニ比シテ著シク増加ス即チ大本營ニ野戰衛生長官部、野戰軍ニ軍軍醫部、師團軍醫部、衛生隊、野戰病院、兵站軍醫部、兵站病院、衛生豫備廠、患者輸送部、守備軍ニ要塞軍醫部、要塞衛生隊、要塞病院、(對馬守備隊病院)留守部隊ニ留守師團軍醫部、豫備病院等ヲ置カルルノ外場合ニ依リ戰地定立病院、舍營病院、患者療養所等ヲ開設セラレ又患者輸送ノタメ病院列車、病院船等ヲ置カル
- 二 野戰衛生長官部ハ大本營ニ在リテ兵站總監ニ隸シ野戰衛生事務ヲ統理シ其ノ長官ハ日本赤十字社救護員ノ使用ニ關シ救護理

- 事首長ニ命令ヲ與フル權ヲ有ス
- 三 軍軍醫部ハ軍ノ衛生事務ヲ掌理シ其ノ衛生勤務ヲ指揮監督ス若野戰衛生長官部ト連絡ヲ絶チタルトキハ軍軍醫部長ハ其ノ長官ノ職務ヲ攝行スルモノトス
- 四 師團軍醫部ハ師團ノ衛生事務ヲ掌理シ其ノ衛生勤務ヲ指揮監督スルコト平時ニ異ナラサルモ戰時ニ在リテハ軍醫部長ハ猶師團ノ作戰計畫其ノ他ノ關係ニ伴ヒ適當ニ任務ヲ遂行スルヲ要スルモノトス
- 五 衛生隊ハ本部及擔架中隊ヨリ成リ戰線ノ後方ニ紮帶所ヲ開設シ傷者ヲ收療シテ速ニ後送スルヲ以テ任トシ其ノ動作ハ師團長ノ命令ニ依リ衛生勤務ニ關シテハ師團軍醫部長ノ指揮ヲ受ク
- 六 野戰病院ハ紮帶所及戰線ヨリ傷者ヲ收容シ必要ノ治療ヲ加ヘ

タル後後送スルヲ以テ主要ナル任務トス其ノ運動及開閉ハ師團長ノ命令ニ依リ衛生勤務ニ關シテハ師團軍醫部長ノ指揮ヲ受クルコト衛生隊ニ同シ

七 戰地ニ於テ部隊ノ駐留久シキニ彌ルトキハ其ノ患者ヲ收療スルタメ野戰病院ノ職員材料ヲ以テ舍營病院ヲ開設ス舍營病院ハ師團前進ニ際シテハ速ニ兵站部ノ職員ト交代スルモノトス

八 兵站軍醫部ハ兵站管區内ノ衛生事務ヲ掌理シ其ノ管區内ニ於テ勤務ニ服スル衛生員ハ其ノ常屬ト否トニ拘ラス凡テ之ヲ指揮監督シ又前方ノ狀況ニ注意シ衛生豫備員ヲシテ成ルヘク速ニ野戰病院ト交代セシメ其ノ他患者輸送ノ方法及衛生材料補填ノ方法ヲ完カラシムル等重要ナル任務ヲ有ス

九 衛生豫備員ハ兵站軍醫部長ノ指揮下ニ在リテ豫備員長以下若

千名ノ衛生部員ヨリ成リ野戰病院前進ノ際之ト交代シテ戰地定立病院ヲ開設スルヲ以テ任トス

十 戰地定立病院ハ野戰病院ヲ閉鎖シ衛生豫備員之ニ代リタル時ヲ以テ成立シ其ノ地名ヲ冠シテ某地定立病院ト稱ス戰地定立病院ハ患者ヲ轉送シ終ル迄其ノ地ニ於テ業務ヲ繼續スルモノトス

十一 兵站病院ハ兵站地ヲ通過スル部隊及兵站管區内ニ在ル部隊ノ患者竝後送患者ノ輸送ニ堪ヘサル者ヲ收療スル爲ニ設クルモノニシテ其ノ職員ハ兵站司令部附衛生部員ヲ充用ス又衛生豫備員及患者輸送部ノ職員ヲ以テ其ノ勤務ヲ幫助セシムルコトアリ

兵站病院ノ衛生勤務ニ關シテハ兵站軍醫部長之ヲ指揮シ軍紀及給與ニ關シテハ兵站司令官之ヲ指揮ス

十二 兵站管區内ニハ兵站病院ノ外兵站地ヲ通過スル患者ヲ保護

- スルタメ兵站司令部ニ於テ患者療養所ヲ設クルコトアリ其ノ職員ハ兵站司令部附ノモノヲ以テ之ニ充ツルヲ例トシ場合ニヨリ兵站病院ノ附屬トシテ之ヲ設クルコトアリ
- 十三 衛生豫備廠ハ作戰軍及兵站管區内ノ各部隊ニ衛生材料及患者用被服ヲ配送スルヲ以テ其ノ任トス
- 十四 患者輸送部ハ兵站管區内ニ於ケル患者ヲ後送スルヲ以テ其ノ任トシ業務執行ノタメ患者集合所ヲ開設ス
- 患者集合所ニハ清涼飲料、興奮藥及綑帶材料ヲ備ヘ要スレハ食餌、寢具ヲ給シ、煖ヲ與フルノ用意ヲ整フルモノトス而シテ前方ヨリ運搬シ來リタル患者ヲ診査シ相當ノ手當ヲナシ引續キ輸送ニ堪フル者ハ後送シ重症者ハ兵站病院ニ移スモノトス
- 十五 要塞軍醫部ハ要塞ノ衛生事務ヲ掌理シ戒嚴ノ布告若ハ宣告

- ノ日ヨリ要塞司令官ノ命令ヲ以テ地方衛生事務ヲ監督ス軍醫部長ハ通例要塞病院長ノ兼務トス
- 十六 要塞衛生隊ハ戰線ノ背後ニ綑帶所ヲ開設シ傷者ヲ收療シテ成ルヘク速ニ要塞病院ニ後送スルヲ任トス
- 十七 要塞病院ハ其ノ地所在ノ衛戍病院ヲ以テ之ニ充テ某地要塞病院ト稱ス要塞地ニ於ケル患者ヲ收療シ其ノ患者中重症者ハ當分戰役ニ堪ヘサル者ハ最寄豫備病院ニ轉送スルモノトス
- 對馬守備隊病院ニ關スル規定ハ要塞病院ニ異ナルコトナシ
- 十八 留守師團軍醫部ハ師管内各部隊ノ衛生事務ヲ掌理シ其ノ衛生勤務ヲ指揮監督ス
- 十九 豫備病院ハ其ノ地所在ノ衛戍病院ヲ以テ之ニ充テ某地豫備病院ト稱シ場合ニヨリテハ衛戍病院ヲ併置スルコトアリ豫備病

院ハ戰地ヨリ還送ノ患者及當該衛戍諸部隊ノ患者ヲ收療スル所トシ猶衛生部下士以下ノ教育及所在地並附近部隊ノ衛生材料補填等ヲ掌ル

二十 隊附衛生部ハ概ネ平時ノ如ク軍醫看護長看護卒ヨリ成リ其ノ他歩兵隊及砲兵隊ニハ擔架術ノ教育ヲ受ケタル兵卒アリ必要ニ應シ傷者ノ救護及運搬ニ從事セシメ歩兵隊ニ於テハ其ノ間之ヲ補助擔架卒ト稱ス然レトモ補助擔架卒ハ赤十字條約ノ保護ヲ受クルノ權ヲ有セス隊附衛生部員行軍及駐軍中ノ衛生勤務ハ概ネ平時ニ異ナルコトナキモ戰闘ニ際シテハ戰線ニ於テ傷者ヲ集拾救護シ場合ニ依リ假紉帶所ヲ設クルコトアリ

第二 戰時衛生勤務ノ大要

其一 患者ノ還送

一 野戰病院、戰地定立病院及兵站病院等ニ於テハ作戰軍ニ生スル患者ヲ收容スヘキ餘地ヲ作り戰地ニ於ケル患者ノ輻輳ヲ避クルタメ其ノ患者ヲ成ルヘク速ニ豫備病院ニ還送スルヲ主眼トス

二 海路ノ便ヲ有スル患者ノ還送ニハ病院船ヲ用フルヲ通則トシ又患者船ヲ用フルコトアリ病院船ハ患者ヲ輸送スル爲ニ特別ノ設備ヲ施シ所要ノ衛生員及衛生材料ヲ整備シタルモノニシテ外部ヲ白色ニ塗り幅約一メートル半ノ綠色横筋(政府ニ於テ設備シタルモノ)又ハ赤色横筋(赤十字社ニ於テ設備シタ

ルモノヲ施シ國旗ト共ニ白地赤十字ノ旗ヲ掲ケテ之ヲ標識スルモノトス

三 患者船ハ病院船トハ全ク其ノ性質ヲ異ニシ特別ノ場合ニ於テ運送船ニ所要ノ衛生員及衛生材料ヲ整備シ一時患者用トナシタルモノヲ云ヒ重症患者、傳染病患者及精神病者ヲ搭載セサルヲ例トス

四 陸路ノ輸送ハ鐵道ニ依リ病院列車、補助病院列車又ハ患者列車ヲ用フルヲ通則トスレトモ鐵道ノ設ナキ所ニ於テハ擔架、車馬、駕籠其ノ他急造若ハ地方特有ノ運搬具ヲ用ヒ河川アルトキハ其ノ舟ヲ利用シ患者輸送部專ラ之ニ任スト雖兵站路延

長シ該部前方ノ業務繁劇ナルトキハ後方ノ輸送ハ兵站司令部ニ於テ之ヲ擔任スルモノトス

五 病院列車トハ安臥ノ位置ニ於テ輸送スヘキ患者ノ爲ニ特ニ設備シタル列車ニシテ所要ノ衛生員及衛生材料ヲ整備シ各車輛ハ其ノ長側ノ中央ニ徑約一尺ノ白地赤十字ヲ描キ之ヲ標識スルモノトス

六 補助病院列車トハ安臥ヲ要スル患者ヲ輸送スルタメ普通ノ列車ニ一時或ル裝置ヲ施シタルモノヲ云ヒ患者列車トハ坐位輸送ニ堪フル患者ヲ送ルニ用フル普通ノ列車ヲ云フ

七 輸送患者中傳染病者アルトキハ傳染病豫防方法ニ從ヒ豫防

消毒ヲ嚴行シ其ノ還送ハ病院列車及病院船ニ依ル又精神病者及精神異狀アル患者ハ特ニ周密ノ注意ヲ加ヘ患者及護送者ニ危険ナガラシム

八 俘虜ノ患者ニシテ戰役中快復ノ見込ナキモノ及軍務ニ堪フヘカラサルモノハ敵國ニ於テハ成ルヘク地方官衙ニ依託スルモノトス

九 患者ヲ轉送スルニハ傷病及輕重ノ區分(輕症トハ徒步シ得ヘキ者若ハ坐位ニ在リテ車送シ得ヘキ者、重症トハ擔架ヲ用フヘキ者若ハ臥位ニ在リテ車送シ得ヘキ者ヲ云フ)竝其ノ人員等ヲ收容官衙ニ豫報シ傳染病者ハ其ノ病名及人員ヲ特報ス

又船舶輸送ニ在リテハ病院船醫長若ハ首坐ノ軍醫(醫員)ヨリ適當ノ地ニ於テ收容官衙ニ電報スルモノトス

十 病院列車、病院船等ニ依ラスシテ患者ヲ轉送スルトキハ發送官衙ニ於テ護送者ヲ屬シ患者及護送者ノ爲ニ最寄兵站官衙ヨリ軍用旅券ヲ受領シテ附與ス而シテ患者ト共ニ患者送狀(甲號、乙號ニ別ル)病床日誌、處方録ヲ護送者ニ交付シ且患者ノ携帶品ニハ患者附托品表(甲號、乙號ニ別ル)重症者ニ在リテハ尙金錢貴重品ニ同品目表(甲號、乙號ニ別ル)ヲ添ヘテ之ヲ收容官衙ニ交付セシメ患者送狀、患者附托品表及金錢貴重品品目表ニハ收容官衙ヨリ各乙號ニ受領ノ證明ヲ受ケシムルモノト

ス

十一 護送者、轉送途上ニ於テ止ヲ得ス指定外ノ處ニ患者ヲ附托シタルトキ若ハ途上死亡シタル者アルトキハ患者ニ關シテハ前項ノ手續ヲ爲シ死者ニ關シテハ其ノ遺骸、携帶品ヲ最寄兵站司令部ニ交付シ受領ノ證明ヲ受ケ共ニ患者送狀ノ甲號ニ其ノ事由、狀況ヲ記入シテ歸著後報告シ死者ノ病床日誌ニハ死亡ノ年月日時及地名ヲ記シ處方録ト共ニ携へ歸ルモノトス

十二 發送官衛ニ於テ前項ノ報告ヲ受ケタルトキハ死亡證書ヲ發送シ死亡通報ヲナシ病床日誌、處方録ハ當該官衛ニ於テ之ヲ保管ス

十三 病院列車、病院船等ニ於テ患者ヲ還送スルニ當リテハ發送官衛ニ於テ之ヲ停車場司令部若ハ碇泊場司令部ニ通報シ該司令部ヨリ發車、發船時刻ノ通報ヲ受ケ鐵道ニ在リテハ發車時刻一時間前、船舶ニ在リテハ發船約二時間前マテニ停車場若ハ碇泊場ニ到着スル如ク發程セシム而シテ其ノ乗車、乗船地ニ到ルマテノ輸送ハ發送官衛ニ於テ之ヲ擔任ス

十四 病院列車、病院船等ニ於テ還送患者ヲ受領シ若ハ之ヲ交付スルトキ及列車若ハ船内ニ於ケル患者ノ取扱ハ概ネ病院ニ於ケル入院患者ノ取扱ト同一ナルモ之ヲ受領スルトキハ患者送狀、患者附托品表及金錢貴重品品目表ニ受領ノ證明ヲ與へ

之ヲ引渡ストキハ更ニ其ノ證明ヲ承クルモノトス

十五 病院列車ニ於ケル食餌ハ列車自ラ之ヲ準備シ其ノ補充ハ兵站司令部ヨリ受クルモノナレトモ補助病院列車及患者列車中ノ食餌ハ線區司令官ノ指定セル給養停車場ニ於テ準備スルモノトス故ニ特種ノ食餌ヲ要スル患者アルトキハ發送官衙ニ於テ其ノ種類、食數ヲ乗車地停車場司令部ニ通告シ該司令部ハ之ヲ給養停車場ニ豫告スルモノトス

十六 病院船、患者船等ニ於ケル食餌ハ何レモ其ノ船内ニ於テ準備スルモノトス

十七 鐵道、船舶輸送ノ患者ハ下車、下船地ニ於テ收容官衙ノ受

領員ニ交付シ收容官衙ニ至ル迄ノ患者護送ハ收容官衙ニ於テ之ヲ擔任ス

十八 收容官衙若ハ患者受領員ニ於テ患者ヲ受領シタルトキハ患者送狀、病床日誌、處方錄及患者ノ携帶品、患者附托品表、金錢貴重品品目表ヲ點檢照合シ患者送狀、患者附托品表、金錢貴重品品目表ノ各乙號ニ受領ノ證明ヲ爲スモノトス

其二 患者ノ遺言

- 一 患者ノ遺言ハ民法ノ規定ニ依リ遺言書ヲ作ルモノトス而シテ遺言書ニハ遺言ノ全文、日附及氏名ヲ自書シ且捺印セシムルモノトス
- 二 遺言書ハ將校、同相當官一人及證人二人以上ノ立會ヲ以テ作り

各自之ニ署名捺印スルモノトス但シ將校同相當官其ノ場所ニ在ラサルトキハ准士官又ハ下士一人ヲ以テ之ニ代ヘ又入院中ハ其ノ病院ノ醫師ヲ以テ之ニ代フルコトヲ得ルモノナリ

三 自書シ能ハサル重症患者ニ在リテハ證人二人以上立會ヒ遺言ノ趣旨ヲ筆記シタル後各自署名捺印スルモノトス此ノ遺言書ハ證人又ハ利害關係人ヨリ遲滞ナク軍法會議ノ理事ニ其ノ確認ヲ請求スルモノトス

其三 死者ノ處置

一 戰地ニ於ケル死者ノ遺骸ハ戰線ニ在リテハ其ノ所屬部隊ニ兵站管區内ノ各病院及患者輸送部等ニ在リテハ最寄兵站司令部ニ鐵道輸送中ニ在リテハ下車地若ハ三十分以上停車シ且附近ニ兵站司令部アル地ノ停車場司令部ニ交付シ船舶輸送中ニ於ケル死

者ノ遺骸ハ上陸地若ハ寄港地ノ兵站司令部等ニ交付スルモノトス止ヲ得サル場合ニハ水葬ニ附スルコトヲ得ルモノナリ

二 内地豫備病院等ニ於ケル死者ノ遺骸ハ本人所屬ノ部隊若ハ補充隊等ニ交付シ其ノ部隊遠隔セルトキ又ハ交付スヘキ部隊ナキトキハ其ノ病院ニ於テ處置シ若ハ遺骸引受願人ニ引渡スモノトス

三 傳染病者ノ遺骸ハ爲シ得ル限り其ノ死亡シタル部隊ニ於テ火葬スルモノトシ若他ニ交付スル場合ニ在リテハ其ノ被服ニ昇汞水若ハ石炭酸水ヲ撒布スルカ又ハ之ヲ浸シタル布ヲ以テ包ムモノトス

四 死者ノ携帶品、金錢、貴重品、遺言書等ハ患者附托品表、金錢、貴重品、品目表ト共ニ遺骸ヲ交付スヘキ部隊ニ引渡シ遺骸及遺言書ノ受

領證書ヲ徵シ患者附托品表、金錢貴重品目表ニハ受領ノ證明ヲ受クルモノトシ尙鐵道若ハ船舶輸送中ノ死者ノ遺骸ヲ兵站司令部ニ交付スルトキハ死亡證書ヲ添付スルモノトス

第四編 人體ノ構造及其ノ作用

第一章 人體外部ノ名稱

人體ヲ大別シテ頭首、軀幹(胴)及四肢ノ三部トス(第四圖)

第一 頭首

頭首ハ身體ノ最上部ニ位スル貴要ノ部ニシテ分テ二部トス頭蓋及顔面是レナリ

頭蓋ハ其ノ前方ヲ前頭、上方ヲ顛頂、後方ヲ後頭、兩側ヲ顛額ト云フ

顔面ニハ眼、鼻、頰、唇、頤及顎アリ

頭蓋ト顔面トノ境界ノ兩側ニハ耳翼アリ中央ニ外聽道口ヲ有ス

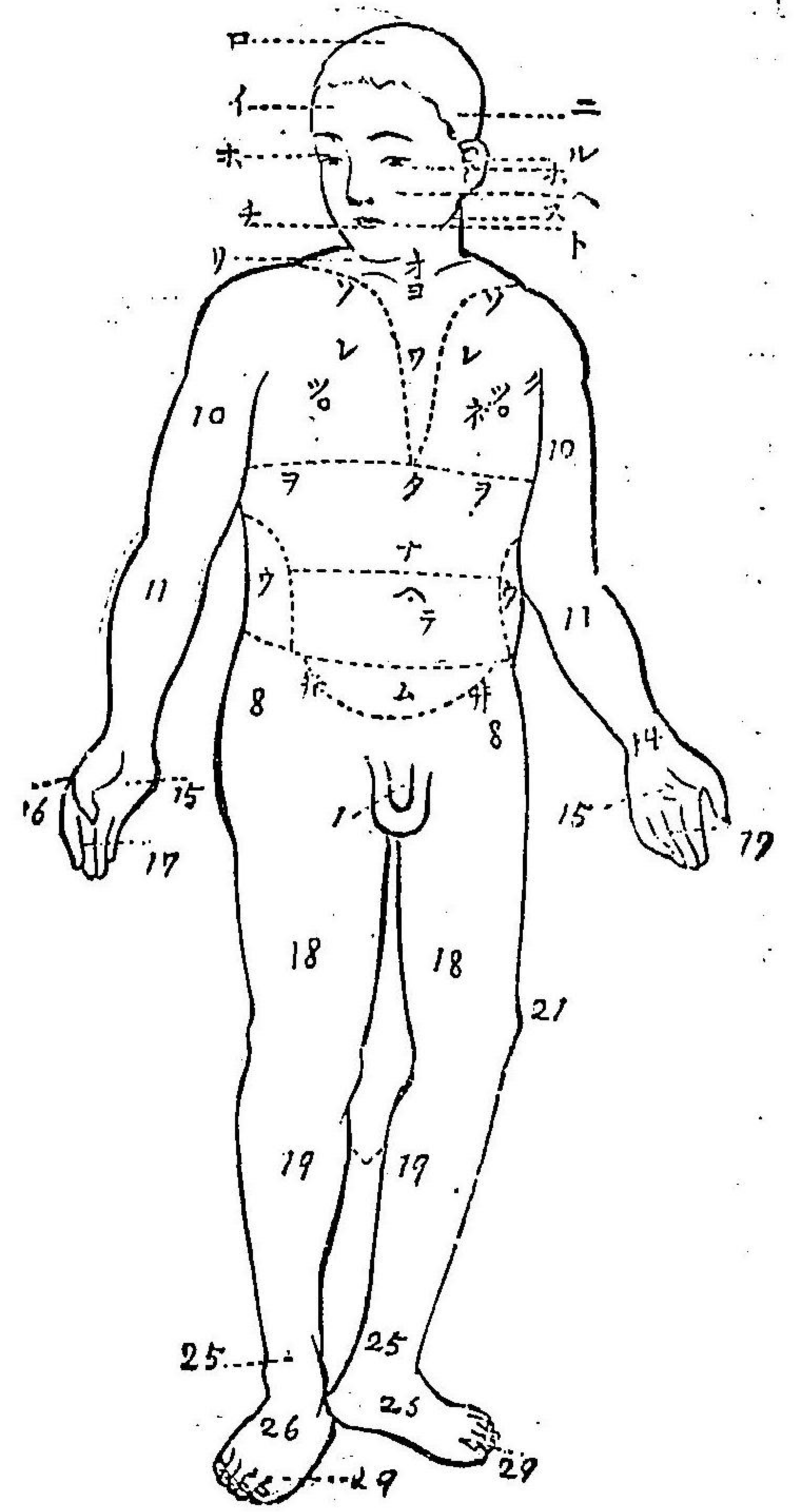
第二 軀幹

軀幹ヲ大別シテ頸部、胸部、腹部及骨盤ノ四部トス而シテ胸部以下ノ後面ヲ背部ト云フ

頸部ハ頭首ト軀幹トヲ連續セシムル部ニシテ其ノ前面ノ中央ヲ前頸、後面ヲ項ト云フ

胸部ハ胸廓ノ前面ニシテ中央ヲ胸骨部ト云ヒ上ハ頸窩ニ下ハ心窩(胃窩)ニ連ル胸骨部ノ兩側ヲ肋骨部(前胸部)ト云ヒ肋骨部ノ最上部ニ於テ横ニ隆起スル部ヲ鎖骨部ト云フ鎖骨部ノ上下ニハ淺窩アリ上ノ淺窩ヲ鎖骨上窩、下ノ淺窩ヲ鎖骨下窩ト云フ左右肋骨部ノ中央ニハ乳房アリ左乳房ト胸骨トノ間ニシテ第三乃至

第四圖 甲

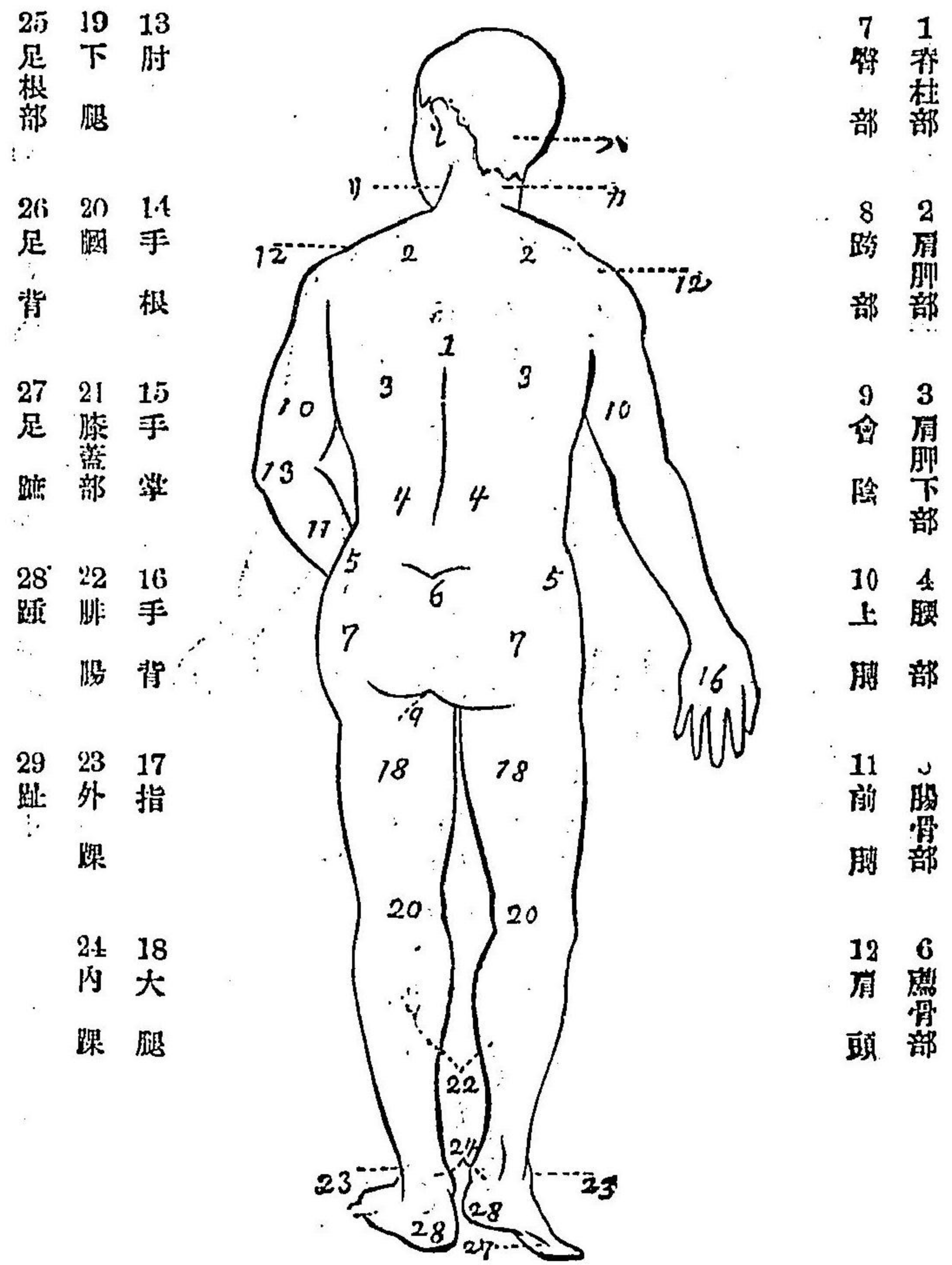


イ前頭
ロ頤
ハ後頭
ニ額
ホ眼
チ唇
リ頰
メ頸
ル外聽道口
ヘ鼻

オ前頸
カ項
ヨ頸窩
タ心窩
レ肋骨部
ソ鎖骨部
ツ乳房
ネ心臓部
ナ上腹
ウ臍部
ム下腹
ウ脇腹
キ鼠蹊
ノ陰部
ナ季肋部
ク側胸部

人體外部ノ名稱

乙圖四第



- 1 脊柱部
- 2 肩胛部
- 3 肩胛下部
- 4 腰部
- 5 腸骨部
- 6 薦骨部
- 7 臀部
- 8 跨部
- 9 會陰
- 10 上膊
- 11 前膊
- 12 肩頭

- 13 肘
- 14 手根
- 15 手掌
- 16 手背
- 17 指
- 18 大腿
- 19 下腿
- 20 腓
- 21 膝蓋部
- 22 腓陽
- 23 外踝
- 24 內踝
- 25 足根部
- 26 足背
- 27 足趾
- 28 踵
- 29 趾

第五肋骨ニ當ル部ヲ心臟部ト云フ而シテ肋骨部ノ最下部ヲ季肋部ト云ヒ胸部ノ兩側ヲ側胸部ト云フ

腹部ハ胸部ノ下方ニシテ其ノ中央ニ臍部(中腹)アリ臍部ノ上ヲ上腹、下ヲ下腹ト云フ而シテ腹部ノ兩側ナル胸部ト跨部トノ間ヲ脇腹(側腹部)ト云ヒ腹部ト大腿トノ界ヲ鼠蹊ト云フ左右鼠蹊ノ相會スル處ハ陰部ニシテ鼠蹊ト大腿トノ間ニアル溝ヲ腹股接際ト云フ

背部ハ其ノ中央ヲ脊柱部ト云ヒ脊柱部ノ上方兩側ヲ肩胛部ト云ヒ其ノ下方ヲ肩胛下部ト云フ肩胛下部ノ下方ニシテ最下肋骨ノ下部ニ當ル處ヲ腰部ト云フ

骨盤ハ腹部ト腰部トノ下ニシテ其ノ兩側ヲ腸骨部ト云ヒ後面ノ中央ヲ薦骨部ト云フ薦骨部ノ下ニシテ兩側ノ太リテ肉多キ處ヲ臀ト云フ臀ハ前方ニ於テ跨部ニ移ル又肛門ト陰部トノ中間ヲ會陰ト云フ

第三 四肢

四肢ヲ大別シテ上肢及下肢トス上肢トハ手臂、下肢トハ足脚ヲ云フ

上肢ヲ分テ上膊、前膊及手ノ三部トス

上膊ハ肩胛關節ニヨリ軀幹ノ上部ニ連ル其ノ接際ノ圓キ處ヲ肩頭ト云ヒ肩頭ノ下面窪ミテ毛アル處ヲ腋ト云フ

前膊ハ上膊ト手トノ中間ニシテ上膊ニ連ル部ヲ肘、手ニ連ル部ヲ手根(腕)ト云フ

手ハ上肢ノ末端ニシテ手掌、手背ノ二面アリ五指ヲ具フ之ヲ拇指、示指、中指、環指(無名指、食指)及小指(季指)ト云フ

上肢ノ拇指側ヲ橈骨側(外側)小指側ヲ尺骨側(内側)ト云フ下肢ヲ分テ大腿(上腿)下腿及足ノ三部トス

大腿ハ上ハ跨關節ニヨリテ骨盤ニ連リ下ハ膝關節ニヨリテ下腿ニ連ル此ノ部ヲ膝ト云フ膝ノ前面ノ隆マレル部ヲ膝蓋部ト云ヒ後面ノ窪メル部ヲ膝臑ト云フ

下腿ハ大腿ト足トノ中間ニシテ其ノ後側ノ太リタル處ヲ腓腸ト云ヒ其ノ下部ノ内側ニアル突起ヲ内踝、外側ニアル突起ヲ外踝ト云フ而シテ足ニ連ル部ヲ足根ト云フ
 足ハ下肢ノ末端ニシテ足背、足蹠ノ二面及踵（跟骨部）アリ五趾ヲ具フ之ヲ第一趾（拇趾）第二趾、第三趾、第四趾及第五趾（小趾）ト云フ

下肢ハ拇趾側ヲ内側、小趾側ヲ外側ト云フ

第二章 骨

骨ハ身體ノ基礎ト爲リ以テ柔軟部ヲ附著セシムルモノニシテ長骨、扁平骨、短骨ノ三種アリ長骨ハ専ラ四肢ニ在リ扁平骨ハ頭首及軀幹ニ在リ短骨ハ頭首、軀幹、手足ニ在リ以上諸骨互ニ連接シテ一體ヲ成

スモノヲ骨格ト云フ（第五圖）
 骨ヲ其ノ所在ニ隨テ頭骨、軀幹骨、四肢骨
 1 長骨 2 扁平骨 3 短骨

第五圖

ニ區別ス
 一 頭骨ハ骨格ノ最上部ニ位ス之ヲ別テ頭顱骨、顔面骨ノ二トス共ニ數多ノ小骨ヨリ成ル

二 軀幹骨ハ胸、腹、骨盤ノ三腔ヲ構造スルモノニシテ脊椎骨、胸廓骨、骨盤ノ三種ヨリ成リ此ノ三種ノ骨モ亦數多ノ骨ヨリ成ル

三 四肢骨ハ之ヲ別テ上肢骨、下肢骨トス上肢骨ハ肩胛骨、鎖骨、上膊骨、前膊骨、手骨ヨリ成リ下肢骨ハ大腿骨、膝蓋骨、下腿骨、足骨ヨリ成ル而シテ下肢骨ハ上肢骨ニ比スレハ重大強硬ナリ是レ全身ヲ支ヘ歩行ノ用ヲナサンカ爲ナリ

第三章 骨ノ結合

二個以上ノ骨端相聯リ運轉ヲ營ムモノヲ關節ト云フ例之ハ肩胛關節、跨關節ノ如キ是レナリ又二骨相聯合シテ運動セサルモノヲ骨縫ト云フ例之ハ頭蓋骨ノ如キ是レナリ關節ノ周圍ニハ關節囊ノ外尙腱狀ノ關節靱帶アリテ其ノ联接ヲ強メ又關節内面ニ關節液膜ト稱スル一層ノ薄キ膜アリテ粘滑ノ液ヲ生シ運轉ヲ滑利ス

第四章 筋

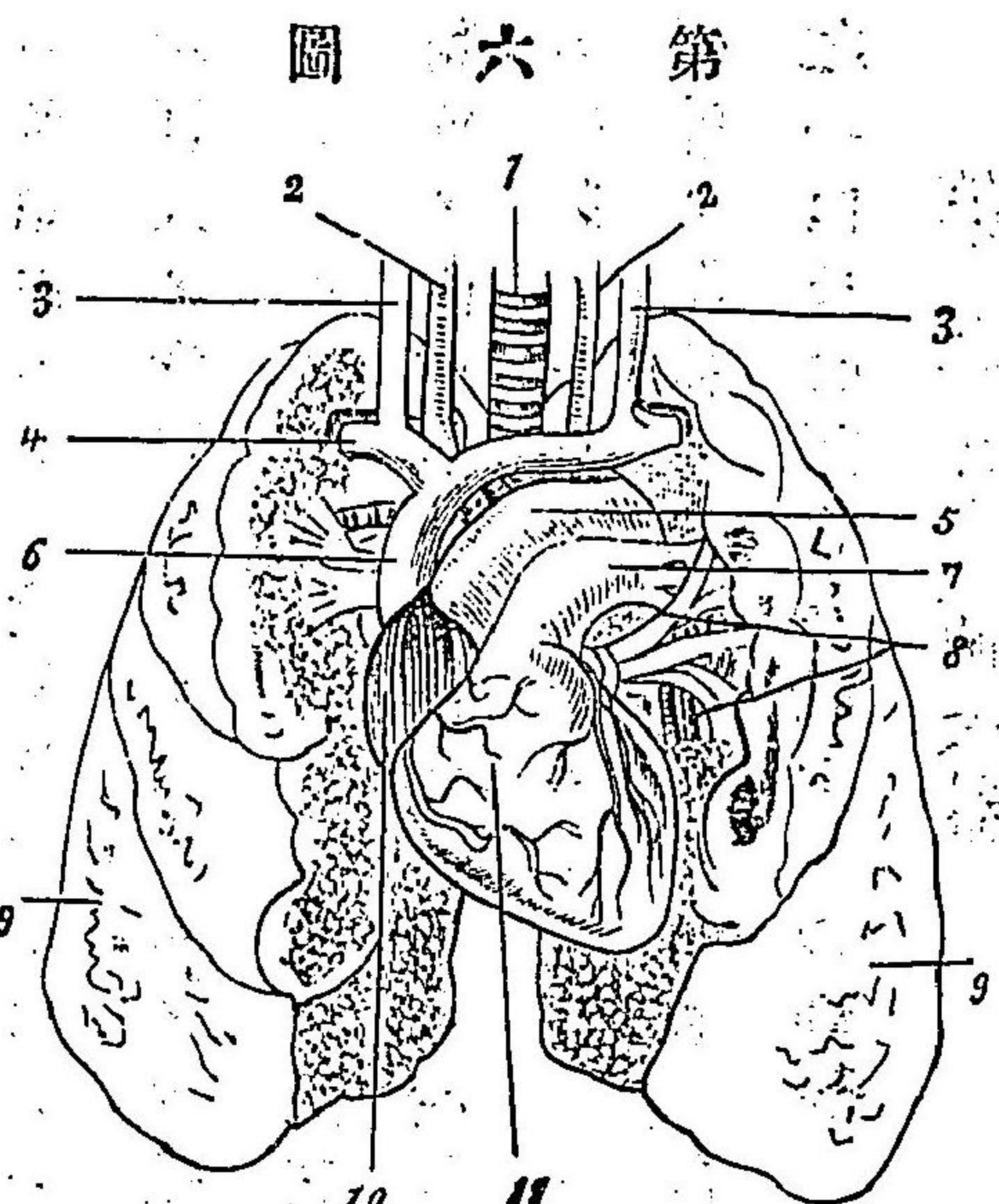
筋ハ所謂肉ニシテ收縮性アリ多クハ骨ニ附着シ身體諸部ノ運動ヲ主ル吾人ノ意識ニ隨テ動クモノヲ隨意筋ト云ヒ意識ニ隨テ主宰シ能ハサルモノヲ不隨意筋ト云フ又其ノ形狀ニ從テ之ヲ長筋、廣筋、短筋、輪筋ノ四種ニ分ツ長筋ハ殊ニ四肢ニ在リ其ノ兩端ハ腱ト爲リテ骨ニ附着ス廣筋ハ扁薄ニシテ多ク頭部及軀幹ニ在リ短筋ハ厚クシテ軀幹ノ深部ニ在リ輪筋ハ身體ノ諸孔ヲ匝リ一ノ輪環ヲ形ツクル例之ハ口及肛門等ニ於ケルカ如シ

第五章 循環器

循環器(血行器)ハ全身ノ血液循環ヲ營ムモノニシテ血管系及淋巴系ヨリ成リ其ノ血管系ハ心臟及血管ヨリ成リ淋巴系ハ淋巴管

及淋巴腺ヨリ成ル

一 血管系 心臓ハ胸腔ノ中央下部ニ於テ左側ニ偏位シ兩肺ノ



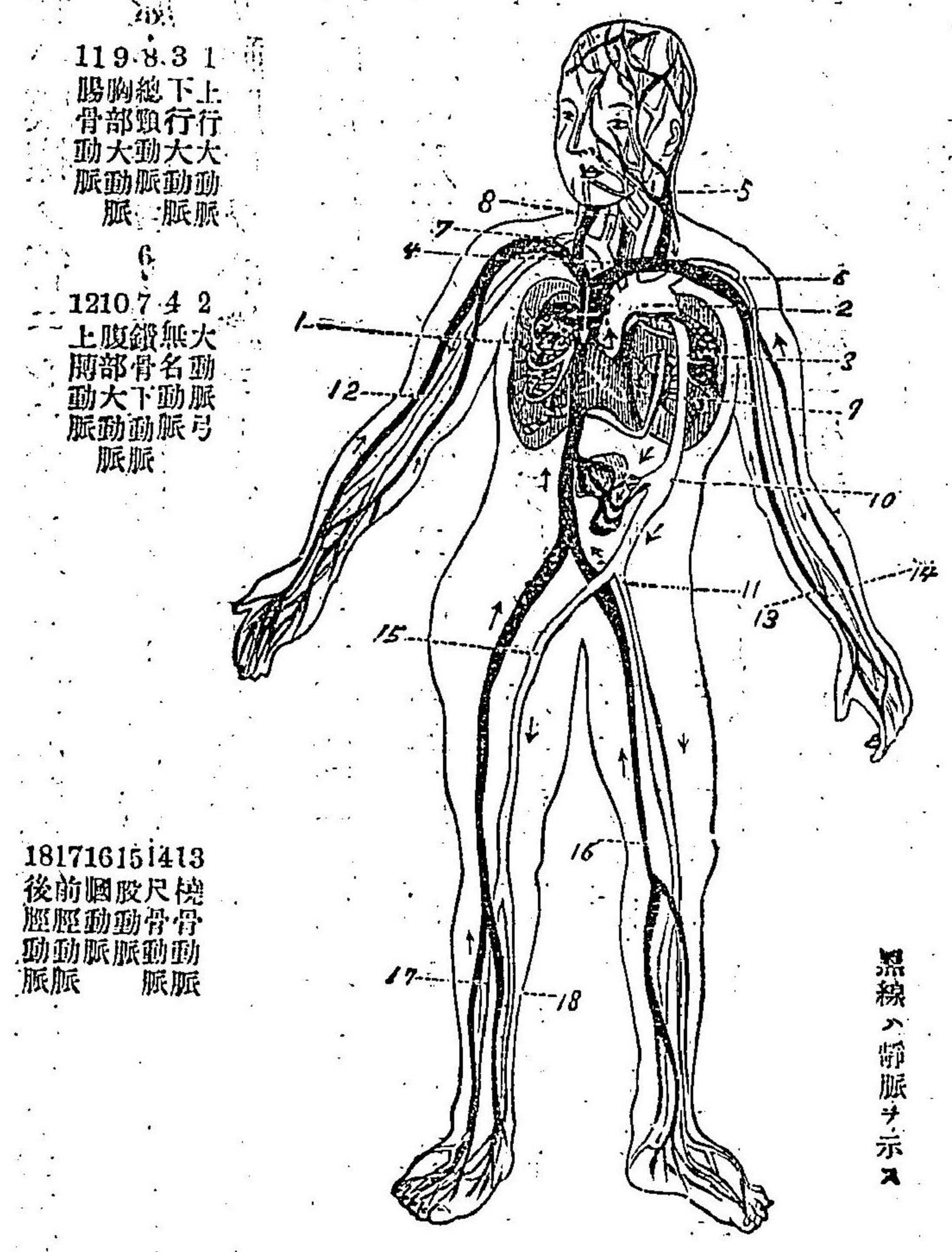
- 1 氣管
- 2 總頸動脈
- 3 總頸靜脈
- 4 鎖骨下靜脈
- 5 大動脈管
- 6 上大靜脈
- 7 肺動脈
- 8 肺靜脈
- 9 肺
- 10 心ノ上房
- 11 心ノ下室

間ニ在リ其ノ質ハ
 筋肉ニシテ拳大ノ
 圓錐形ヲ爲シ心囊
 ト稱スル膜囊ヲ以
 テ被ハル血液循環
 ノ中心ナルヲ以テ
 最重要ナル器ナリ

(第六圖)

血管ハ膜様ノ管ニシテ之ヲ分テ動脈、靜脈及毛細管ノ三種トス
 動脈ハ心臓ヨリ起リ漸次分岐シ全身諸部ニ分布シテ毛細管ニ
 移リ動脈血ヲ心臓ヨリ全身ニ送ル血管ナリ心臓ノ左室ヨリ出
 ル大血管ハ即チ大動脈管ニシテ部位ニ從ヒ分テ上行大動脈、
 大動脈弓及下行大動脈トス而シテ大動脈弓ヨリハ無名動脈、
 鎖骨下動脈及總頸動脈ヲ出シ下行大動脈ハ胸部大動脈及腹部
 大動脈トナリテ胸腔及腹腔内ヲ下行シ種種ノ分枝ヲ出シ終末
 ハ岐レテ左右ノ股動脈トナル此等ノ脈管ハ漸次分枝シテ細小
 トナリ全身ノ組織ニ榮養液ヲ送ルナリ
 靜脈ハ毛細管ヨリ起リ靜脈血ヲ全身ヨリ心臓ニ還流セシムル

第七圖



黒線ハ靜脈ヲ示ス

血管ナリ而シテ靜脈ノ大ナルモノハ同名ノ動脈ト併行シ多ク
 ハ一條ノ動脈ニ二條ノ靜脈ヲ伴フモ皮下ヲ通スル小ナルモノ
 ハ獨行シ皮表ニ青色ノ線ト爲リテ現ル(第七圖)
 毛細管ハ動脈ヨリ靜脈ニ移リ行ク中間ノ微細ナル血管ニシテ
 全身ノ組織ニ分布ス

二 淋巴系 淋巴管ハ血管ノ如ク全身各部ニ分布シテ組織間ニ浸
 出シタル淋巴液ヲ收メ之ヲ血管ニ送ル細管ニシテ一ニ之ヲ水脈
 二管ト云フ
 淋巴腺(水脈腺)ハ淋巴管ノ行路ニ於テ處處ニ存在シ淋巴中ノ夾雜
 物ヲ抑留ス

第六章 神經系及五官

神経系ハ腦、脊髓及神經ヨリ成ル

一 腦ハ頭蓋腔ヲ充填セル柔軟ノ質ニシテ三層ノ膜ヲ以テ其ノ外面ヲ被ハル

二 脊髓ハ腦ノ延ヒタルモノニシテ大後頭孔ヨリ頭蓋腔ヲ出テ脊椎管中ニ入り亦三層ノ膜ニテ被ハル

三 神經ハ白色光輝アル線條ノモノニシテ腦及脊髓ヨリ起リ頭蓋骨及脊椎骨ニ存スル數多ノ孔ヨリ出テ全身各部ニ分布ス

四 外界ノ事ハ神經ニ由テ腦及脊髓ニ傳達シ又腦中ニ發スル精神ノ命令ハ神經ニ由テ全身各部ニ傳達ス故ニ腦脊髓ハ神経系ノ中心ニシテ神經ハ其ノ導線ナリ

五官ハ視、聽、嗅、味、覺ヲ主ルモノニシテ即チ眼、耳、鼻、舌及皮膚是レナリ眼ノ明暗彩色ヲ視別シ耳ノ音響ヲ聴取シ鼻ノ香臭ヲ嗅別シ舌ノ甘

酸ヲ辨知シ皮膚ノ痛痒冷熱ヲ感覺スルハ皆眼、耳、鼻、舌及皮膚ニ分布スル各神經ノ作用ニ因テ然ルナリ

第七章 呼吸器

呼吸器ハ喉頭、氣管及肺ヨリ成ル

一 喉頭ハ頸ノ前面皮下ニ在ル硬キ結節部是レナリ即チ呼吸器ノ門戸ニシテ聲音ヲ發スルノ用ヲ爲ス

二 氣管ハ喉頭ヨリ肺ニ連ル所ノ管ニシテ其ノ下端ハ二枝ニ分レ左右ノ肺ニ入り更ニ分岐シ漸ク細小ト爲リテ小胞ニ終ル之ヲ氣管枝ト云フ

三 肺ハ呼吸器ノ主部ニシテ胸廓ノ大部分ヲ占メ呼吸作用ヲ以テ新鮮ノ大氣ヲ攝取シ其ノ毒素ヲ血液ニ附與シ又血中ノ炭酸ヲ排泄スルノ用ヲ主ル

第八章 榮養器

榮養器ハ口、胃管、胃、腸、肝及膵ノ諸器ヨリ成ル

一 口ハ食物ヲ取り齒ニ由テ挫碎シ同時ニ唾液ヲ混和シテ嚥下ニ便ニス

二 胃管ハ咽頭ヨリ胃ニ連ル管ニシテ食物ヲ胃ニ送ル通路ナリ

三 胃ハ上下ニ口アル膜囊ニシテ上口ハ胃管ニ連リ下口ハ腸ニ連ル胃液ヲ分泌シ食物ヲ消化ス

四 腸ハ長大ナル膜管ニシテ迂曲回轉シテ腹腔ヲ充填シ其ノ下端ハ肛門ニ達ス食物ヲ消化シテ滋養分ヲ血中ニ送り糟粕ヲ化シテ大便トナシ送下スルノ用ヲ爲ス

五 肝、膵ハ腹腔ノ上方ニ在リテ腸ニ接続ス肝ハ膽汁ヲ分泌シ膵ハ膵液ヲ分泌シテ之ヲ十二指腸ニ灌キ食物ノ消化ヲ助ク

第九章 泌尿器

泌尿器ハ腎、輸尿管、膀胱及尿道ヨリ成ル腎ハ腰椎ノ兩側ニ位シ其ノ實質ハ血管ト細管トヨリ成リ尿ヲ分泌ス尿ハ血中ノ廢物ニシテ輸尿管ヲ經テ流下シ骨盤内ニ在ル膀胱ニ入り其ノ中ニ充滿スルトキハ尿意ヲ催シテ尿道ヨリ排泄セラル

第五編 繃帶

第一章 繃帶ノ効用

繃帶トハ專ラ布片ヲ以テ創所及他ノ患部ヲ纏包スルノ謂ニシテ其ノ効用左ノ如シ

- 一 外傷又ハ疾病ニ罹ル部ヲ被ヒテ外ヨリ汚物、病原菌等ノ侵入スルヲ防ク之ヲ蓋護繃帶ト云フ
- 二 患部ニ外用藥ヲ附ケ其ノ滑脱ヲ防ク之ヲ保持繃帶ト云フ
- 三 出血甚シキトキ血管ヲ強壓シテ出血ヲ止メ又ハ創縁ヲ輕壓シテ創口ヲ集合セシム之ヲ壓迫繃帶ト云フ
- 四 身體中弛ミタル部或ハ傷キタル部ヲ支フ之ヲ安保繃帶ト云

フ

- 五 上肢若ハ下肢ノ骨傷、脱臼ヲ整復シタル後其ノ部ヲ固定ス之ヲ固定繃帶ト云フ

繃帶ヲ行フニハ一定ノ繃帶品ヲ用フヘシ繃帶品ハ治療ノ目的ヲ以テ身體ノ一部ニ貼用シ一定ノ時期ニ至ルマテ除去スヘカラサルモノニシテ即チ「ガーゼ」、綿、油紙、絆創膏、壓定巾、卷軸帶、三角巾、副本等是レナリ

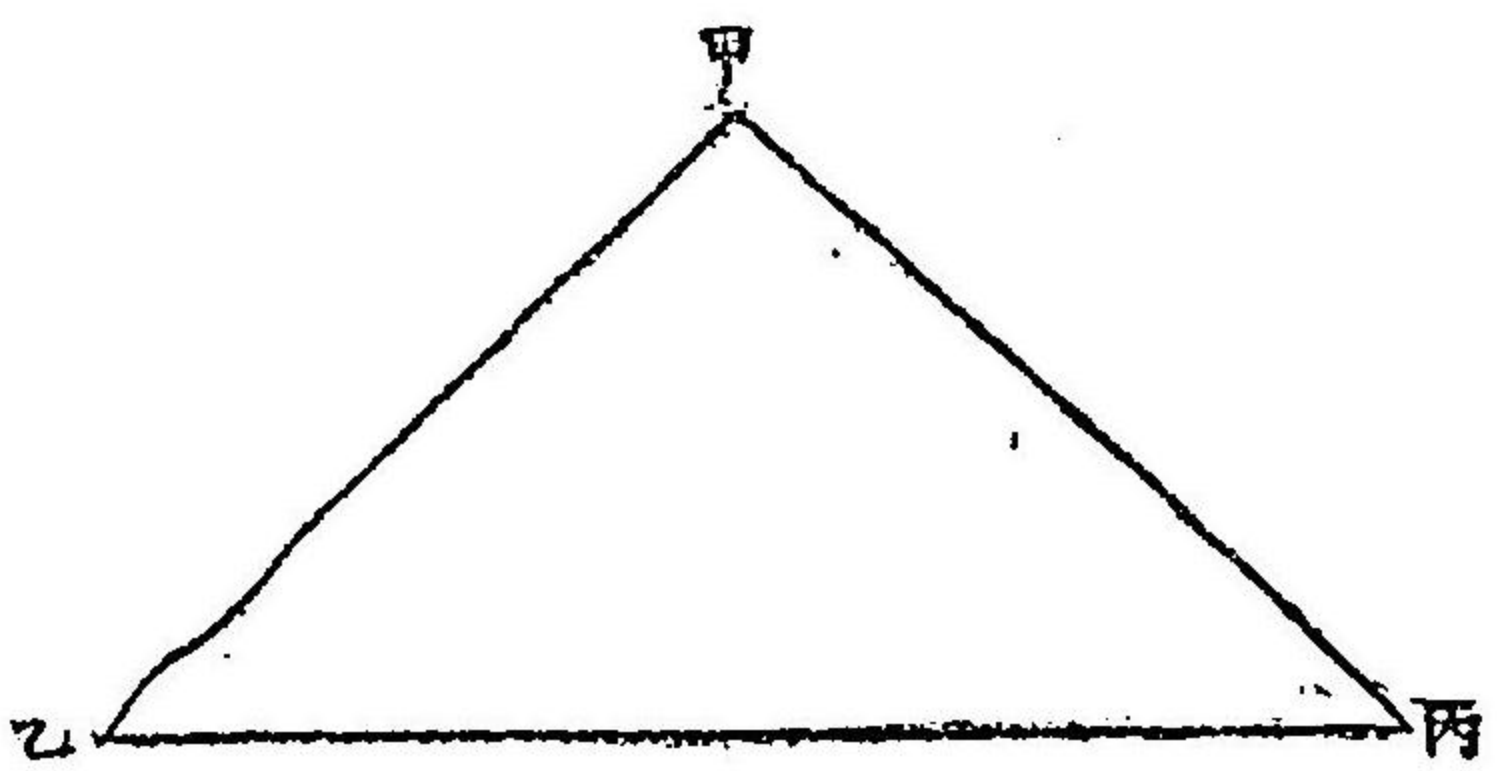
繃帶ノ要旨ハ以上述ルカ如クニシテ輸送班員ニ在リテハ創面ニ貼スル「ガーゼ」等ハ勿論繃帶モ敢テ交換ス可ラス若輸送途上衛生部員在ラサル場合ニ於テ患者ノ繃帶滑脱シ或ハ出血等アリ

テ放置シ難キトキハ成ルヘク從來貼シアル「ガーゼ」等ハ其ノ儘ニ存シ置キ其ノ外部ニ法ノ如ク繃帶ヲ施シテ之カ保護ヲ圖ルヲ可トス

第一章 三角巾ノ用法

三角巾ハ繃帶ノ最モ簡易ナルモノニシテ戰場ニ於テハ多ク之ヲ用フ三角巾ハ第八圖ニ示スカ如ク甲ヲ尖頂トシ甲乙及甲丙ノ間ヲ側縁トシ乙丙ノ間ヲ下縁トシ乙ト丙トヲ尖尾トス
三角巾ヲ尖頂ヨリ下縁ノ正中ニ向ヒ裁リテ二枚ト爲シタルモノヲ半巾ト云ヒ又尖頂ヨリ順次ニ疊ミテ巾二寸許ノ帶ト爲シ用フルヲ疊三角巾ト云フ

第八圖



用法ノ通則ハ先ツ創傷ニ適當ノ處置ヲ爲シタル後其ノ上ヲ卷キ其ノ末端ヲ安全針ニテ縫止ムルカ或ハ兩尖尾ヲ互ニ結フヘシ

三角巾ヲ各部ニ使用スルノ法左ノ如シ
一 頭部ヲ卷クニハ第九圖ノ如ク三角巾ノ中央ヲ頭ノ中央ニ下縁ヲ額ニ當テ尖

頂ヲ項後ニ垂レ其ノ下縁ニテ前頭ヲ覆ヒ耳上ヲ超エテ後頭ニ廻シ此ニテ相交過シ再ヒ額前ニ廻シテ尖尾ヲ結ヒ次テ項後ニ

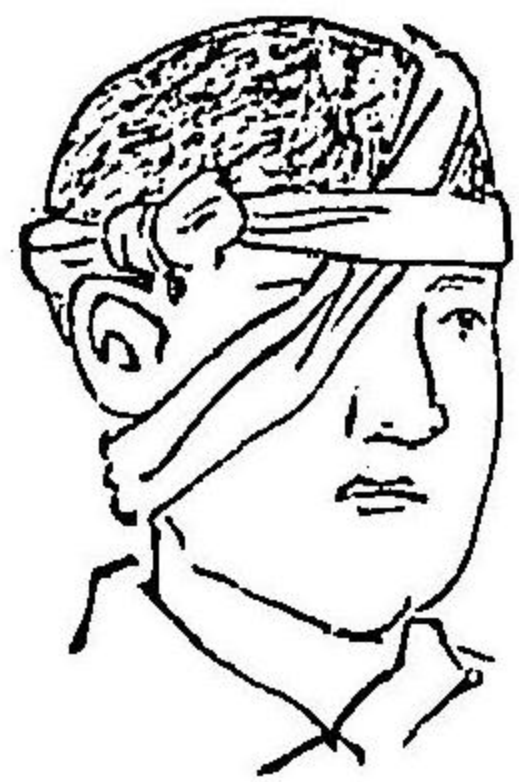
第九圖



垂レタル尖頂ヲ交過シタル部ノ上ニ折リ反シ尖尾ノ一端ト結
ヒ合ハスカ又ハ安全針ニテ縫止ムヘシ

二 面部ノ創ニハ大概疊三角巾ヲ用フ即チ偏眼帶(第十圖)兩眼

第十圖
面前

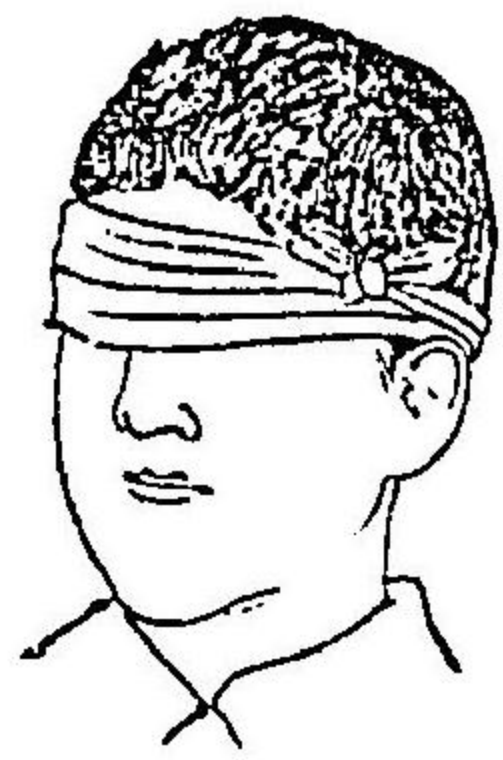


面後



帶(第十一圖)額
帶(第十二圖甲)
頰帶、下顎帶(第

第十一圖



第二十圖

甲



乙

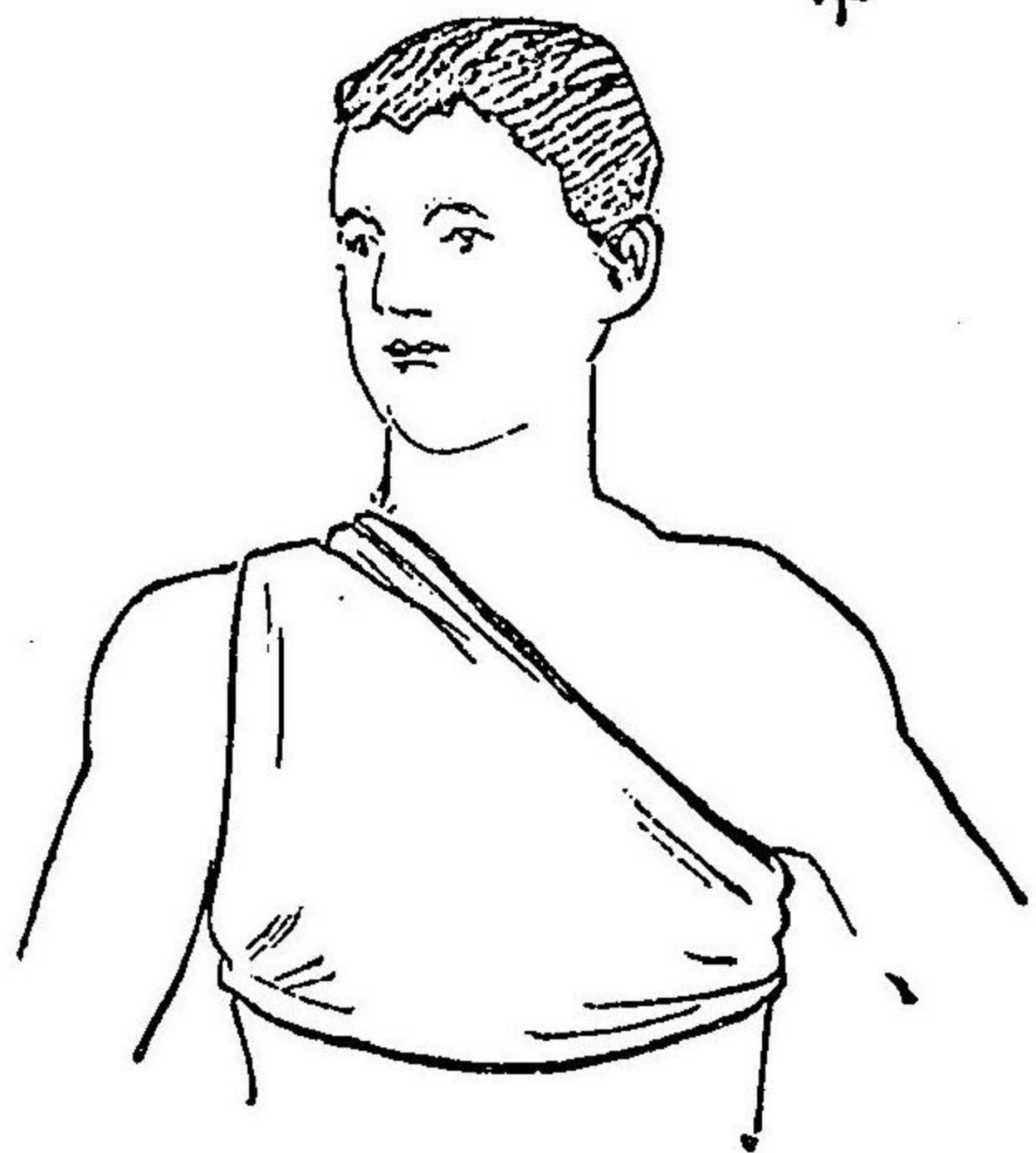


十二圖乙)等ナリ

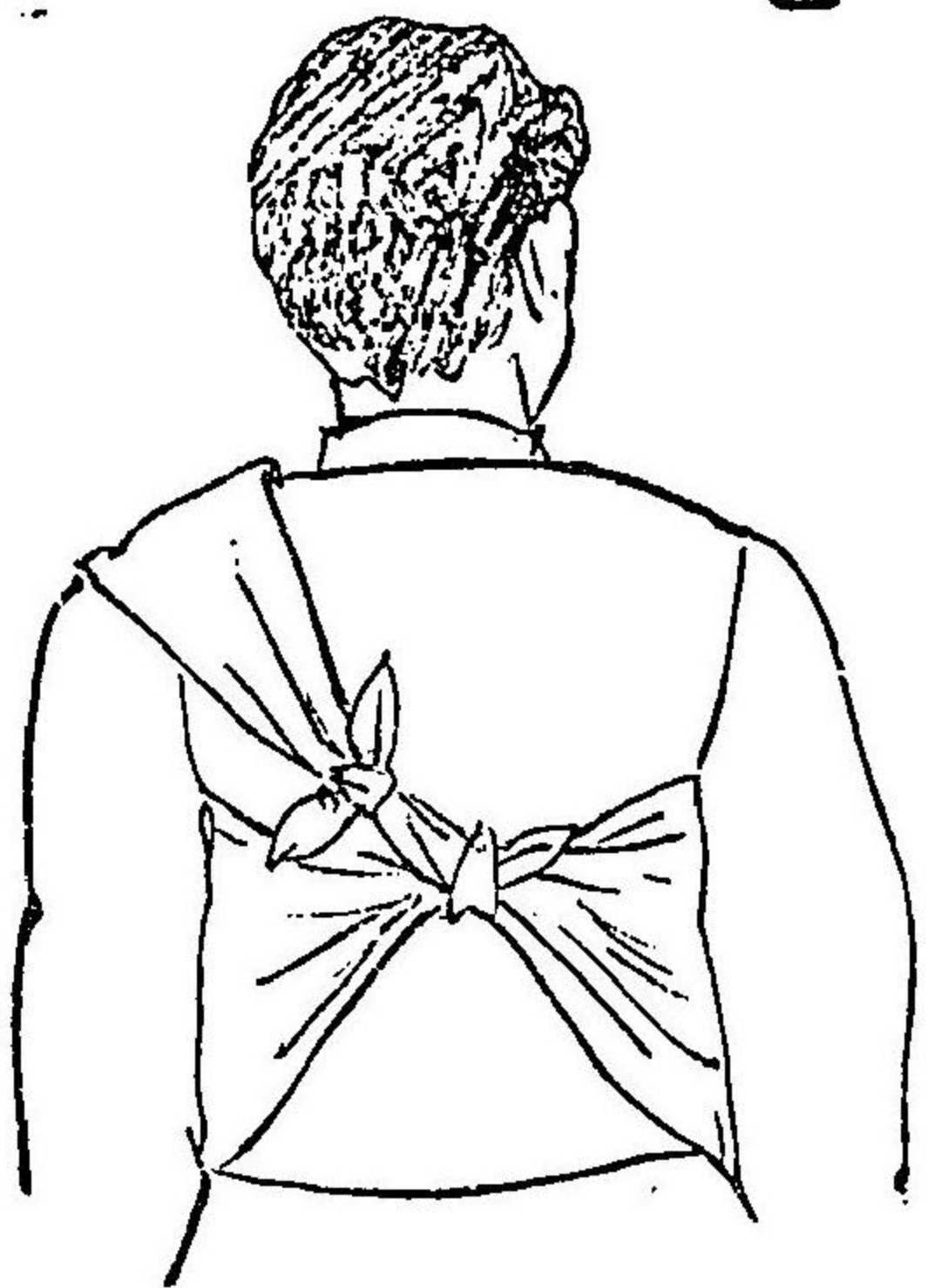
三 頸部ノ創モ亦疊三角巾ニテ卷クヘシ
四 胸部ノ創ニハ三角巾ノ中央ヲ胸部ニ當テ尖頂ハ患側ノ肩ヲ

第三十圖

甲



乙



越エテ後方ニ垂レ置キ下縁ニテ胸ノ周圍ヲ纏ヒ(第十三圖甲)
兩尖尾ヲ左右ノ腋下ヨリ背ニ廻ラシテ結合シ先キニ肩ノ後ニ

三角巾ノ用法

百三十七

垂レタル尖頂ト尖尾ノ末トヲ結合スヘシ(第十三圖乙)

五 背部ノ創ヲ卷ク法ハ胸ノ創ヲ卷クニ同シ唯背後ヨリ掩ヒ胸前ニテ結フヲ異ナリト爲スノミ

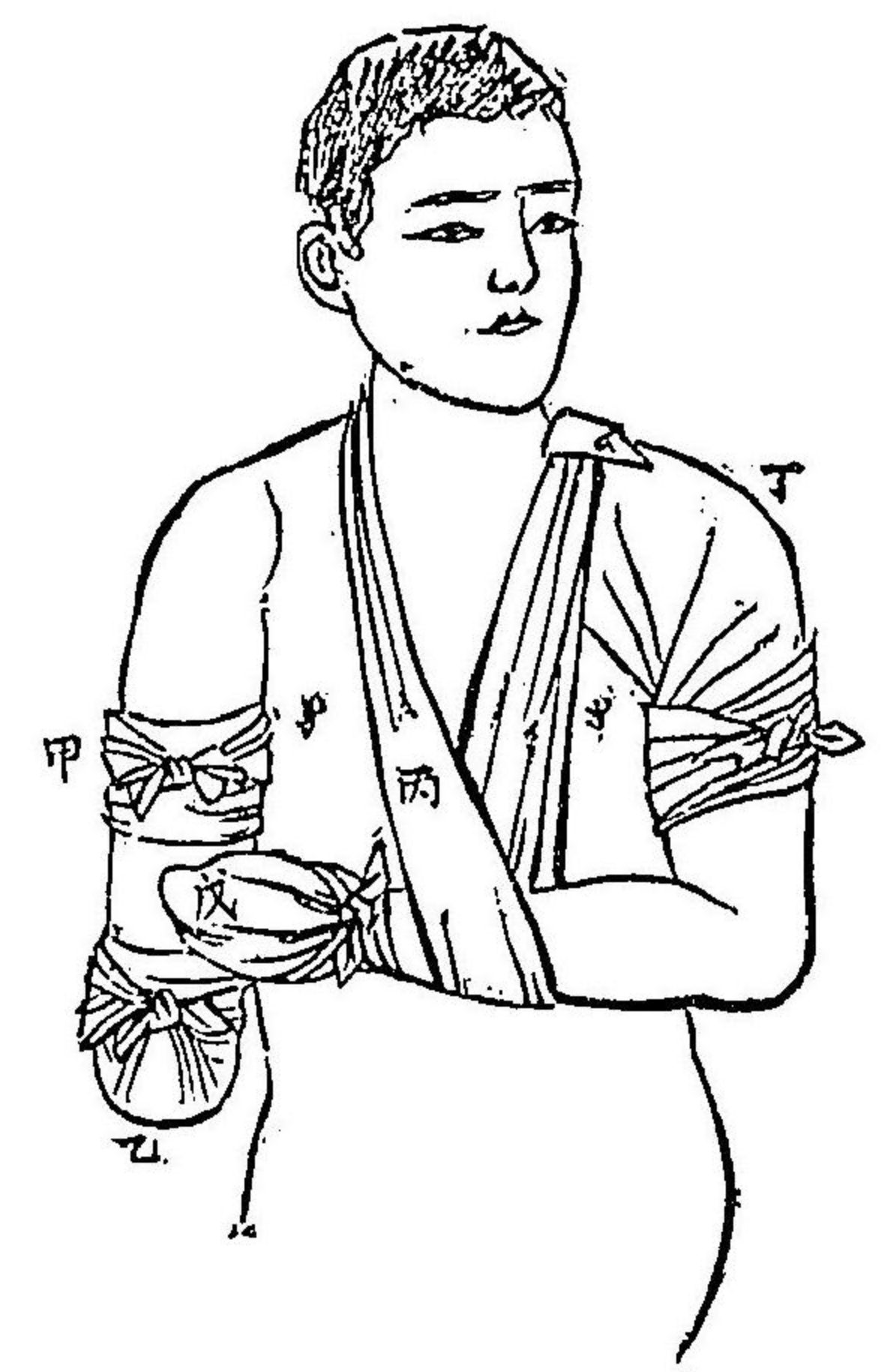
六 腹部ノ創ハ廣ク疊ミタル疊三角巾ヲ用ヒテ輕ク纏フヘシ

七 四肢ノ輕創ハ全巾又ハ半巾ヲ疊三角巾ト爲シテ纏フ(第十四圖甲)

八 四肢ノ截斷根ヲ卷クニハ三角巾ノ下縁ヲ創ノ上方ニ向ケテ斷根ノ下ニ敷キ尖頂ヲ反轉シテ創面ヲ覆ヒ其ノ上ニテ尖尾ヲ結合スルナリ(第十四圖乙)

九 肩創ニハ全巾及半巾各一枚ヲ用フ而シテ全巾ハ疊三角巾ト

第十圖



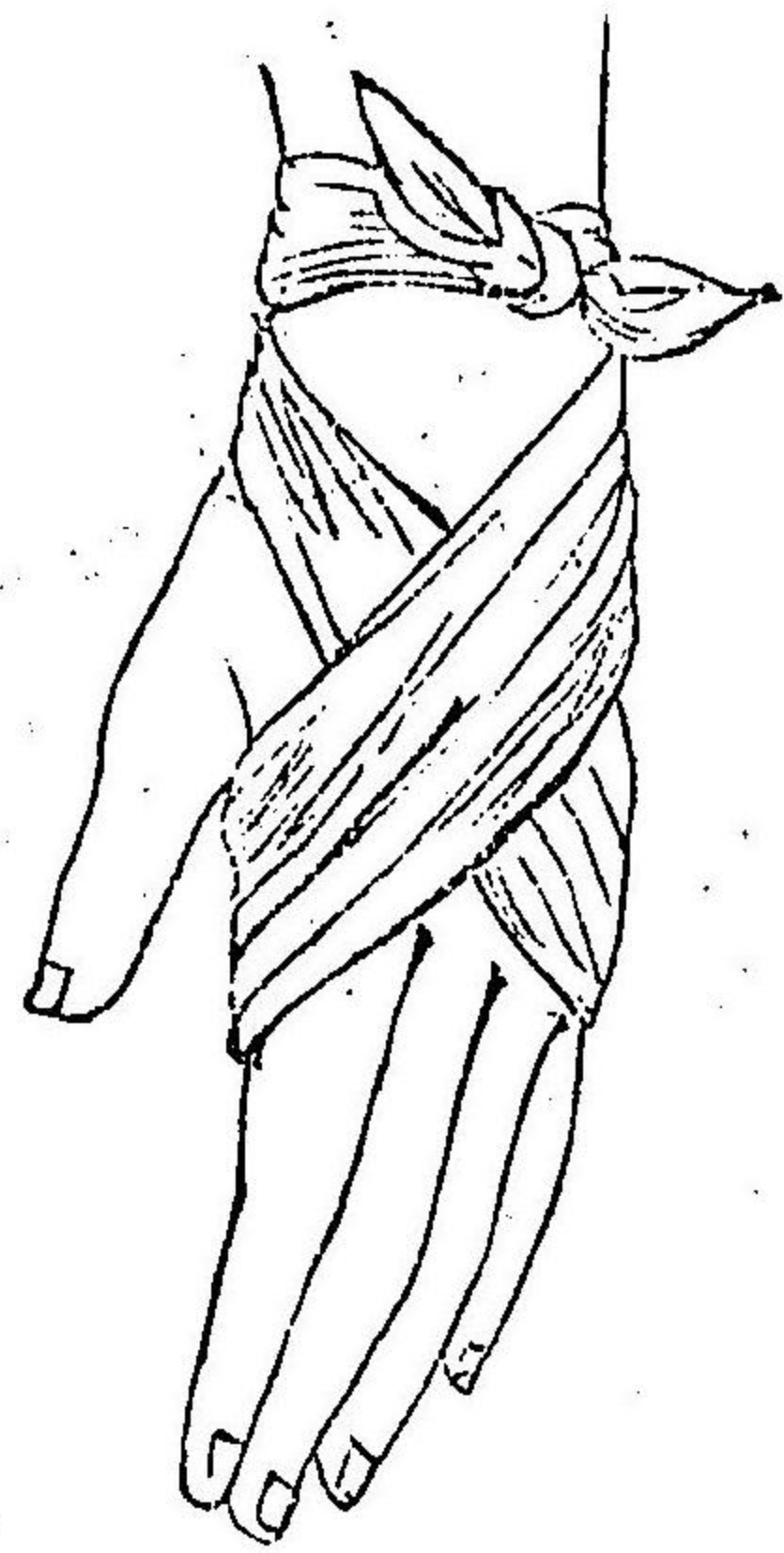
シ其ノ兩尖尾ヲ結ヒ環ト爲シ傷ツキタル方ノ前膊ヲ頸ニ吊リ(第十四圖丙)半巾ヲ創ヲ受ケタル肩ノ上ニ當テ尖頂ヲ頸ノ方ニ向ケ下縁ヲ上膊ノ中央ニ當テ兩尖尾ヲ其ノ前面ニ廻ラシテ交過シ再ヒ上膊ノ後面ニ至テ結ヒ尖頂ハ環ノ下ヲ通シテ上方ニ引き出シ再

十 手創ヲ卷クニ二法アリ

ヒ環上ニ折り反シテ安全針ニテ止ムヘシ(第十四圖丁)

(一) 半巾ノ中央ヲ手ノ下ニ敷キ尖頂ヲ指頭ノ方ニ向ケ更ニ之ヲ折リ反シテ手ヲ包ミ兩尖尾ヲ其ノ上ニ交過シ手背ニテ結フヘシ(第十四圖)

圖 五 十 第



(二) 疊三角巾ニテ卷クニハ第十五圖ノ如クスヘシ

十一 上肢ノ重創ニ在リテハ創所ノ處置ヲ終リタル後三角巾ヲ用ヒテ前膊ヲ適宜ノ位置ニ保タシメンコトヲ要ス其ノ法先ツ一方ノ尖尾ヲ取テ創ナキ方ノ肩ヲ越エテ背上ニ垂レ置キ一方ノ尖尾ハ胸前ニ垂レ創

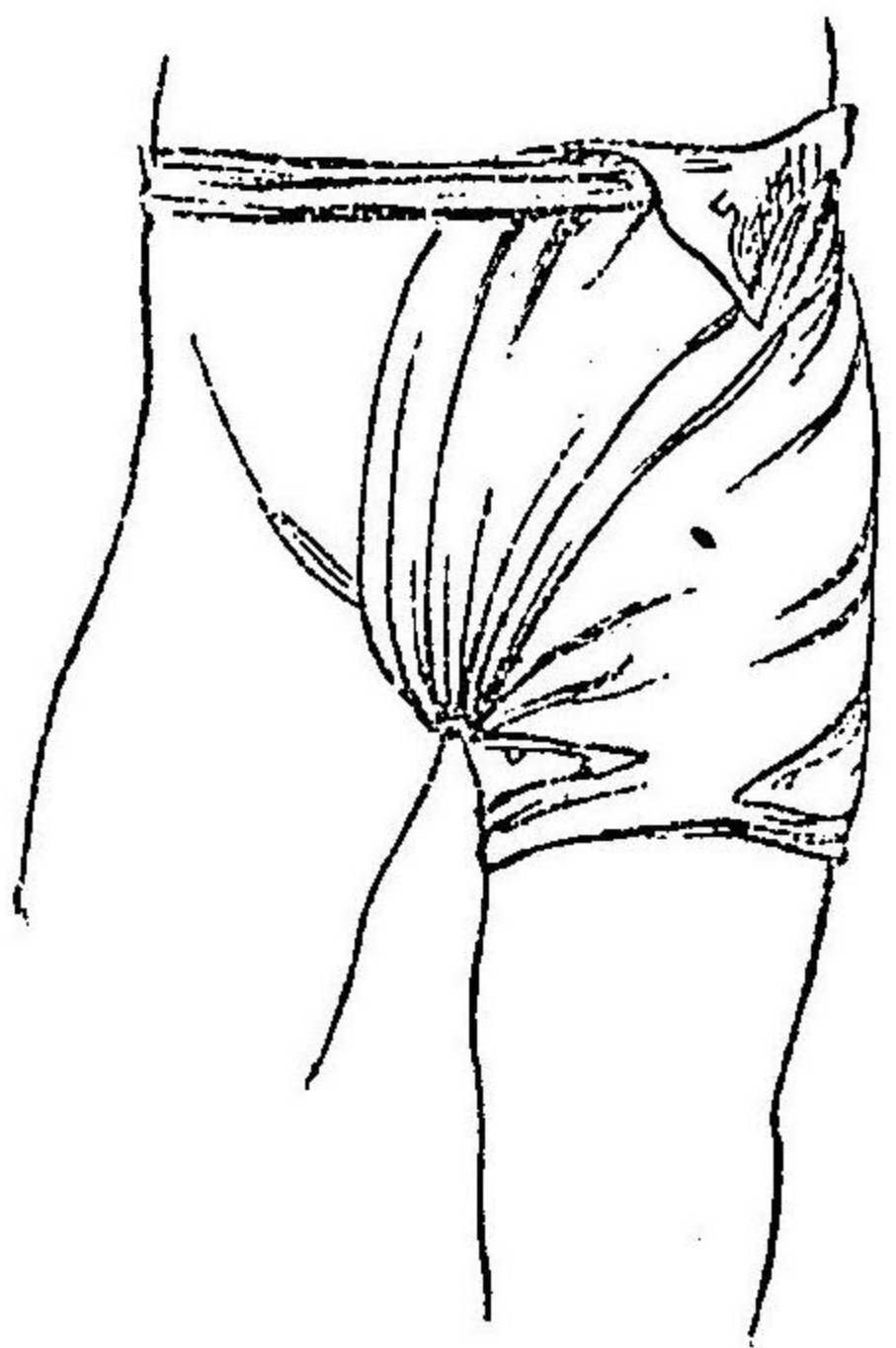
圖 六 十 第



ツヘシ(第十四圖丙)

アル上肢ノ前膊ヲ三角巾ノ中央ニ當テ尖頂ヲ肘後ニ餘シ置クコト三乃至六「センチメートル」ニシテ前ニ垂レタル尖尾ヲ前膊ノ前ヨリ上ニ向ヒテ引キ創アル方ノ肩上ニ送り頸ノ後ニテ先キニ垂レ置キタル尖尾ト結合シ次ニ肘後ニ餘シ置キタル尖頂ヲ前ニ折廻シ安全針ニテ止ムヘシ(第十六圖)又疊三角巾ヲ以テスルニハ其ノ兩端ヲ結合シテ環狀トナシ其ノ結頭ノ處ヲ頸ニ懸ケテ前膊ヲ吊リ保

十二 臀部ヲ卷ク法ハ略々肩創ニ同シ但シ股ハ上膊ヨリ太キカ故ニ全巾ヲ用ヒ其ノ下縁ヲ下ニシテ股ノ上部ヲ纏ヒ兩尖尾ニ



圖七十第

テ纏フコトニ回ニシテ結合スヘシ若傷者肥滿シテ尾端ヲ結ヒ難キトキハ安全針二個ニテ止ムヘシ又尖頂ハ肩創ニ於ケルカ如ク腹帶又ハ犢鼻褌ノ下

ヲ通シ更ニ下方ニ折リ反シ安全針ニテ止ム若腹帶犢鼻褌ナキトキハ疊三角巾ヲ用フヘシ(第十七圖)

十三 足ノ創ヲ卷クニハ全巾ノ尖頭ヲ趾頭ニ向ケテ足下ニ敷キ

足部ヲ其ノ中央ニ置キ尖頂ヲ折リ反シテ足背ニ送り左右ヨリ足ヲ纏ヒ足背ニ於テ交過シ足蹠若ハ足背ニテ尖尾ヲ結フヘシ

(第十八圖)

十四 副木ヲ固定スルニハ總テ疊

三角巾ヲ用フヘシ

第三章 卷軸帶ノ用法

卷軸帶トハ木綿、縮織布「ガーゼ」、

亞麻布等ヲ以テ製シタル幅狭キ卷

布ノ總稱ニシテ用ニ從テ大小長短アリ普通用ヒラルモノハ通

常ノ白木綿一反ヲ縱ニ五裂若ハ四裂ニシ各個ニ卷キタルモノナ

圖八十第



リ其ノ一端ヨリ卷テ他端ニ終リタルモノヲ偏頭軸ト云ヒ兩端ヨリ卷テ中央ニ至ルモノヲ兩頭軸ト云フ

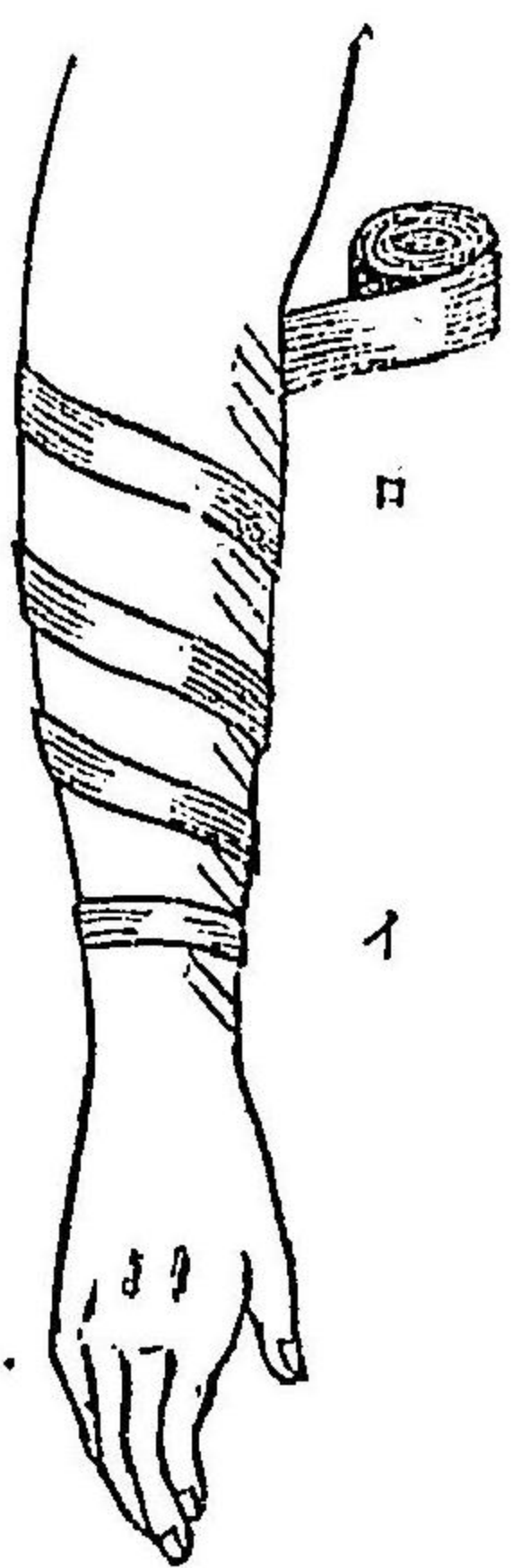
卷軸帶ヲ用フルノ目的種種アレトモ其ノ主トスル所ハ創面ニ於ケル壓定巾「ガーゼ」及副木ノ固定、局部ノ壓迫等ニアリ

卷軸帶ヲ使用スルニハ右手ニテ軸頭ヲ豎ニ拇指ト示指、中指トノ間ニ撮ミ其ノ始端ノ外面ヲ纏絡セントスル部ニ當テ左手ニテ之ヲ按シ先ツ一所ヲ回轉スルコト二三回ニシテ始端ヲ固定シ軸頭ヲ稍斜メニ上方ニ向ハシメ始終皮上ニ接シテ離ルルコトナク漸漸進行纏絡シテ諸部平等ノ壓迫ヲ得セシメ纏絡シ終レハ帶ノ末端ニ帽子針或ハ安全針ヲ横刺シ又ハ帶ノ末端ヲ裂キテ結締

ス

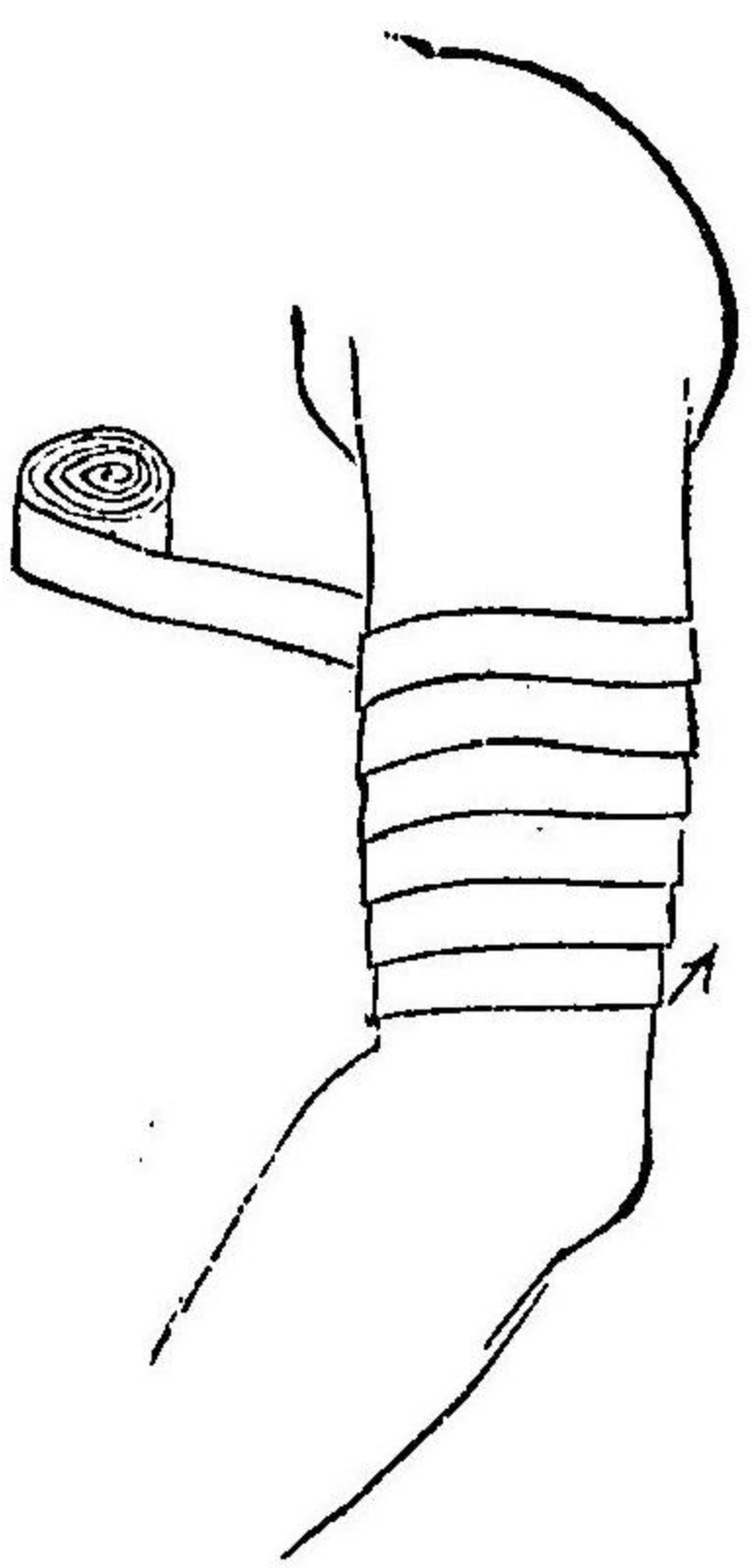
卷軸帶ノ纏絡方法數多アレトモ其ノ原則ハ環行帶、螺旋帶、折轉

圖九十第



帶、交叉帶、麥穗帶、扇狀帶、反覆帶等ノ數種ニ過キス

圖十二第



一 環行帶トハ一處ニ於テ數回纏絡シ毎回前片ヲ重襲スルモノヲ云フ各種繃帶ノ起

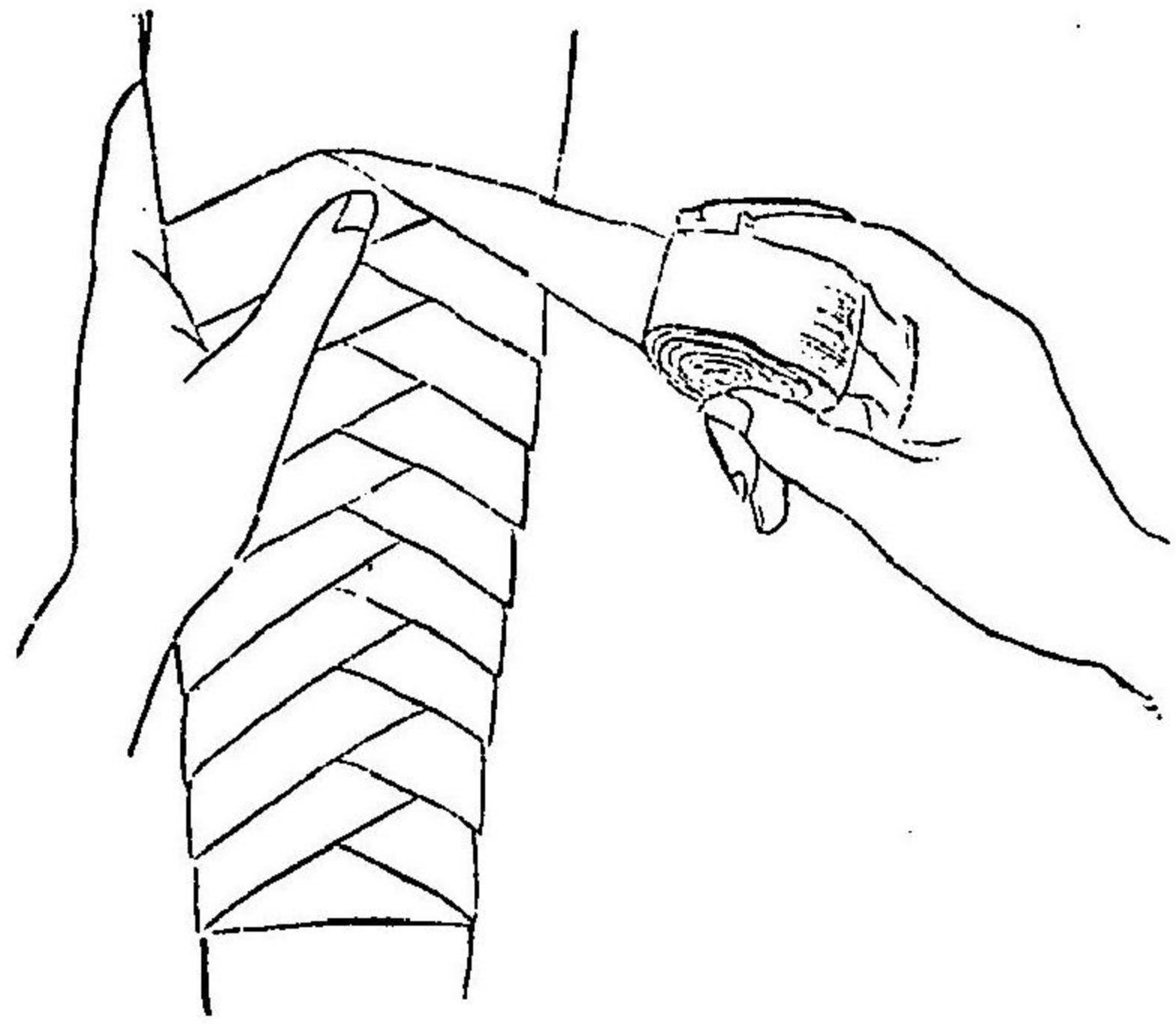
始ト終結トニ用フ(第十九圖イ)

二 螺旋帶トハ斜メニ上方若ハ下方ニ纏絡シテ其ノ回轉毎ニ稍重襲スルモノヲ云フ(第二十圖)又毎回轉間ニ肌ヲ露ハスモノ

ヲ走行帶ト云フ(第十九圖ロ)

三 折轉帶ハ四肢中大小不同ナル部ニ用フルモノニシテ回轉毎ニ反轉シテ帶ノ上縁ヲ下縁ト爲シ外面ヲ内面ト爲スナリ而シテ帶ヲ反轉スルニハ第二十一圖ノ如ク左

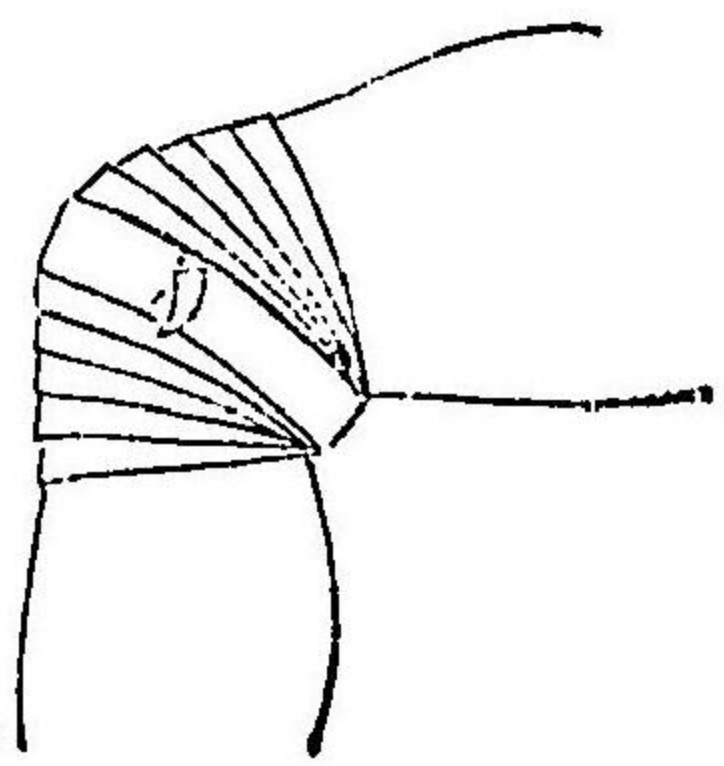
圖一十二第



ノ拇指ヲ以テ帶ノ一處ヲ押ヘ右手ヲ回轉スヘシ

四 交叉帶(龜甲帶)ハ肘、膝ノ如キ屈伸ヲ爲ス部ニ施スモノニシテ環行帶ヲ以テ始マリ斜メニ上リテ一回シ更ニ斜メニ下テ前

圖二十二第



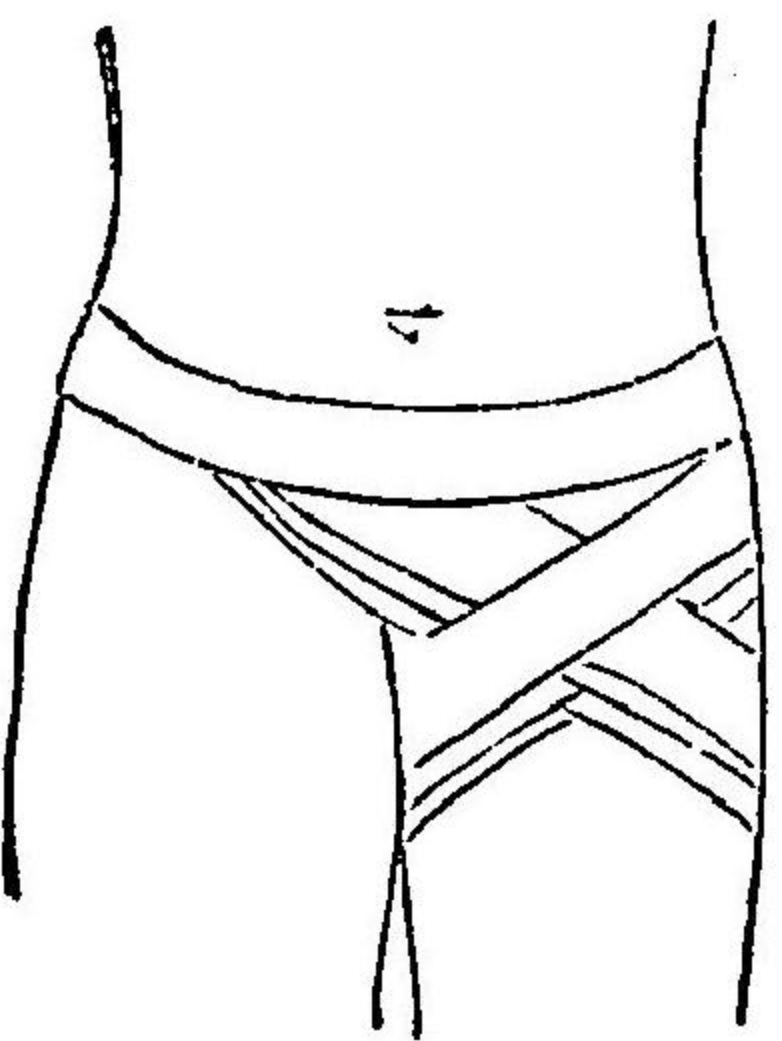
片ト交叉シ此ノ如ク上下スルコト數回ニシテ順次ニ上下相近接シ遂ニ中部ニ至リ

再ヒ環行帶ヲ以テ終ル其ノ全形數多ノ8

字ヲ重ヌルカ如シ故ニ8字帶トモ云フ(第二十二圖)

五 麥穗帶(人字帶)ハ多クハ肩頭鼠蹊等ニ用フルモノナリ今左鼠

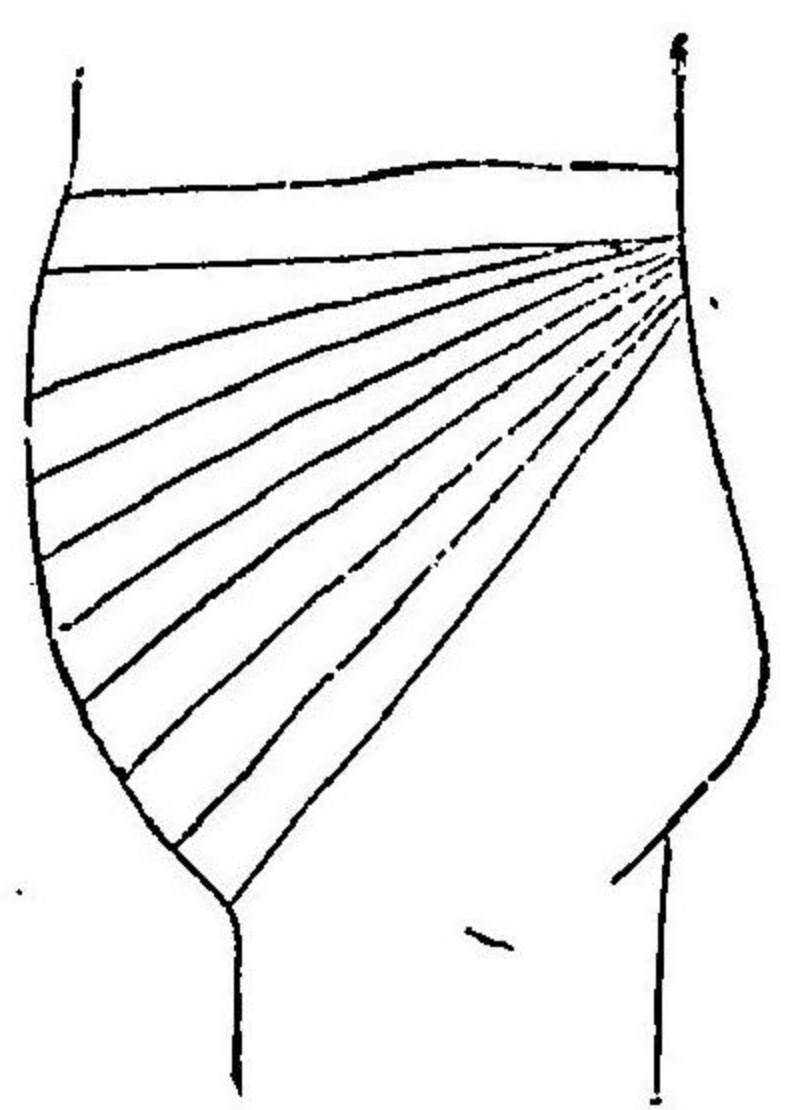
圖三十二第



蹊ヲ以テ之ヲ例スレハ先ツ一頭軸ノ始端ヲ右ノ腸骨前上棘ノ下ニ當テ腰圍ヲ環行スルコト二三回ニシテ斜メニ左ノ鼠蹊ヲ下リ股ノ外面ヨリ後面及内面ヲ經テ前面ヲ斜メニ上行シ鼠蹊ヲ經テ左ノ腸骨部ニ至リ環行帶ニ沿フテ右側ニ至ル此ノ如クスルコト數回ニシテ再ヒ環行帶ヲ以テ終ル(第二十二圖)

六 扇狀帶ハ畢竟環行帶ト螺旋狀帶トヲ合併シタルモノニシテ

圖四十二第

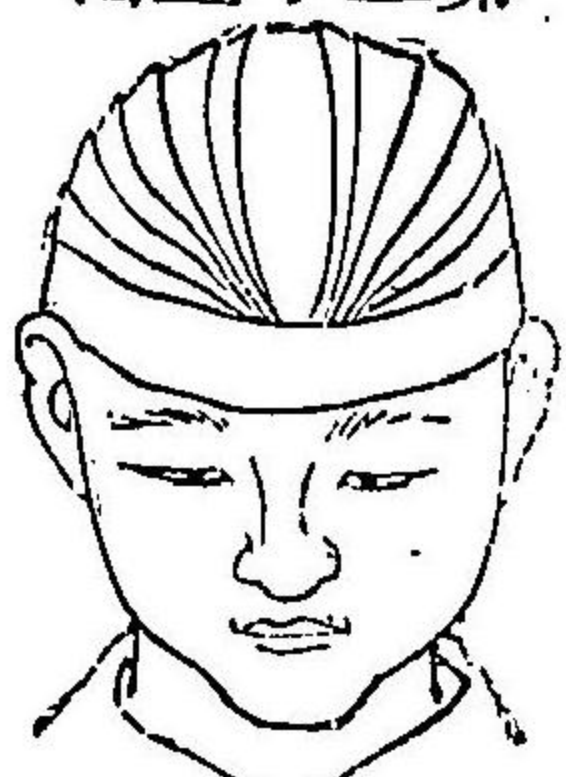


其ノ一方ハ每行一處ニ重襲シテ狭ク一方ハ每行僅カニ前行ノ一部ヲ被フニ過キサルカ故ニ自ラ廣ク横ヨリ之ヲ觀ルトキハ扇ヲ開クカ如キヲ以テ

扇狀帶ト名ツク(第二十四圖)

七 反覆帶ハ頭部或ハ四肢ノ截斷根ニ施スモノニシテ其ノ法頭部ニ於テハ先ツ額ト後頭トヲ繞リテ環行帶ヲ施スコト法ノ如クシ前額ノ部ニ於テ方向ヲ轉シテ頭上ノ中央ヲ過キ後頭ニ至リ反轉シテ前行ノ一側ニ沿フテ前額ニ環リ更ニ他側ヲ經テ後頭ニ達ス此ノ如ク左右交番ニ往來反覆シテ全ク頭部ヲ被覆ス是ヲ以テ反覆帶ト名ツクルナリ而シテ反覆スル毎ニ前行ノ三分一乃至半分ヲ重襲ス又帶ヲ反轉スルノ法ハ術者自ラ左指ヲ以テ前額ノ反轉部ヲ按シ後頭ノ同部ハ介者ヲシテ壓定セシメ最後ニ

圖五十二第



至テ其ノ上ニ環行帶ヲ施シ安全針ニテ縫止ムルカ或ハ布ノ末
端ヲ裂キテ結締スルナリ(第二十五圖)

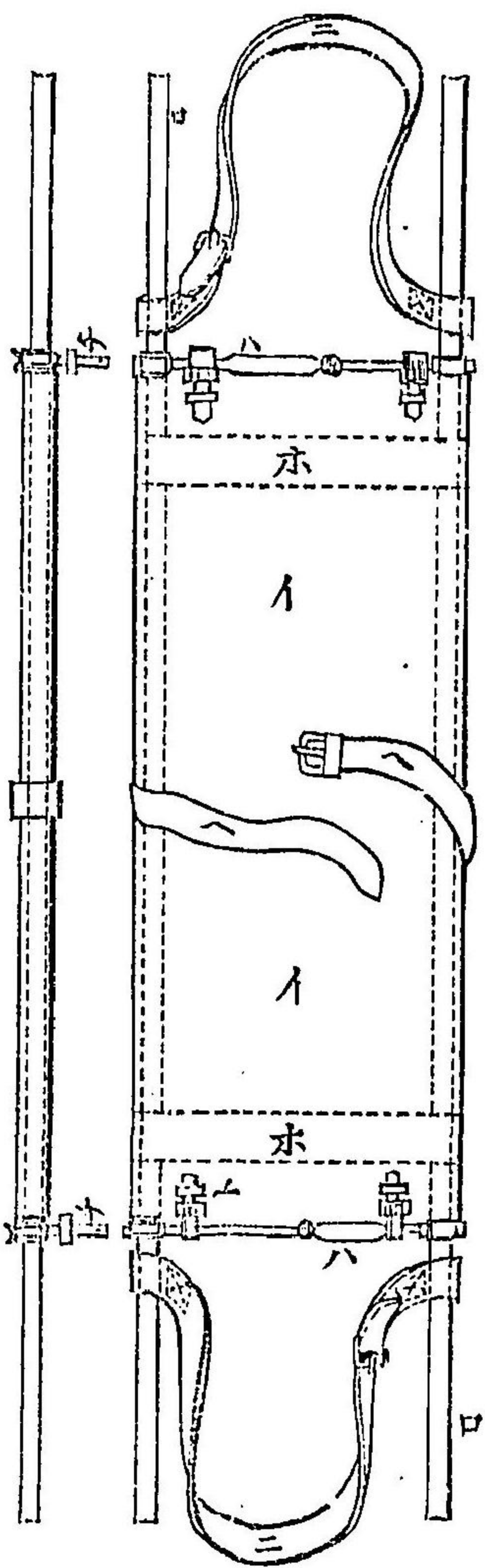
八 總テ繃帶ヲ解除スルニハ頗ル小心注意スルヲ要ス若粗暴ナ
ル處置ヲ爲ストキハ再ヒ出血ヲ誘起シ又骨傷ニ在リテハ骨端
ヲシテ再ヒ蹉跌セシムル等ノ恐アリ而シテ膿汁或ハ血液ノ爲
ニ繃帶品互ニ若ハ患部ニ粘著シテ離レ難キトキハ強テ剝離ス
可ラス又繃帶ハ解除スルニ隨テ之ヲ一手ニ集メテ握リ左右交
代シテ之ヲ保持シ兩手共ニ可及的患部ニ近接スルヲ良トス

第六編 携行衛生材料

第一章 擔架

擔架(第二十六圖)ハ患者ヲ運フ具ニシテ架床一箇、轆、横鐵、負

圖六十二第



紐各二條及帶紐一條ヨリ成ル架床ハ長方形ノ「ツツク」ニテ造リ

擔架

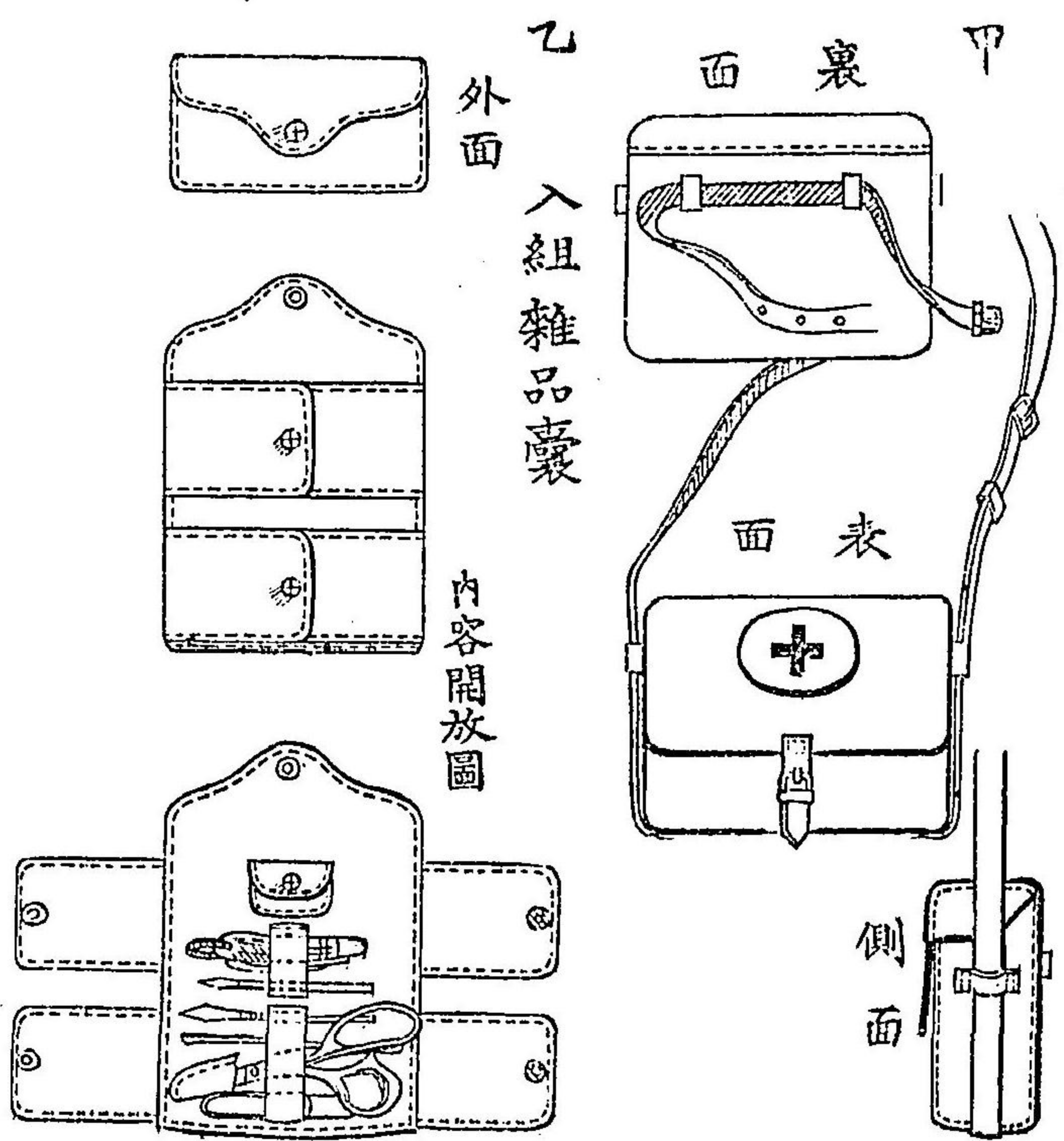
其ノ兩縁ヲ折り返シテ長キ管狀ト爲シテ轆ヲ通ス轆ノ架床前後ニ出ル部ヲ前後ノ柄ト云フ横鐵ハ架床ノ前後ニ於テ轆ヲ排キ支ヘテ架床ヲ張り且足アリテ床ノ土ニ著クコトヲ防ク負紐ハ兩端ノ環ヲ柄ニ貫キ肩ニ掛ケ擔フニ用ヒ帶紐ハ擔架ノ中央ニ在リテ患者ノ轉落ヲ防ク

安南擔架ハ架床ノ周圍ニ起レル縁アルモノニシテ後方ニ於ケル或場合又ハ舩用ニ供セラル

第一章 繃帶囊

繃帶囊(第二十七圖甲乙)ハ革製ノモノニシテ囊體、囊蓋、吊革及帶革ヨリ成ル囊蓋ハ上部ヲ蔽ヒテ前ニ垂ル其ノ前面ニ橢圓形ノ

第二十七圖



白地ニ赤十字ヲ附ス縋帶囊ノ内容品及其ノ用法ハ左ノ如シ

縋帶囊内容品表

品目	數稱	員數	摘要
メントール酒	瓦	一〇〇	木製筒入藥杯附
昇汞ガーゼ	包	一〇	一包ハ一尺四方ノモノニ枚
螺旋止血帶	筒	一	紅金巾長五尺、幅二寸五分ノ赤符附
卷軸帶 <small>四裂裂</small>	卷	一	木綿縮織
ゴム絆創膏 <small>二號號</small>	筒	各一	絲卷式罐入
報告用紙 <small>封筒</small>	枚	一〇	
體溫計	筒	一	
安全針	筒	一〇	

雜用品	數稱	員數	雜品囊ニ入
ジャックナイフ	筒	一	
紫色鞆附鉛筆	本	一	

- 一 「メントール」酒ハ褐色透明ノ液ニシテ卒倒シタルモノニ約二十滴乃至五十滴ヲ少シノ冷水ニ加ヘテ飲マシム此ノ藥ハ常ニ瓶ノ栓ヲ密ニシ置クヲ要ス
- 二 昇汞「ガーゼ」ハ消毒藥ヲ浸シ薄赤グ染メタルモノニシテ創面ヲ被フニ用フ之ヲ用フルニハ最モ注意シ指若ハ他物ニ觸レサル部ヲ創面ニ當ツルヲ要ス
- 三 螺旋止血帶ハ四肢ノ出血ヲ止メントスルニ際シ創所ノ上部

即チ心臟ヲ緊縛スルノ用ニ供ス
ニ近キ方

四 卷軸帶ハ繃帶ノ部ニ詳ナリ

五 「ゴム」絆創膏ハ布ニ藥ヲ布キタルモノニシテ小キ創ヲ被ヒ
又ハ下ニアル繃帶ヲ固定スル等ニ用フルモノナリ常ニ罐中ニ
貯ヘ粘著ノ性ヲ保タシムルヲ要ス

六 體溫計ハ熱ヲ計ル器ニシテ患者ノ腋窩ニ挿入シ十分時乃至
十五分時ヲ經テ其ノ度ヲ檢スヘシ但シ之ヲ使用スル前ニハ必
ス振リテ水銀ヲ下降セシムルヲ要ス

七 安全針ハ繃帶ノ末端ヲ止ムルニ用フ

八 鋏ハ繃帶及患者ノ被服等ヲ剪リ解クニ用フ

九 「ジャックナイフ」ハ急造擔架ヲ造ルニ用ヒ又患者ノ被服、
繃帶等ヲ剪リ解クニ用フ

右ノ外必要ニ應シ若干ノ藥劑ヲ加フルコトアリ
繃帶囊中ノ物品ハ何レモ必要缺ク可ラサルモノナルカ故ニ之ヲ
消費シタルトキハ一一補充セサル可ラス且昇汞「ガーゼ」ノ如キ
ハ如何ナル場合ニ於テモ決シテ粗略ニス可ラス若之ヲ粗略ニス
ルトキハ忽チ不潔ト爲リテ消毒ノ効ヲ失フノミナラス創傷ニ大
害ヲ致スコトアリ

第七編 救急

第一章 一般ノ注意

輸送班員ノ主務ハ速ニ患者ヲ指定ノ地ニ運搬スルニ在リ然レトモ患者途上ニ於テ若出血其ノ他偶發症アルニ際シ附近ニ衛生部員在ラサルトキハ一時救急法ヲ施ササル可ラス

救急法ヲ施スニ際シ患者ノ患部ヲ露ハサンカ爲ニ衣服ヲ脱セシムルトキハ健側ヲ先ニシテ患側ヲ後ニスヘシ又之ニ衣服ヲ著セシムルトキハ患側ヲ先ニスルヲ法トス

襦袢ハ翻轉スヘク袴、袴下ハ左右同時ニ徐ニ引テ脱カシムヘシ靴ヲ脱カシムルトキハ一手ヲ靴ノ踵ニ掛クヘシ

袖、袴、襦袢、袴下、靴ハ要スルトキハ截リ開キ又ハ縫目ニ沿フテ解クヘシ

被服血液ニ塗レ若ハ汚レテ創面ニ附著セルトキハ其ノ部ハ其ノ儘存シ置キ其ノ周圍ヨリ截リ除クヘシ

創ノ癒合ヲ妨クルハ病原菌ノ創口ヨリ入ルニ因ルモノナレハ苟モ創ヲ開放シ空氣ニ雜レル病原菌ヲシテ侵入セシム可ラス手指モ消毒ヲ經ルニアラサレハ病原菌ノ附著シ居ルヲ免レサルカ故ニ手指ノ創ニ觸ルルヲ警ム紙、手巾其ノ他布片モ亦然リ創ヲ拭ヒ又ハ洗ヒ淨メントシテ却テ病原菌ヲ創口ニ入ラシムルノ虞アルカ故ニ輸送班員ニ在リテハ創ヲ拭ヒ洗フコトヲ禁ス

彈丸衣片ノ如キ異物創口ニ露ハルルコトアルモ拔キ取ル可ラス
又血液凝リ著キタルトキハ之ヲ剝キ取ルコトヲ禁ス
假死ハ脈搏呼吸及知覺運動ノ兩機共ニ廢絶スルモノナリ輸送班
員タルモノ此等ノ者ニ遭ハハ直ニ醫員ニ報スヘク早計ニ死者ト
看做ス可ラス

第一章 創傷

創ニハ切創、刺創、挫創、裂創、咬創、彈創アリ 彈創ニ銃創ト砲創
トアリ
創ニ輕症ト重症トアリ
一 輕症トハ皮膚若ハ少シノ筋肉傷キタルモノヲ云フ

二 重症トハ左ノ如キモノヲ云フ

- (一) 筋肉大ニ傷キタルモノ
- (二) 出血多ク骨折又ハ卒倒ヲ伴フモノ
- (三) 大ナル關節傷キタルモノ
- (四) 頭蓋腔、胸腔、腹腔若ハ骨盤腔ニ創ノ通リタルモノ
- (五) 上肢若ハ下肢ノ碎ケ又ハ斷タレタルモノ

切創ハ銳キ物(小刀、劍、硝子片等)ニ因テ生シタルモノニシテ創口長
ク多少哆開シ創緣銳ク平滑ニシテ出血著シ切創ノ輕キモノハ創口
ニ「ガーゼ」ヲ貼シ其ノ上ヲ卷軸帶或ハ三角巾ニテ卷クヘシ但シ出血
甚シキモノニ在リテハ先ツ止血法ヲ行フヘシ
刺創ハ尖リタル物(針、錐、竹木ノ銳端、鎗、銃劍等)ニ因テ生シタルモノ

ニシテ傷器ノ形ニ從ヒ創口モ亦圓形、稜角形等ヲ爲シ創口哆開スルコト少ク出血モ大血管ヲ損傷セサル限リハ切創ノ如ク甚シカラス然レトモ創ノ底ハ常ニ深クシテ管狀ヲ爲シ内部ノ損傷ノ輕重ヲ外ヨリ容易ニ判定シ難ク外形ニ比シテ危險ナルヲ常トス頭部及胸腹部ニ在リテハ殊ニ然リトス創口ノ處置ハ切創ニ同シ

挫創ハ鈍キ物(銃尾、棍棒)ノ衝突、重物ノ落下、土石ノ崩潰等ニ因テ皮膚筋肉等ノ摧挫セルモノナリ創縁多クハ不正犬牙狀ヲ爲シ汚レタル暗青色ヲ帶フ又時トシテハ皮膚ノ一片脫失シ軟部ノ損傷甚シク加之脱臼、骨折、腦脊髓震盪ヲ兼スルコトアリ當初多クハ出血大ナラサレトモ注意足ラサル輸送ニ因リ或ハ組織ノ續發的變化ニ因テ出血(後出血)ヲ見ルコトアリ創面ノ處置ハ切創ニ同シ

裂創ハ組織ノ一部劇シク引カレテ損傷スルモノナリ尖リタル物若

ハ稍銳キ物ノ撞突ニテ皮膚及皮下組織ノ裂ケタルヲ最多シトス裂創ハ痛ミ劇シキコトアレトモ出血甚シカラス創面ノ處置ハ切創ニ同シ

咬創ハ挫創ノ一種ナリ此ノ創ハ唾液ニ汚サル、カ故ニ危險ナリ狂獸及毒蛇ニ因ルモノ殊ニ然リ狂獸及毒蛇咬創ニハ速ニ布片、紐帶等ヲ以テ傷肢ヲ傷ノ上部ニ於テ縛リ棒ヲ其ノ間ニ挿ミテ回轉シ強ク之ヲ緊約シ置キ衛生部員ニ急報スヘシ

銃創ハ小銃丸ノ創ニシテ銃ノ種類、射距離及射撃ヲ受ル部位ニ從テ異ナリ銃創ヲ貫通銃創、盲管銃創及擦過銃創ニ分ツ

一 貫通銃創ハ射入口ト射出口ト有スルモノニシテ單ニ軟部ノミヲ貫クコトアリ骨ヲモ同時ニ貫クコトアリ甲ハ射入口概ネ圓ク創縁稍挫滅セラレ大サ銃丸ノ直徑ヨリモ小ナルヲ常トシ射出

口ハ圓ク若ハ楕圓ニシテ射入口ヨリモ微シク大ナリ乙ハ骨折ヲ兼ヌルヲ以テ射出口著シク大ニシテ不正裂創狀ヲ爲シ且時トシテハ甚シク挫滅セラレ骨片若ハ筋腱ノ一部創外ニ出ツルコトアリ其ノ他破碎骨片若ハ銃丸ノ破片ニテ射出口ニ數箇ノ不正ナル創ヲ見ルコトアリ

二 盲管銃創ハ勢ヒ弱キ銃丸ニ中リタルモノニシテ射入口ノミヲ有シ體ノ或部ニ銃丸篋マリ居ルモノヲ云フ(留彈)

三 擦過銃創ハ銃丸唯體ノ一部ヲ擦過シテ半管狀ノ創ヲ爲スモノヲ云フ

四 鉛彈ニ由ル銃創ハ新式小銃彈(奎皮彈)ノモノニ比シテ不良ナリ鉛彈ハ硬キ物ニ觸レテ變形シ甚シキ損傷ヲ爲セハナリ

五 銃創ハ大血管ヲ損傷セサル限リハ當初出血大ナラス且痛マサ

ルヲ常トス

砲創ハ榴彈、榴霰彈等ニ中リタルモノニシテ霰彈ヲ除ク外銃創ニ比スレハ慘酷ニシテ其ノ經過モ創口大ナルタメ不良ナリ但シ霰彈ノ砲創ハ鉛彈ノ銃創ニ似タリ又榴彈ノ碎片ニ因テ一肢全ク射斷セラレ、コトアリ此ノ時ハ大ナル動脈ヲ損傷スルハ勿論ナレトモ却テ著大ノ出血ナキコトアリ但シ其ノ出血ナキハ一時ニシテ輕微ノ動搖ヲ爲スモ乍チ後出血ヲ發スルモノナレハ豫メ止血管ヲ緩ク其ノ上部ニ纏ヒ置キ出血起ルトキハ直ニ緊約シ得ルノ用意ヲ爲スハ極メテ緊要ナリ

銃砲創ノ處置ハ(一)皮肉ノミ損傷シタルモノハ創處ニ「ガーゼ」ヲ當テ綑帶スヘク(二)四肢ノ銃砲創ニ於テ現ニ骨折ヲ兼ヌルモノ或ハ骨折ヲ兼ヌルノ疑アルモノハ副木ヲ當ツヘシ(三)留彈ハ除カストモ妨ナ

キカ故ニ指若ハ消息子ニテ創管ヲ探ル可ラス

第三章 出血及止血法

出血ノ處置ハ衛生部員ノ任ナレトモ輸送途中衛生部員在ラサル場合ニ於テ患者後出血ヲ發スルカ又ハ不慮ノ出血者ナキヲ保セサレハ輸送班員ハ止血法ノ大略ヲ知ラサル可ラス

出血ヲ別チテ動脈出血、靜脈出血、毛細管出血(實質出血)ノ三種トス

一 動脈出血ハ線狀ヲ爲シテ噴出シ動悸ニ應シ脈ヲ搏ツカ如キ弛張アリテ其ノ色鮮紅ナリ

傷ケル動脈深キ處ニ在ルトキハ鮮紅ナル血液勢ヒ強ク逆出

スレトモ噴出スルコトナシ然レトモ靜脈出血ニ反シ傷部ヲ高ク擧ケ壓迫繃帶ヲ施スモ止マサルコトアリ

二 靜脈出血ハ絶エス同等ノ勢ヲ以テ徐ニ流出シ其ノ色暗赤ナリ

三 毛細管出血ハ赤キ液ヲ吸ハシタル海綿ヲ捲ルカ如ク平等ニ滲ミ出ルモノナリ

出血ノ處置ハ傷キタル血管ノ種類及其ノ大サニ從テ異ナリ

一 毛細管出血及小靜脈ノ出血ハ創部ヲ高ク擧ケ(四肢ナラハ之ヲ豎テ)昇汞「ガーゼ」ヲ創ニ當テ壓迫繃帶ヲ施スヘシ但シ稍々大ナル靜脈ノ出血ナルトキハ其ノ壓迫ノ度ヲ稍々強クスヘシ

二 小ナル動脈出血モ亦多クハ(一)前法ニテ止マルモノトス又四肢ノ稍々大ナル動脈出血ニ在リテハ創ヨリ心臟ニ近キ關節(肘膝等)ノ屈側ニ丸メタル布片ノ類ヲ狭ミ關節ヲ強ク曲ケテ固定スルモ可ナリ(第二十八圖)

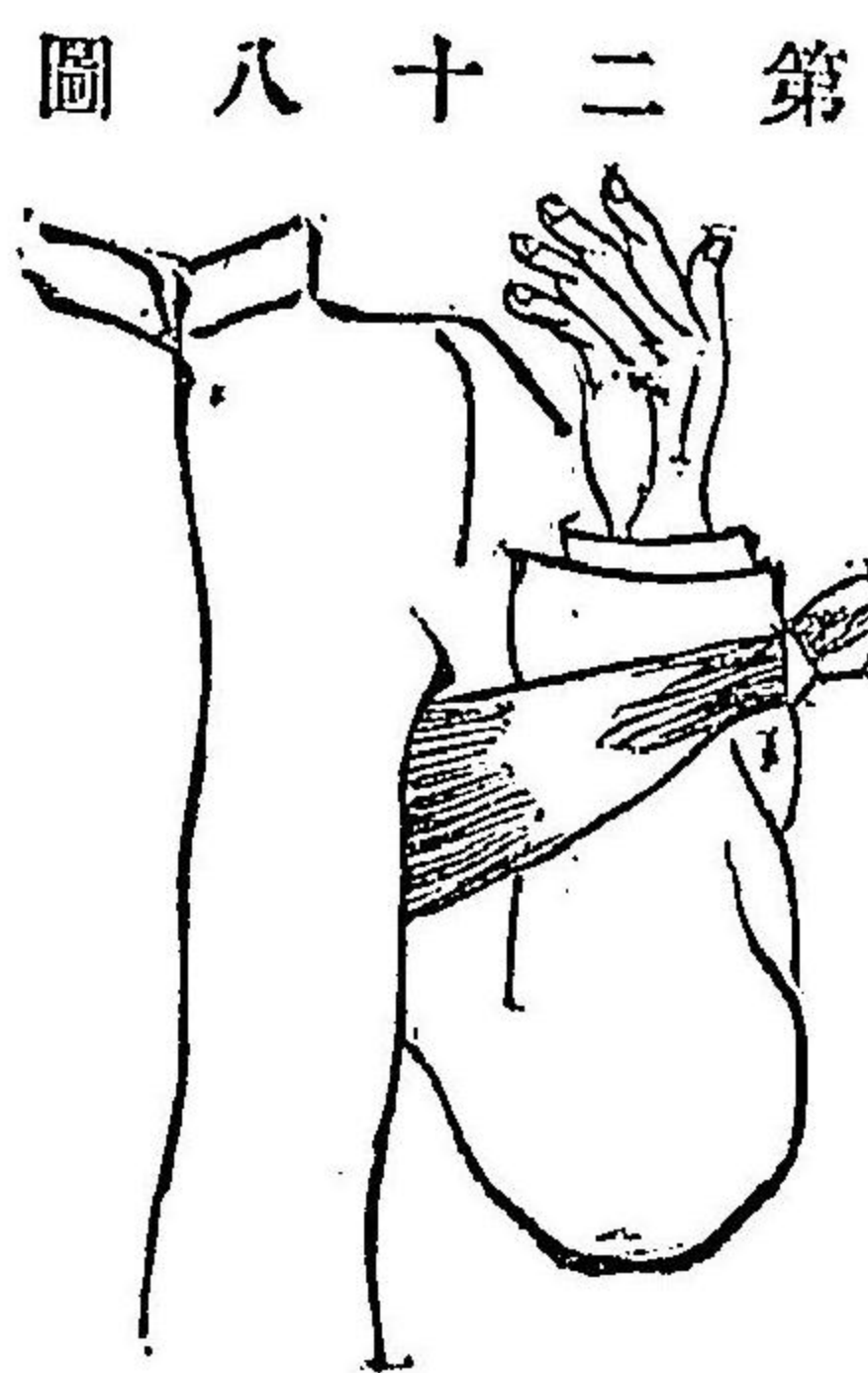


圖 八 十 二 第

三 大ナル動脈ノ出血ハ速ニ衛生部員ニ報シテ處置ヲ請フヘシ然レトモ衛生部員ノ來ルマテ放置スルトキハ患者忽チニ死スヘキヲ以テ一時ノ止血ヲ行ハサル可ラス即チ指壓法、止血帶等ニテ此ノ目的ヲ達スルコトヲ得ヘシ

四 大出血ノ患者虚脱若ハ昏睡ニ陥ルトキハ頭ヲ低ク下肢ヲ高クシテ臥サシメ血液ヲ腦及心臟ニ送ルコトヲ圖ルヘシ指壓法ハ傷ケル動脈ノ幹ヲ創ト心臟トノ間ニ於テ一指若ハ數指ヲ以テ壓スル法ナリ之ヲ壓スルニハ血液ノ創ヨリ逆リ出サルニ至ルヲ度トス

圖 九 十 二 第



總テ指壓法ヲ施スニハ出血ノ部位ニ隨テ一定ノ部位ヲ撰ハサル可ラス即チ左ノ如シ

一 頭若ハ頸ノ上部ノ出血ニハ頭ヲ創アル側ニ傾ケ喉頭ノ右若ハ左ノ頸動脈ヲ

頸椎ニ向テ壓スヘシ(第二十九圖)



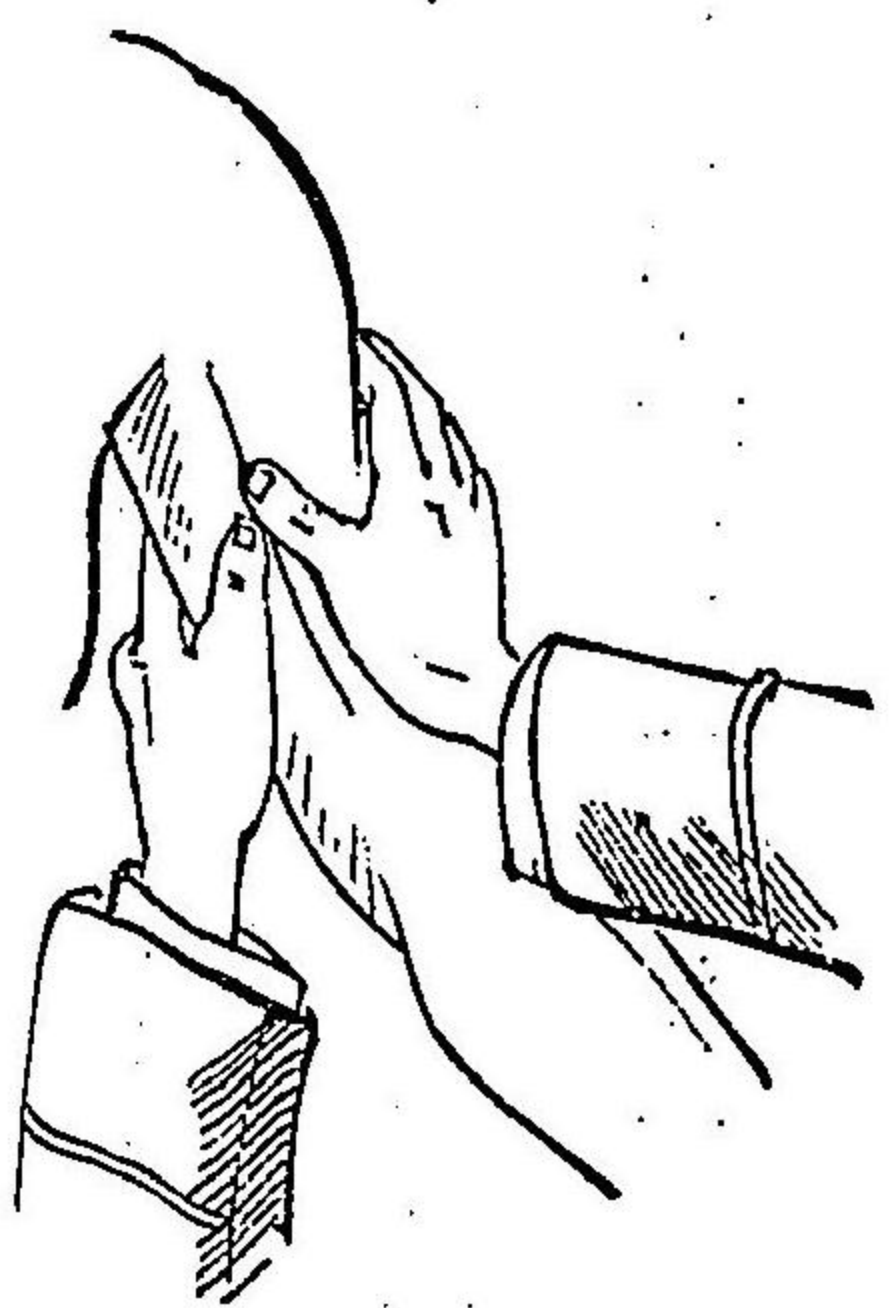
二 面部殊ニ口圍ノ出血ニハ下顎骨ノ角(第三十圖イ)稍、前方ヲ骨ニ向テ壓スヘシ

三 腋窩又ハ上膊最上部ノ出血ニハ頸ト胸トノ間ニアル鎖骨上窩ニ於テ深

ク内下方第一肋骨ニ向テ第三十圖ノ如ク拇指頭ヲ以テ強壓スヘシ

四 上膊又ハ前膊、手等ノ出血ニハ第三十一圖ニ示ス如ク上膊ノ内面(所謂力瘤ノ内側)淺キ溝ヲ爲ス處ニ兩手ノ拇指ヲ當テ

圖一十三第



他ノ指ヲ後ニ廻シ拇指ニテ強壓スヘシ又傷者自ラ之ヲ行フニハ拇指ノ尖ヲ上ニ記シタル溝ニ當テ掌ヲ前ニ廻シテ握リ拇指尖ニテ壓スヘシ(第三十二圖)

五 指ノ出血

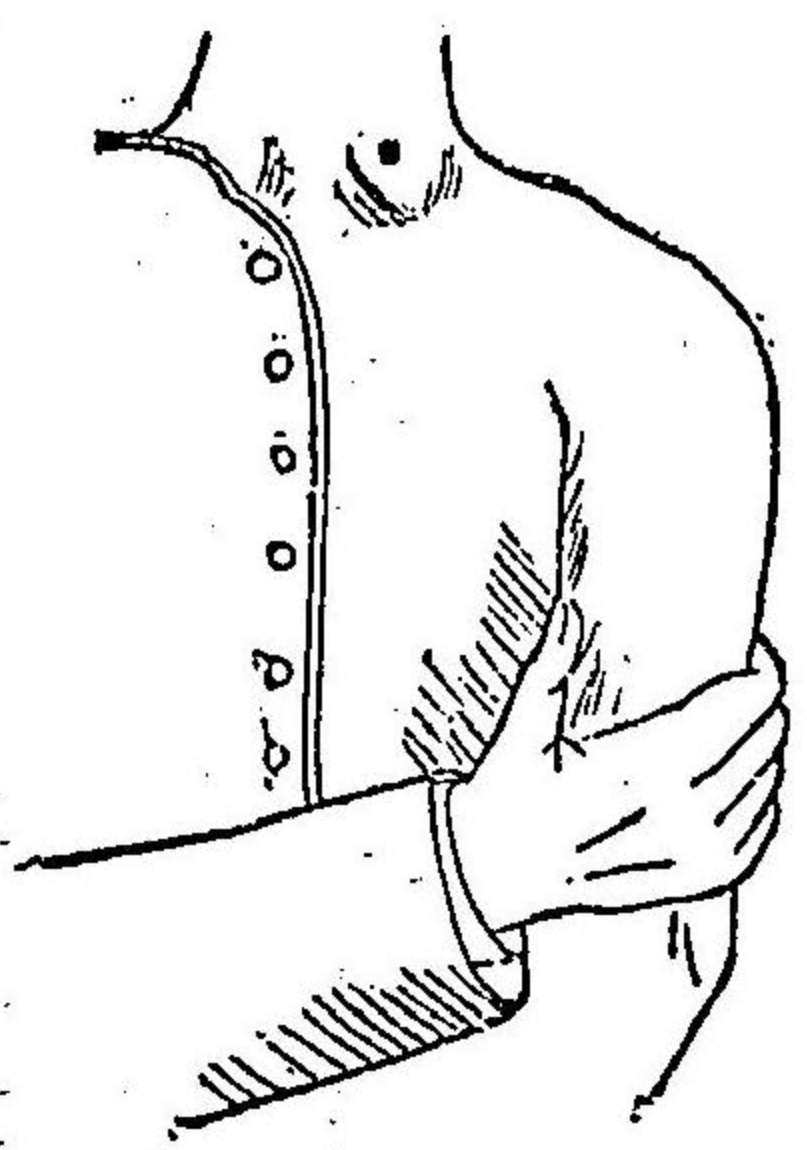
ニハ其ノ指

根ノ兩側ニ

拇指ト示指

トヲ當テ強

圖二十三第



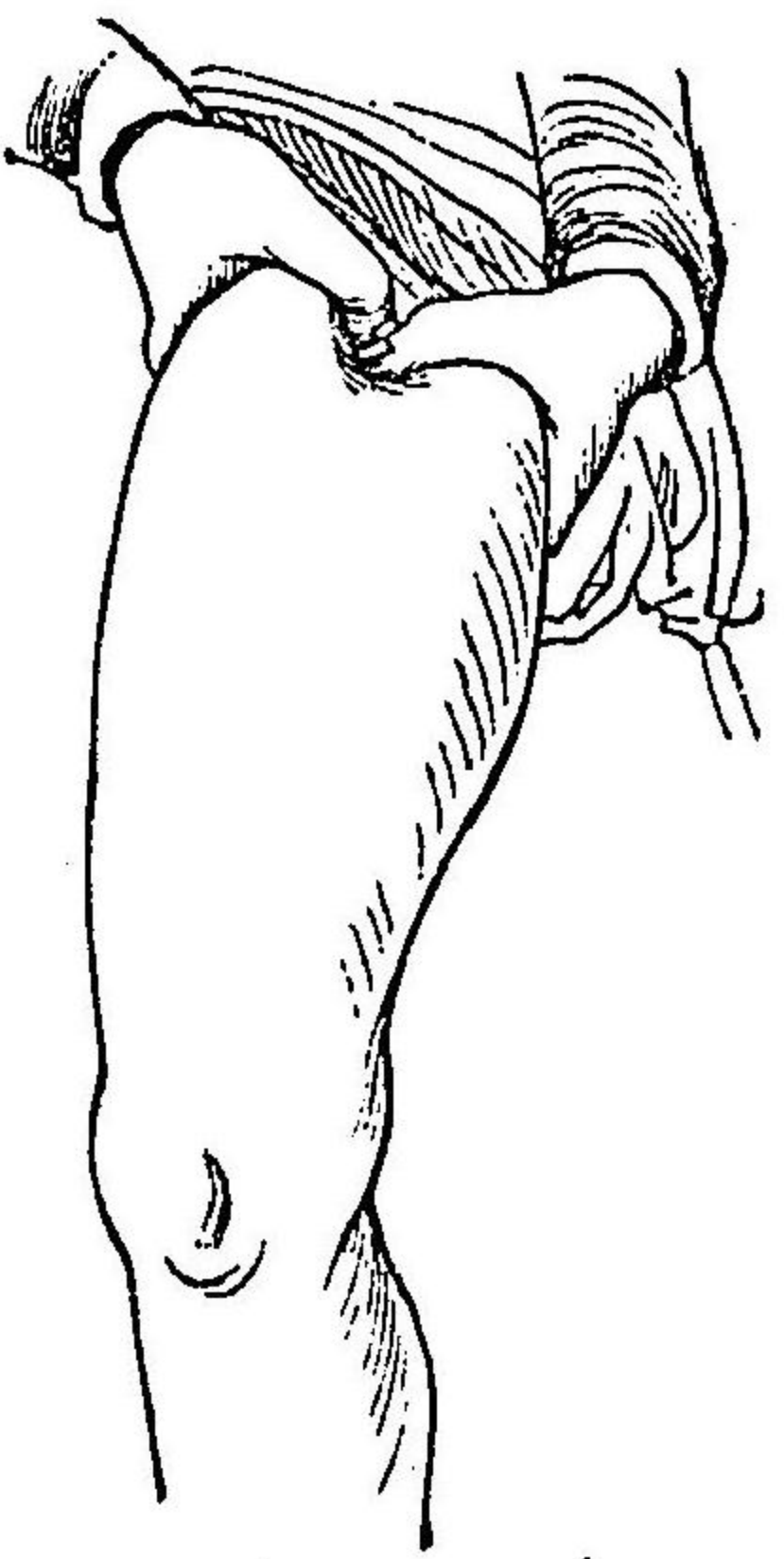
圖三十三第



出血及止血法

ク撮ムヘシ(第三十三圖)

六 下肢ノ出血ニハ第三十四圖ノ如ク鼠蹊ノ中央ノ下部ニ兩拇指ヲ當テ骨ニ向テ強壓スヘシ

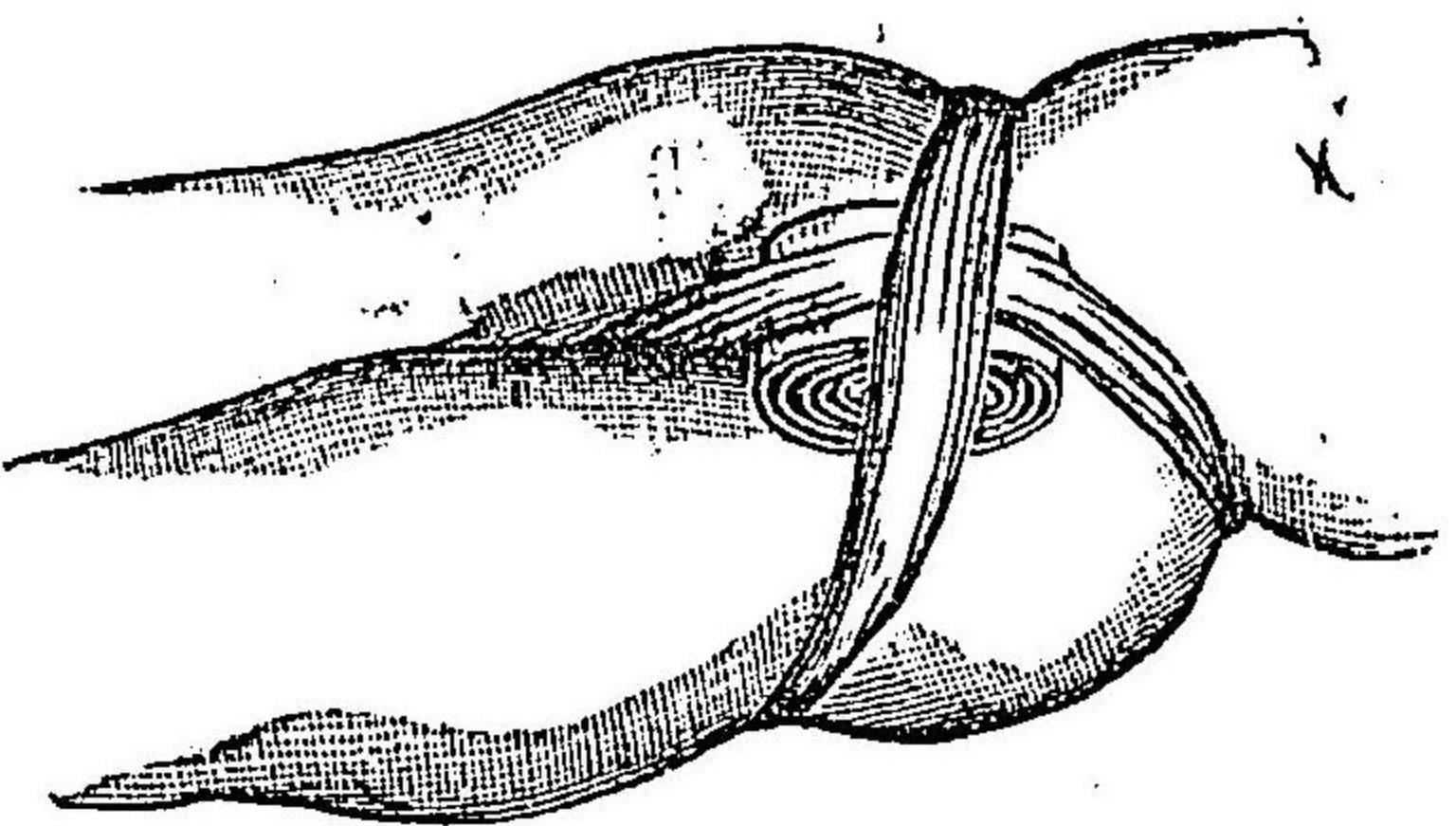


指壓法ハ手ノ疲ルルタメ永ク續クルコトヲ得ス故ニ衛生部員ヲ待ツコト久シキトキ又ハ患者ヲ他ニ

運搬セサルヲ得サルトキハ四肢ノ出血ニアリテハ止血帶ヲ施スヘシ若止血帶ナキトキハ卷軸帶、三角巾、手巾、弾力性袴吊、卷脚

圖四十三第

圖五十三第



絆等ヲ以テ代用スルモ可ナリ其ノ用法ハ布片ヲ疊ミ之ヲ動脈上ニ當テ其ノ上ヲ卷軸帶其ノ他ノモノニテ緊縛スヘシ(第三十五圖)

止血帶ヲ裝ヒタル患者ニ蓋護繃帶ヲ施ストキハ其ノ繃帶ニテ止血帶ノ隠レヌヤウ注意スヘシ

止血帶ヲ裝ヒタル患者ノ體ニハ其ノ見易キ處ニ赤符ヲ纏ヒ置キ急ニ醫治ヲ受ケシムルヲ要ス若醫治ヲ受ルマテニ殆ト二時間

ヲ費シ緊縛ノ下部感覺ヲ失ヒ冷エ且紫色ヲ帶フルトキハ壞疽ニ
 陷ルノ徵ナレハ一時之ヲ指壓法ニ換ヘ止血帶ヲ緩メ暫クアリテ
 再ヒ緊縛スヘシ但シ斯ル場合ニ在リテハ輸送班員ハ自己此ノ術
 ヲ施サンヨリハ百方衛生部員ヲ搜索シ寸時モ速ニ醫治ヲ受ケシ
 ムルコトヲ圖ルヘシ
 大ナル動脈或ハ靜脈ノ出血ニシテ止血帶ニテ縛リ若ハ創ト心臟
 トノ間ニテ動脈ノ本幹ヲ指壓スルモ止マサルトキハ「ガーゼ」ヲ
 創ニ當テ其ノ上ヲ指ニテ強壓シ衛生部員ノ來リテ處置スルヲ待
 ツヘシ但シ指ヲ直ニ創ニ挿入シテ壓スルヲ許サス

第四章 骨折及脫臼

上肢又ハ下肢ノ骨折レタル主ナル徵候ハ該肢ノ形狀常ヲ變シ多
 少短クナリ且曲リ其ノ部ノ痛ムト腫脹セルトニテ知ルヘシ又患
 者自ラ該肢ヲ動カスコト能ハス之ヲ動カサントスルトキハ劇シ
 キ痛ヲ覺ユルモノナリ
 骨ノ折レタル處ノ皮膚ニ創アラハ其ノ創ニ觸ル可ラサルハ勿論
 其ノ折レタルヤ否ヤヲ知ラント欲シテ傷肢ヲ動カシ骨端ノ軋音
 ヲ試ミ又ハ其ノ曲リタルヲ直サントスルコトハ嚴禁ナリ若衛生
 部員在ラサル際上肢又ハ下肢ノ骨折患者ヲ直ニ輸送セサルヲ得
 サルトキハ四人ニテ繃帶ヲ施スコトヲ得ヘシ即チ甲ハ患部ヨリ
 上ヲ持チ乙ハ患部ヨリ下ヲ持チ自然ノ方向ニ於テ徐ニ牽引シツ

ツ擡ケ居ル間ニ丙丁ヲシテ副木縋帶ヲ施サシメ折骨端ノ動搖ヲ防クヘシ總テ副木ヲ用フルニハ綿「ガーゼ」布片ノ如キ軟カナルモノヲ副木ノ裏面及前後ノ兩端ニ當テテ壓迫ヲ平等ナラシメ皮膚ノ損傷ヲ防クヘシ之ヲ固定スルニハ三角巾或ハ卷軸帶ヲ以テス若此等ノモノナキトキハ袴帶、手巾、襟、革紐等ヲ假用シテ可ナリ又副木ナキトキハ銃劍、劍鞘、樹枝、高粱稈、杉皮、屋根板、厚紙、「ブリキ」、簾、蓆等ヲ適宜假用スヘシ

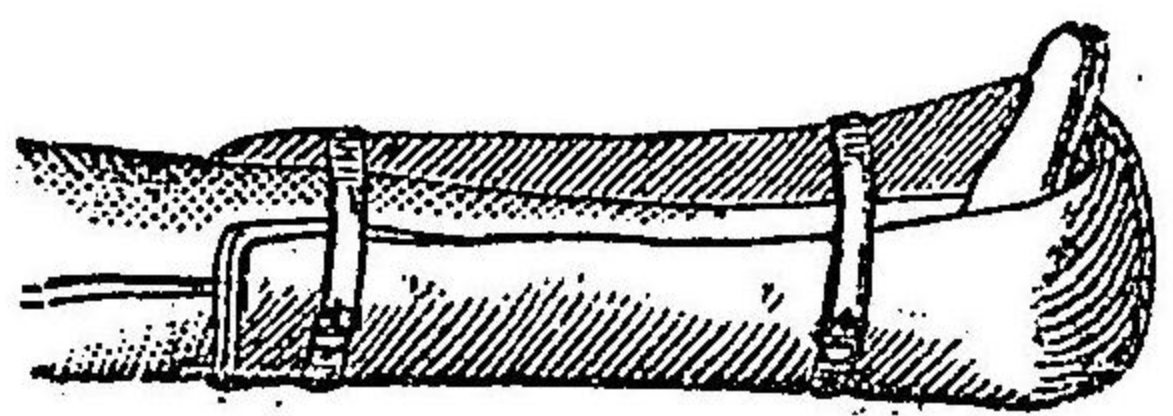
上膊又ハ前膊ノ骨折レタルトキハ第三十六圖ニ示スカ如ク内面ニ當ツル副木ハ其ノ外面ニ當ツルモノヨリ稍短キヲ良トス此ノ部ニ於ケル副木縋帶終レハ第十四圖(丙)又ハ第十六圖ニ示ス



第三十六圖

カ如ク前膊ヲ胸ニ吊リ又ハ健側ノ手ニテ支ヘ持タシムヘシ

第三十七圖



大腿ノ下部又ハ下腿ノ骨折シタルトキハ第三十七圖ニ示スカ如ク卷キタル外套又ハ長キ藁束ノ一端ヲ大腿中央ノ内側ニ當テ足蹠ヲ經テ他ノ一端ヲ大腿中央ノ外側ニ達セシメ固ク縛ルカ又ハ下肢ノ内側ニ大腿ノ中央ニ達スル副木ヲ當テ外側ニ腰ノ上部ニ達スル副木ヲ當テ固ク縛ルヘシ「大腿ノ上部骨折シタルトキハ其ノ處置衛生部員ニアラサレハ爲シ能ハサルカ故ニ